インフィニットストラトス　３・２・１、フォーゼ来たーーー！！

ケン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
インフィニットストラトス　３・２・１、フォーゼ来たーーー！！

【Ｎコード】
Ｎ６５１３Ｚ

【作者名】
ケン

【あらすじ】
宇宙大好き少年、織斑一夏と同じく宇宙大好き少女
如月太陽が出会うとき青春スイッチが押される。
その手で宇宙をつかみとれ！！青春スイッチオン！！！

プロローグ　初・変・身

一人の少年が縄で縛られ人質にされていた。
少年の名は織斑一夏。学校の帰り道でいきなり目の前に黒い車が止まり
黒服を着た男たちに無理やり車に押し込まれたわけである。
そして、隣にはもう一人少女が人質にされていた。
名は如月太陽。理由は定かではないが連れ込まれていた。
「ねえ、大丈夫？」
一夏は心配そうに少女に尋ねるが少女はけろっとした感じで答えた。
「うん。大丈夫だよ。誘拐なんてもうこれで何度目か」
「はは！！一緒だね。僕も結構な回数、誘拐されてるよ」
二人は何故か意気投合し、危機的状況にもかかわらず
喋って笑っていた。自分の家族の事や学校の事を
笑って喋っていた。

「ねえ、ここから二人で抜け出しちゃおか」
突然、一夏がそう言いだすと少女は一夏に疑問をぶつけた。
「出来るの？そんな事」
「見ててよ」
一夏は腕をくねらせていくと数秒後には縄が解けてしまっていた。
所望、縄抜けである。あまりに誘拐され過ぎたため自然と身につけてしまったのである。
「おお！！凄い！！」
「君のもほどいてあげるよ」
一夏は立ち上がり少女の縄もほどき周りに男たちがいないのを
確認してからその場を立ち去った。

「さて、ここからどうしようか」
「ん～ひとまず、私のカバ」
少女が言いかけたとたんに壁が突然、爆発を起こし大穴があいた。
「きゃあ！！」
「な、何！？」
「見つけたぞ！！くそ餓鬼ども！！」
「げ！逃げよう！！」
一夏は少女の手を取り走っていくが子供が大人を撒ける訳もなく
一つの部屋に追い込まれてしまった。
「たっく！なんでこんなガキどもをあいつらはさらってくれなんて
言ったのかね～。ま、良いや。どうせ、お前らはここで死ぬから」
男性は服のポケットからスイッチの様なものを取りだした。
形状はアイスクリームのコーンに似た形をしておりてっぺんには
プッシュ式の赤いスイッチがあった。しかし、すぐに形状が変化した。
『ラスト・ワン』
「な、なんなの！？あれ」
「ひゃはははは！！死ね、くそ餓鬼ども！！」
男性がスイッチを押すと星座の様なものが浮かび上がり、男性が眉
に包まれて
怪人から出てきて、精神がゾディアーツとなった。
「あの星座はうみへび座のゾディアーツ！！」
「な、何なの！？そのゾ、ゾデアーツって」
「ゾディアーツ！！それよりも私のカバンはないの？」
少女が部屋を見渡すと机の上にスーツケースの様な大きなカバンが
見えた。
「あ、あった！！私のカバン！！」
少女はその鞄を取り開け中からベルトの様なものが出てきた。
その形状はスイッチが４つくぼみに入っており右端にはレバーがあ

った。
「死ね！！！」
ゾディアーツが大きな剣を召喚し二人を切りかかるが一夏が少女を護ろうと横に押し出した。
「え？君！！」
その剣は一夏に向け、まっすぐ降ろされた。
{あ、僕死んじゃうのかな}
一夏が目をつむり痛みに耐えるが一向に痛みは来なかった。
不思議に思い目を開けるとそこには、壁にまで吹き飛ばされうずくまっていたゾディアーツがいた。
「くそ！！なんなんだ！？さっきのは！！」
少女のカバンに入っていたベルトのスイッチが光り輝いていたのだ。
「もしかして…君！！」
「な、何？」
少女が慌てて一夏に近寄るとドライバーを一夏に持たせた。
するとスイッチは先ほどよりも激しく輝きだした。

「やっぱり。ねえ、君。まだ、生きたいよね？」
「……当たり前だよ！！僕は生きたい！！生きてまたお姉ちゃんに会いたい！！」
「うん。だったら、このベルトを使って」
「これを？」
「うん。これを使えばあいつを倒せる」
少女は一夏にドライバーを手渡した。
「うん、分かった。後僕は君っていう名前じゃない。織斑一夏だよ」
「私は如月太陽」
一夏はベルトを受け取りお腹のあたりに持っていくと
自動的に腰に巻きついた。
「これ、どう使うの？」
「赤いスイッチを４つ押して変身って言って

右のレバーを引いてみて。こう！！！」
太陽は変身の仕方をジェスチャーで一夏に教えた。
「う、うん」
一夏は４つの赤いスイッチを順番に押していくと音が鳴りだし
４つ押すとカウントが始まった。
『３・２・１』
「え？え？」
「そのままレバーを引いて！！」
「う、うん。えっと、変身！！」
一夏がレバーを引くと辺りに突風が吹き荒れた。
「く！！」
「きゃ！！」
風が収まるとそこには…
「な、何これ」
「それがフォーゼ！！」
「フォ、フォーゼだと！？ここで潰す！！」
怪人が驚いたようにフォーゼの名を言うと剣を片手に
襲いかかってきた。

「うぉぉぉぉぉ！！！」
「え、えっと。もう、どうにでもなれ！！」
一夏がオレンジ色の１と書かれたスイッチを押すと音声が流れ
右腕にロケットが現れた。
『ロケット・オン』
「おぉぉぉぉ！！！ほ、本物のロケットだ～」
腕のロケットが本物の様にジェット噴射をし始め
一夏は怪人を巻き込みながら壁を突き破り外へと出ていった。
「うひゃ～あれがフォーゼの力か～」

「おぉぉぉぉ～目、目がまわる～」
「ふざけやがって！！」
外にゾディアーツを追い出したのは良いが
ロケットの余りにも噴射が強く勝手に回っていた。
変身して背が伸長したとはいえ、まだ一夏は５歳である。
そこに怪人が勝手に突っ込みロケットパンチを勝手に受けて吹き飛んだ。
一夏はどうにかしてロケットスイッチをＯＦＦにしたが酔ってしまった。
「あ～気持ち悪い」
丁度、しゃがんだとこに怪人の剣が過ぎていった。
「おりゃ！！」
「ぐぅ！！」
一夏は怪人に蹴りを入れて距離を取った。
「他には～これだ！！」
『ランチャー・オン』
右足にミサイルが搭載されたランチャーが出てきた。
「ミサイルといえばこれでしょ！！」
『レーダー・オン』
ベルトの左のスイッチを入れると左腕にレーダーが出てきた。
「よし。ロックオン！！喰らえ！！」
ミサイルが勢いよく怪人に向かって発射され怪人に直撃し空中に上がった。
「うわぁぁぁぁぁぁ！！！」
「よっしゃ！！止めだ！！」
『ロケット、ドリル・オン』
「このレバーを押すと」
『ロケット、ドリル・リミットブレイク』
レバーをもう一度引くとベルトから電子音声が流れ

ロケットのジェット噴射で空に浮きあがり左足のドリルが勢いよく回転しだした。
「喰らえ！！ロケットドリルキーーーーーック！！！」
「ぐわぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！」
怪人はドリルに貫かれ大爆発を起こしスイッチを残して消え去った。

「おぉぉぉ～目、目がまわる～」
一夏はドリルが地面に刺さりそのまま回転をしていた。
「と、止まった～」
「やったね～一夏！！」
隠れていた太陽が一夏の傍に嬉しそうにして近寄って来た。
「うん！！で、このスイッチはどうしたら」
「これはね。こうするの」
太陽がもう一度スイッチを押すと消滅してしまった。
「ひと先ず、もうすぐ迎えが来るから
待っていようよ！！さっき、家の人を呼んだから」
「うん、ん？」
一夏は突然、何かに気付いた様に後ろを振り返った。
「どうかしたの？一夏」
「いや、さっき誰かに見られてたような気が」
「誰もいないよ。気の所為でしょ」
「そうだね！！」
こうして二人は無事に帰る事が出来た。

プロローグ　初・変・身（後書き）

こんばんわ、ケンです！！
４作品目となる作品です！！
頑張っていきますので応援よりしくっす！！

プロローグ2　緊・急・事・態

ある建物の一室に丸いドーム状の椅子に座り先程のスイッチを持った男性がいた。
目の前にはクロークを着たサソリの様な姿のゾディーアツが跪いており
その後ろには同じくクロークを着たゾディアーツが並んでいた。
「報告を頼むよ、スコーピオン」
「はい。下部組織からあれを所持している人間を捕らえたと報告が入り向かったところどうやら、あれは一人の少年の手に渡りさらにはフォーゼに変身しました」
「ほ～。という事はその少年も関係者かい？」
「いえ。どうやら一般人の様です」
「何？」
「どうやら別の組織に誘拐された少年のいた場所が偶然下部組織と同じだったみたいです」
「そうか…これは面白い事になってきたな」
「如何しましょう」
「君には監視を頼みたい。出来るね？」
「かしこまりました」

一夏達はあれから無事に太陽の家に保護され今は太陽の家で休んでいた。
「ひぇ～大きいんだね。太陽ちゃんの家って」
「そうかな～？こんな物じゃないの？」
太陽の家は普通の一軒家に比べるとはるかに大きく

４階建てでさらには一部屋に一台テレビが置いてあった。
「太陽ちゃんの両親て何かしてるの？」
「……」
「太陽ちゃん？」
一夏が不思議に思い振り向いてみると太陽は涙を流していた。
「た、太陽ちゃん！？どうかしたの！？」
「私のお父さんはね、私が小さい時に死んじゃったの」
「ご、ごめん」
「ううん。良いよ、一夏は知らなかったんだし。それで、
お母さんはね会社の社長さんなんだって」
「お母さんのお仕事知らないの？」
「うん。お母さん、忙しくてたまにしか帰ってこないし帰ってきたとしても
また、すぐにお仕事に行っちゃうし」
「じゃあ、この家には太陽ちゃん一人だけなの？」
「うん。家賃とかはおじいちゃん達が払ってくれてて
家事とかは私が一人でしてるの」
「寂しくないの？」
「寂しいよ」
太陽は涙を手でぬぐいながら話しているが涙は一向に
止まらずに服を濡らしていった。
「だったら僕が傍にいてあげる！！」
「え？」
一夏のいきなりの叫びに驚き顔を上げると近くに
一夏の顔があり太陽は顔を少し赤くしてしまった。
「君が寂しいなら僕がその寂しさを和らげてあげる！！
それにまた、太陽ちゃんゾディーアツに襲われてもいけないから
僕がフォーゼになって護ってあげる！！」
「本当？」
「うん！！ほんとだよ！！」

「ありがと！！一夏！！！」
太陽の笑顔に一夏は少し顔を赤くした。
それから、一夏は一旦家に帰り心配している千冬に無事な事を報告し
その翌日から一夏と太陽は一緒に遊ぶ間柄となった。

それから１０年後、事態は一気に急変する事となる。
一夏は幼馴染となった太陽の家でテレビを見ていた。
その手にはロケットスイッチが握られており ｏｎ，ｏｆｆを
ずっと繰り返していた。どうやら癖の様である。
画面には世界で初めて男性でＩＳを動かした男、織斑一夏と表示さ
れており
どのチャンネルに回しても同じ顔写真が映っていた。
「不幸だ」
「いつからあなたはツンツン頭の神様の奇跡すら打ち消す
右腕を持つ少年になったのよ」
後ろから声が聞こえたが一夏は後ろを向かずにテレビを見ながら答
えた。
ちなみに今の太陽の容姿は科学者が着るような白衣を着ていた。
「は～なんで俺あの時、部屋間違えたんだろ」
「自業自得ね。ほら、新スイッチのテストをするから
ラビットハッチに行きましょ」
「へ～い」
一夏はフォーゼドライバーを持ち太陽と一緒にタンスに入ると
その中は月面基地、ラビットハッチに繋がっておりそこでは
太陽がスイッチの調整を行い、テストをするという事だった。

「じゃ、変身しちゃって」
「おっけ～」
一夏はドライバーを着け赤いスイッチを押していった。
『３・２・１』
「変身！！」
レバーを引くと一夏はフォーゼとなっていた。
「よし、今日テストするのはＮＯ５のマジックハンドスイッチよ」
「了解」
一夏はロケットスイッチを取りマジックハンドスイッチに交換しスイッチを入れた。
『マジックハンド』
「よっと」
『マジックハンド・オン』
右腕に出てきたのは伸縮自在のアームが出てきた。
「へ～これ伸びるんだな」
『まあね。それで、人も持ったり投げ飛ばしたりできるわよ』
「そっか～にしても明日から一緒にＩＳ学園か～」
『そうね。一夏は嬉しい？』
「勿論。嬉しいに決まってんだろ」
『そ、そっか。じゃあ、今日はここ迄にして明日に備えて寝よう！！』
「了解」
明日はＩＳ学園の入学式である。
どんな生活が待っているのかはまだ二人には分からない事である。

プロローグ2　緊・急・事・態（後書き）

こんばんわ、ケンです！！
連続更新でございます！！
感想もお待ちしております！！
それでは！！

第1話　大・遅・刻

ある部屋にけたましく目覚ましの音が鳴り響いていた。
「あ～眠い。今何時だよ……なんでだろ。６という数字が８に見えるのは気のせいだろうか」
一夏はテレビのリモコンを操作し電源をつけると左上にはデジタル表示で８時１５分とあった。ちなみにＩＳ学園の登校時間は８時２０分らしい。
「寝坊だーーーーーー！！！！！」
織斑一夏の朝はこうして始まった。

一夏はあれから3分で準備をし愛車のマシンマッシグラーというネーミングセンスゼロのバイクに乗りＩＳ学園に向かっていた。
テーブルには置手紙がありそこには、きれいな字で先に行ってるとだけ書かれていた。
「なんで太陽の奴見捨てたんだよ」
一夏はぶつぶつとぼやきながら運転していた。
「ああ、あれかＩＳ学園は……ん？あれは」
遠くの方に青いＩＳと赤色の何かが戦っているのが見えた。
「ちっ！！朝っぱらからゾディアーツですか」
一夏は校門を無理やりバイクで飛び越えるとゾディアーツに向かい最高速度で体当たりをし吹き飛ばした。

ＩＳ学園生徒会長の更識楯無は入学式も終わり教室に戻ろうとした時突然、ゾディアーツに襲われた。
「な、何あれ！？」

『更識楯無…許さない！！！！』
楯無は慌ててミステリアスレイディを展開し、武装を展開するが
一方的にゾディアーツの怪光線を何発も喰らい
エネルギーが減少していく一方だった。
「はあ、はあ、ＩＳが圧倒されるなんて、あいつなんなのよ」
『ははは！！生徒会長もこの程度か、死ね！！！』
赤色のゾディアーツに体が青く光りだし怪光線が発射される瞬間に
横からバイクが突っ込みゾディアーツを突き飛ばした。
『だ、誰だ！！』
「ｗｈｏ　ａｍ　Ｉ？」
『邪魔する者は全て潰す！！！』
ゾディアーツはヘルメットをかぶった少年に殴りかかるがそれをかわし、
後ろに回り込み蹴りを入れた。
『きゃ！！』
「き、君は一体誰なの？」
「いいのがあんじゃん。使わせてもらうぞ」
少年は楯無が先程まで使用していたソードを拾い武器として使った。
「さあ、行くぜ、行くぜ！！」
少年はソードで何度もゾディアーツを切ってひくたびに火花が散っていった。
相手も攻撃を加えようとするがそれをさせる前にソードで切られていき
攻撃が出来なかった。
『あ、あんたＩＳの武装を生身で使うとか異常でしょ！！！』
「鍛えてるから」
『くそ！！』
一夏が近寄ろうとした瞬間にゾディアーツは体から光線を
出しその爆煙でどこかに消え去ってしまった。

「逃げたか…ありがとさん。これ返すわ」
「え、ええ。貴方一体何者なの？」
「俺は」
少年が言いかけた時頭に物凄い衝撃が伝わり
頭を抱えて蹲ってしまった。ヘルメットをしているのにも拘らず。
「馬鹿ものが。１５であるにもかかわらずバイクを運転するな！！」
「げ！なんでここに」
振り向くとそこには織斑千冬がいた。
「ヘルメットを取らんか、一夏」
一夏はヘルメットを外すともう一度出席簿で頭を叩かれた。
「痛い！！何すんですか！！」
「遅刻の罰だ、馬鹿もの。さっさと教室に来い」
「へ～い。じゃあな、名も知らない女の子」
一夏は千冬に連れられ教室に向かった。驚きの連続で
頭の処理能力が追いつかない楯無を放っておいて。

千冬に連れられた一夏は１組の前で止められた。
「ここが貴様の教室だ」
「へ～い」
また、出席簿アタックを頭に当てられた。
「返事ははいだ」
「ひゃい」
一夏は頭をさすりながら千冬と共に教室に入った。
すると次の瞬間、とても甲高い声が教室中に響き渡った。
どうやら、自己紹介をしていたみたいだ。
「「「「「きゃーーーーーー！！！！！！！！！」」」」」
「千冬様よ！！！」

「私、ずっとファンでした！！！」
「お姉さまの為なら死ねます！！！」
「は～毎年、毎年、私のクラスに馬鹿どもを集めているのか？
静かにしろ！！小娘共！！！！！」
千冬の一括を喰らうと先程まであれだけ騒いでいた生徒全員が口を閉じた。
「私の仕事は貴様らを優秀な操縦者にする事だ！！！
私の言う事は全て聞け！！！理解できなくても頭につぎ込め！！！
良いな！！！」
「「「「「はい！！！！！」」」」」
「よろしい。授業に入る前に織斑、挨拶をしろ」
「は～い。俺の名は織斑一夏。趣味は天体観測。
ＩＳ学園の生徒全員と友達になる男だ！！よろしく！！！」
「「「「「……」」」」」
「…まあ良い。さっさと座れ、授業を始める」
{あんたが自己紹介しろって言ったんじゃ}
「誰が立って挨拶をしろといった」
「心を読まないでください」
こうして授業がようやく始まった。

授業の終了の合図の鐘が鳴ると同時に一夏は机にへばりついた。
「意味不。こんなもん理解できんのかよ」
「あなた以外全員理解してるよ」
「太陽か……起こしてくれよ！！！」
「私は何度も起こしたけど起きない貴方が悪い」
「そうだけどさ～」
「それよりも朝のゾディアーツの件だけど」
「ああ。目星はついたのか？」
二人は周りに聞かれない様にひそひそと喋り始めた。

「何人かはね。また、後で言うわ」
「了解」
太陽が席についたと同時に始まりのチャイムが鳴り響いた。
ちなみに太陽の席は一夏の列の最後尾である。

「…なのでＩＳを扱う時の罰則は国によって違うので
注意しておいてくださいね～。時間もいい塩梅なので終わりにしま
しょう」
２時間目が終わった時には一夏は見事に撃沈されていた。
まったく内容が理解できずにスイッチをいじってたら千冬に出席簿
で叩かれ
山田先生（１組の副担任である。ちなみに担任は千冬）に全部分か
らないと言えば
また、叩かれた。そのせいで頭皮がヒリヒリしていた。
「ちょっと、よろしくて？」
「あ？」
後ろを振り向くと金髪タテマキロールの少女が立っていた。

第1話　大・遅・刻（後書き）

こんにちわ、ケンです。
いかがでしたか？
今は学校で更新していま～す。
感想もお待ちしております。
それでは、さよなら

第2話　事・件・調・査

「ちょっと、よろしくて？」
「あ？」
「まあ！なんですの。その返事は。私に話しかけられたのですからそれ相応の返事があるでしょう」
「お前誰だよ」
「知らない！？このイギリス代表候補生、セシリアオルコットを！！」
セシリアは腰に手を置きながら威張った。いかにも女尊男卑の影響をもろに受け、
威張っている女性の良い例だった。
「……太陽～腹減った～」
一夏はセシリアを無視して太陽のもとに食べ物を貰うべく近づいていった。
「ちょ、ちょっと無視ですの！？」
「悪いけど貴方みたいな奴、一夏は大っ嫌いだから無視する習性があるの」
「な、何ですの！？貴方は！！」
「さっき自己紹介したでしょうが」
「太陽～何か持ってないか？」

「何もないわよ」
「残念～」
「あ、貴方達ねえ！！！」
セシリアが言いかけた瞬間にチャイムが鳴り響いた。
セシリアはかなりご立腹の様で地団駄を踏みながら叫んだ。
「また、来ますわ！！！」
そう言いズカズカと座席に戻り一夏も座席に戻っていった。

「では、授業を始める。あ、その前にクラス代表を決めないとな」
千冬が思い出したかのように言い始めた。
「クラス代表はまあ、言えば委員長の様なものだ。生徒会の会議などにも
出席してもらう。一度決まれば1年は変更できないから注意しろ。
誰かいないか？自薦、他薦どちらでも構わんぞ」
少し沈黙が流れた後に一人の女子生徒が手を挙げた。
「はい！織斑君を推薦します！！」
「あたしも！！」
一気に教室のほぼ全員が一夏を推薦する状況となった。
「そんなの納得がいきませんわ！！」
セシリアが机を叩いて勢いよく立ちあがった。
「本来クラス代表はクラスで最も強い人がなるものなのに
そんなＩＳに関しては全くのド素人でさらには知性も、
ないような極東のサルに任せてはいい恥さらしですわ！！
いいですか！？私はここにＩＳを学びに来ているのです！！
サーカスを見に来ているわけでは」
セシリアが言いかけた瞬間に、顔の横を何かがものすごい速さで
通り壁にぶつかった音が響いた。
生徒全員は青ざめながら、中には体を震わし恐怖を示す生徒もいる
中で
何かを壁に投げた張本人の方向を見た。

「さっきからゴチャゴチャとうるさいな～イギリスも
飯マズ王者の座に何年居座ってんだよ」
「わ、私の祖国を侮辱しますの！？」
「あんたが先にしたんでしょうが」
後ろから声が聞こえたかと思うと太陽が立っていた。
太陽も相当いらついてるらしく声にいらつきが混じっているのが
こちらからでも分かった。

「私は侮辱などしていませんわ！！」
「自分の事は棚上げか。代表候補性が聞いて呆れるわね～」
「こんなやつがクラスメイトかと思うとこの先が思いやられるな」
「け、決闘ですわ！！」
「私はパスね。体弱いからＩＳで戦えないし」
太陽は生まれつき体が弱く運動などは一切できない虚弱体質だった。
しかし、なぜかＩＳの適正はＢなので合格したが
来年は整備課に進もうとしているらしい。
「俺もいいや。どうせ俺が勝つし」
「あ、貴方ねえ！！」
「そこまでにしろ、馬鹿ども。立候補者は織斑とオルコットに
両名だ。二人は来週に模擬戦をして勝ったほうがクラス代表になれ。
意義は認めん！！それと織斑、机は投げるもんじゃないぞ」
一夏の席には机があるはずなのだが机はなく後ろの壁に投げられて
いた。
その光景を見た女子生徒は顔を引きつらせ心の中で、織斑君は怒ら
せてはいけない
という１組特有の暗黙のルールが完成した。
こうして来週に模擬戦をすることが決まった。

放課後、一夏は帰り支度をしていた。
ＩＳ学園は全寮制なのだが寮の部屋がまだ、決まっていないという
ので
１週間は自宅登校となっている。
「一夏～帰るよ～」
「太陽は確か寮じゃなかったのか？」
「そうだよ～一夏もだよ」
「いや、俺は」
「さっき山田先生から聞いたんだけど政府からの通達で

寮住まいにしろってさ。それで、一夏は私と同室だよ」
「分かった。ついでに部屋であの件について話すか」
「おっけ～」

一夏と太陽は自室に入るとなぜか、部屋にタンスがあった。
「なんでここにこれがあるんだ？」
「ラビットハッチに繋がってるのはこれだけだからね。運んでもらった」
「ん～了解。じゃ、入るか」
二人は玄関のドアのカギが閉まってるのを確認し
タンスに入るとその中はラビットハッチに繋がっていた。
中は案外広く、着きに出られる出口やアストロスイッチを調整する
調整室に一夏がテストをする部屋もあり
テーブルや椅子も完備されていた。
「まず、あのゾディアーツはオリオンゾディーツよ。
スイッチャーの目星は今のところ二人」
太陽は持っていたカバンを開けるとそれは普通のカバンではなく
アストロスイッチを収納できさらにはデータ分析もできる特殊なもの
のだった。
「襲われた人を考慮に入れると怪しいのはここの会長の妹の
更識簪、それともう一人は3年の鶴見桜。理由は妹さんのほうは
姉との間に溝があるの。3年のほうは更識楯無の事を何故か憎んで
いるわ」
「その理由は？」
「まだ、分からないわ。情報が少なすぎるわね」
「ん～なら、俺も探してみるか」
一夏は椅子から立ち上がり出口へと向かっていった。
「どこに行くの？」

「ちょっと事情聴取。太陽は引き続き頼むわ」
「了解」

一夏は今、生徒会室の前にいた。
理由は会長の楯無に話を聞くためであった。
「失礼しま～す」
「は～いって君は今朝の」
生徒会室には楯無一人だけが椅子に座っていた。
「あんたに聞きたいことがあるんだけどいいか」
「ええ、いいわよ。座って」
「ひとまずあんたに聞きたいのは鶴見桜の事についてだ」
「鶴見さんがどうかしたの？」
「あんたさ～鶴見ってやつに恨みとか、かわれてないか？」
「……」
楯無は何か思い当たる節があるのか苦い顔をしていた。
「何かあるのか？」
「ええ、まあね。あれは去年の話ね。彼女は前の会長よ」
「ふんふん」
「ここの会長は最強の人がなるものなんだけど、私はその人と
勝負して勝っちゃったのよね～」
「別にそれだけなら」
「でも、その勝ち方がいけなかった。みんなの前で私は
その人に圧勝しちゃったのよ。それで、その人はみんなに」
「みんなに笑い者にされたというわけね。２年のくせに
１年に負けた奴っていうことで」
「うん。それで何回も謝りに行ったんだけど取り合ってくれなくて」
「そういうことね…あんたは仲直りしたいのか？」
「勿論よ。このまま、うやむやにしちゃいけないし」

「だったら俺に任せろ」
「え？」
「俺にいい考えがある」
一夏は自分の考えに自信があるのかその顔は余裕に満ちていた。

第2話　事・件・調・査（後書き）

こんばんわ、ケンです。
如何でしたか？できれば感想を頂ければ幸いです。
作者自身は感想でパワーアップしますから。
ま、感想を送るのは読者の皆様なのでこんな事を言ったら
駄目ですね。オリジナルのゾディアーツも随時募集しております。
それでは

第3話　ラストワン

現時刻は７：３０.
第６アリーナに一人の女子生徒が佇んでいた。
名前は鶴
リボンの色を見るとどうやら3年生の様だ。
彼女の右手には一枚の手紙が握られており内容は明日の
７：３０に第６アリーナに来てくれというものだった。
「誰がこの手紙を出したのよ」
「それは私が出しました」
急に声が聞こえ後ろを見るとそこには更識楯無が立っていた。
「何の用よ！！また、謝りに来たって言うの！？」
「はい。あの時は」
「黙れ！！あんたのその顔が気に入らないのよ！！あの時だってそうだった！！
あんたはそうやって上から目線で他人を見下しているのよ！！」
「そ、そんな事は」
「あんたが気づいていないだけよ！！私以外にも貴方を気に入らない奴なんか
この学校にいっぱいいるのよ！！」
「あ～それは賛成だな」
楯無の後ろにはいつのまにか一夏が立っておりその隣には
太陽もカバンを持ち立っていた。

「誰よ、あんた！！」
「俺もこの人に会った時にまず初めに感じたのは
他人を見下してるって感じがしたかな」
「……」
楯無は顔を俯かせたままあげようとしなかった。

「でもさ、こいつは良い所もあるんだぜ」
「良いところ！？」
「そう。こいつはあんたに勝った日からずっと周りの誤解を解いていっているんだよ。
あの人は弱くなんかないって。私だって負けかけたって」
「そ、そんな事！！」
「別に嘘と思うならずっと思っとけ。でもな、スイッチを使って憂さ晴らしを
しようとするな。それは人間を喰らうぞ」
「う、うるさい、うるさい！！！」
『ラスト・ワン』
桜のゾディアーツスイッチが変化しまるで眼球の様な
おぞましい形に変化した。
「だめ！！それを使ったら自力で元に戻れなくなっちゃうわよ！？」
「おぉぉぉぉぉぉ！！！！！！」
桜がスイッチを押すとオリオン座の星座が浮かび上がり黒い何かに
包まれた後、桜の肉体だけが眉に包まれ外に排出された。
オリオンゾディアーツの姿は先程とは変わっていないが両手に
楯と棍棒のような物が新しく装備されていた。
「太陽。会長さんを安全な所に」
「うん。さ、会長こっちに」
「え、でも彼は」
「大丈夫。あの人は」
一夏はドライバーをつけ赤色のスイッチを順番に押していき４つ
押すとカウントが始まった。
『３・２・１』
「変身！！！！」
レバーを引き腕を空に向かってあげると頭上に輪っかが現れ
煙が吹き出し、煙が晴れるとそこにはフォーゼがいた。
「仮面ライダーだから」

「宇宙来たーーーーーーーーー！！！！！！！」
『な、なんなの貴方は！？』
「仮面ライダーフォーゼ！！タイマンはらせてもらうぜ！！！」
「か、仮面ライダー！？」
一夏はオリオンゾディアーツに向かっていった。

「行くぜ、行くぜ！！」
一夏は連続でパンチを撃つが先程とはけた外れに強くなっており
あまり効果が無かった。
『そんな物効かないわよ！！！』
「うわぁ！！」
一夏はオリオンゾディアーツの棍棒で殴られ吹き飛ばされてしまった。
「くそ～だったら新スイッチだ！！！」
一夏はロケットスイッチを取りマジックハンドスイッチをはめた。
『マジックハンド』
「よっと」
『マジックハンド・オン』
「そんな物で何をするのよ！！」
「こうやるんだよ！！」
一夏は右腕を振り回すとマジックハンドが伸びオリオンゾディアーツに
直撃し怯ませるとそこから何度も叩きつけた。
「くっ！！邪魔なのよ！！」
オリオンゾディアーツはこん棒でマジックハンドをたたき折ろうとしたが
一夏が腕を引きマジックハンドを戻すと空振り隙が出来た。
「もらったぜ！！」
「え、きゃ！！」
一夏はマジックハンドでオリオンゾディアーツを掴むと思いっきり

横に振り回し始めた。
「おらおらおら！！！」
「きゃぁぁぁぁぁぁ！！！！」
「ふっ飛びーーーー！！！！」
オリオンゾディアーツを思いっきり投げ飛ばし壁にぶつけると
レーダースイッチからベルが鳴り響いた。
『レーダー・オン』
『スイッチの場所が分かったわ。左胸にあるわ。奪ってＯＦＦにして頂戴。
でも、ここでの止めは危険だわ』
「どうして？」
『前に解析した時よりも体内にエネルギーが溜められてるの。
それをここで爆発させたらアリーナは軽く吹き飛ぶわよ』
「じゃあ、どうすれば」
『宇宙（そら）でやりなさい』
「空？」
すると後ろからパワーダイザーとバイクが自動でこっちにまで来た。

『マシンをダイザーにセットして』
「分かった」
一夏はバイクに乗りダイザーに向かうとビークルモードだった
ダイザーがタワーモードへと変わった。
『マシンセット。タワーモード』
「おお～発射台か～」
『よし』
太陽が遠隔操作でダイザーの小型ミサイルを放つと
オリオンゾディアーツはミサイルにより空高くあげられた。
『な、なんなのよこれ！！！』
『３・２・１、ブラストオフ』
「行っけーーーー！！！！！」

『きゃぁぁぁぁぁぁ！！！！！』
ダイザーからロケットを飛ばす要領でバイクが宇宙に向けて
オリオンゾディアーツごと空に行った。

「おら！！」
『きゃ！！』
一夏はバイクをその場に乗り捨て、浮かび上がるとロケットとドリルをオンにした。
『ロケット、ドリル・オン』
「いくぜ！！」
『ロケット、ドリル、レーダー・リミットブレイク』
レバーを引くと現段階でオンにしているスイッチの名称が発音されコズミックエナジーがフルチャージされた。
「喰らえ！！ロケットドリル宇宙キーック！！！！」
『きゃぁぁぁぁぁぁ！！！！！』
ドリルで貫かれスイッチを残してオリオンゾディアーツは爆発した。宙に浮いたスイッチを一夏が回収した途端に地球の重力により引っ張られ落下を始めた。
「おぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！何かないのか！？何か～これか！！！」
一夏はレーダースイッチを交換しパラシュートスイッチを付けた。
『パラシュート。パラシュート・オン』
左腕にパラシュートが開かれ速度は落ちゆっくりと落下していった。
「ふぃ～」

アリーナに帰ってきた一夏はゾディアーツスイッチをＯＦＦにするとスイッチが消滅し桜が目を覚ました。
「ん、ん～」

「大丈夫ですか！？鶴見さん！！」
「更識さん…ごめんね」
「え？」
「私貴方のこと勘違いしていたみたい」
「私の方こそごめんなさい。見下すような発言をして」
「いいのよ。これからこの学園を頼むわよ」
「はい！！」
その光景を一夏と太陽はほんわかと眺めていた。
「終わったな」
「うん。帰りましょうか」
一夏と太陽は帰ろうとした時、楯無に呼びとめられた。
「あ、あのありがと！！なんてお礼したらいいか」
「お礼はいらないからさこの事は秘密にしておいてくれ」
「ええ、分かったわ」
「クラス代表戦頑張ってね。一夏君」
「あ～気が向いたらな」
こうして楯無と桜の溝は無事修復された。

第3話　ラストワン（後書き）

こんにちわ、ケンです！！！
如何でしたか？人を怒る時とかはちゃんと冷静に考えないと
いけませんね。オリジナルのゾディアーツも随時募集しております。
それでは

第４話　決・闘・開・始

一夏と太陽は朝早くからラビットハッチでスイッチのテストを行っていた。
『今日のスイッチはＮＯ，９、ホッピングスイッチよ。実戦で使えるか試して頂戴』
「了解」
『ホッピング』
「よっと」
『ホッピング・オン』
スイッチを入れると左足にホッピングが現れたのは良いが突然、跳躍をはじめ狭い部屋の中を壁にぶつかりながらもあっちこっちに飛んでいった。
「な、なんだこれ～」
一夏は慌ててホッピングスイッチを切るとようやく跳躍が止まった。すると部屋に太陽が入ってきてドライバーからホッピングスイッチを取った。
「このホッピングスイッチは使えないわね。調整しても無駄ね」
その言葉を聞いて一夏は太陽からスイッチを奪い取った。
「あ、ちょっと！！」
「この世の中に無駄なもんなんてねえ！！俺が証明してやる！！」
「は～。なら、頑張ってね。そろそろ時間だし行きましょうか」
「おう」
時計は７：３０を示していた。

「織斑、お前の専用機が届くのに少し時間がかかる」
「は？」

４時間目の終わり際に千冬にそう言われた一夏は何を言っているのかさっぱり分からないといった顔をしていた。
「1年生のこの時期に専用機！？」
「良いな、良いな～私も専用機欲しいな～」
やはり女子の皆は専用機が欲しいみたいで一夏の事を羨ましがっていた。
本来専用機は企業の代表か国家代表候補生でないと貰えないと言われており
終始、専用機持ちは特別扱いされている。
すると後ろの方からセシリアの声が聞こえてきた。
「それを聞いて安心しましたわ。訓練機で私に挑んでは
あっという間に終わってしまいますからね。ま、唯一入試試験で
教官を倒した私の実力からすれば当り前ですわね」

「入試試験て教官を倒すやつか？」
「それしかありませんわよ」
「なら、俺も倒したぞ」
「わ、私だけだと聞きましたが」
「それは女子の中ではじゃねえの」
「あ、貴方ねえ！！」
セシリアが突っかかろうとした瞬間にチャイムが鳴り響いた。
「今日はここまでだ」

太陽と一夏は食堂で昼食を取っていた。
食堂のメニューは和・洋・中全てが取りそろえられていた。
「ちょっと良いか？」
「ん？ああ、箒か」
隣にトレイを持った篠之ノ箒が一夏たちの隣に立っていた。

「一緒に食べても良いか？」
「どうぞ、ご勝手に」
箒は一夏の向かい側の席に座ると今日の日替わり定食である
サバ味噌定食を食べ始めた。
「一夏、この女誰？」
「篠之ノ箒、前に話したろ。セカンド幼馴染だよ」
「ああ」
「そんで俺の隣にいるのが如月太陽」
「篠之ノ箒だ。よろしく頼む」
箒が握手を求めようと手を出すが太陽はそれを無視して
昼食を取っていた。
「悪いけど私は一夏としか友達にならないから」
「は？」
「ああ、悪いな。こいつは昔ちょっとあってさ俺にしか懐かないん
だよ」
「そ、そうか」
三人が話していると上級生の生徒がこちらに近づいて来た。
「ねえ、君が織斑君だよね」
「ええ、そうですが」
「代表候補生と模擬戦するんだよね？だったら私が教えてあげよう
か？」
どうやらＩＳに関して教えてあげようとしてるようで
周りの女子生徒は、「先、越された！！」とか言って悔しそうにし
ていた。
「ん～結構です」
「え？何で？織斑君は素人よね？代表候補生をなめたらいけないよ」
「お言葉ですが俺の方が強いんで。それじゃ。行こうぜ、太陽」
「ん～おっけ～」
二人はトレイを返却しそのまま食堂を去っていった。

それから日にちは過ぎていき決闘当日となった。
Ａピットには千冬と麻耶、それに太陽と箒がいた。
しかし、肝心の一夏の姿が見当たらなかった。
「如月、あいつは何をしているんだ」
「一夏は今頃、寝坊だーーーー！！！とか叫んで慌てて
こっちに向かってますよ」
するとピットのドアが開き入ってきたのは慌ててきたようなので
寝癖もそのままな一夏がＩＳスーツを着て入ってきた。
そこにすかさず千冬の出席簿アタックがさく裂した。
「痛い！！！何すんですか！？」
「遅刻の罰だ。馬鹿もの」
「ですが、肝心の俺の専用機持遅刻してますけど」
すると奥の方から麻耶が一夏の名を連呼しながら
こっちに向かって走ってきた。
「織斑君、織斑君、織斑君！！！」
「落ち着け、山田君」
「は、はい！！ふ～。織斑君の専用機が届きましたよ！！」
「そうですか。で、どこに？」
「これが織斑君の専用機、白式です！！！」
ピットの倉庫が開くとそこには無駄な色が無い
白一色のＩＳが鎮座していた。

「へ～これが白式か～」
「織斑、時間がない。初期化、最適化は実戦で行え」
「了解」
一夏が白式を纏うとまるで待ち望んでいたかのように
白式が悲鳴を上げた。しかし、この悲鳴は一夏以外には

聞こえていなかった。
〜そうか、そんなに嬉しいか。俺も嬉しいよ〜
「一夏、調子はどうだ」
「最高の気分だよ。姉さん」
「そうか」
ＩＳのハイパーセンサーでないと分からないくらいに千冬が
小さく微笑んだ。
「太陽、箒、行ってくるわ」
「ああ、勝ってこい！！！」
「ま、楽に行ってきなさいな」
一夏はピットからフィールドへと出た。

フィールドには既にブルー・ティアーズを纏ったセシリアがいた。
「あら、よく逃げなかったですわね。貴方にハンデをあげますわ」
「あ？」
「私が全力で戦えば貴方がぼろ負けするのは自明の理。
ですから、ハンデを差し上げますわ」
「は〜。入らねえよそんなもん。全力で来い」
「良いですわ。後悔させてあげますわ！！」
会場に始まりを告げるブザーが鳴り響いた。
「いきますわよ！！」
セシリアは手始めに大きなライフル、スターライトｍｋＩＩＩをコ
ールし
一夏に向けて発射した。
それを一夏はギリギリでかわすとセシリアは一瞬、驚いたような顔
をしたが
すぐさま冷静になり攻撃の手を激しくした。
「さあ、踊りなさい！！私とブルティアーズが奏でるワルツで！！」
「おどりは苦手なんだよな〜」

一方ピットでは４人が観戦していたが箒だけが何故かイライラしていた。
「何故、あいつは攻撃をしないのだ！！それよりも如月！！何故、貴様は試合を見ないんだ！！！」
太陽は椅子に座り宇宙についての論文を見ていた。
実は太陽はわずか１４歳で国にも認められた天文学者であった。
今の研究対象は専らコズミックエナジーである。
「だって明らかにこの試合は一夏が勝つし、そもそも一夏と闘うんなら
代表候補生じゃ無理。代表でもヴァルキリークラスでようやく勝負になるって言う感じかな」
「如月、何故貴様はそう言える」
千冬はなぜ、そこまで一夏を評価しているのかと聞いたが逆に太陽はこう聞き返した。
「織斑先生は一夏の事はどう思いますか？」
「奴はＩＳに関しては完全に素人だ。今の実力では代表候補生と戦えても勝つことはできんだろう」
「ふ～ん。ま、良いや。一つだけ言っておきますね。この世界で一夏ほど経験豊富な人物はいませんよ」

「はあ、はあ。試合開始から３５分。粘りますわね」
セシリアは息を切らしていたがそれに対し一夏は少しも息を切らしていなかった。
「そりゃ、どうも」
「ですが、これで終わりにしますわ！！！ブルーティアーズ！！」
セシリアの背中から４機のピットが射出され一斉にレーザーを放ち

始めた。
さらに発射の間隔はバラバラで初心者にはきつい装備だったが
それを一夏は全てかわしていく。
〜こいつは俺の最も隙のある部分を狙ってくるのか。それにこれの
操作中は
奴は他動作不可能になるのか。…そろそろ行くか〜
一夏は武装一覧を見るとそこに表示されていたのはまだ、名もなき
刀だった。
〜ブレード一本…上等！！〜
「遠距離武装の私に近距離武装で挑もうとは愚の骨頂ですわ！！！」
「それはどうかな？」
一夏は近くにあった一機のピットをブレードで一閃すると爆発が起
きた。
「な、そんな！！！」
「射撃技術は認めよう。でも、そのスタイルが教科書通りで
自分オリジナルが無いから折角の利点が台無しだな。例えば」
一夏はセシリアに向けてブレードを投げつけるとセシリアは慌てて
回避したがピットが制御不能になってしまい
その隙に一夏は素手で残りのピットを破壊した。

「な！！」
「ピット操作に集中しすぎて他の事が眼中にないな。さあ、フィナ
ーレと行こうか！！」
一夏はセシリアに一気に近づこうとした瞬間に白式に異変が起こっ
た。
突如、白式が輝きだしたのだ。その輝きは余りにも眩しく
セシリアは目をつむってしまった。それは観客も同じだった。
『待ってたよ。一夏』

第４話　決・闘・開・始（後書き）

こんばんわ、ケンです！！
如何でしたか？感想もお待ちしております。
それでは

第5話　Ｉ　ｗａｓ　ｗａｉｔｉｎｇ　，Ｉｃｈｉｋａ

一夏を包んでいた光が消えるとそこには白式を纏った一夏がいるのだが
白式の形状が先程とは異なり、背中には純白の翼が装備されていた。
「ま、まさか一次移行（ファーストシフト）！？貴方今まで初期設定で戦っていたんですの！？」
セシリアが何か言っているようだが一夏は全く聞かずに武装の一覧を見ていた。
そこにはやはり近接ブレードが１本あるだけなのだがその名前が雪片弐型となっていた。
それは一夏の姉、千冬が使い世界最強へとのし上がった剣だ。
〜そっか〜俺は姉さんの刀を受け継いだのか〜
「雪片弐型」
一夏がそう呟くと雪片弐型が一瞬にして生成され一夏の手元に現れた。
それを一夏は雪片弐型を空に向けてあげそのまま下ろした。
「え？」
一夏が雪片弐型を振り下ろすのと同時にスターライトｍｋ？が何かに切られたように折れてしまった。
「あ、貴方一体なにをしましたの！？」
セシリアは困惑しながらも距離を取り残りのビットからミサイルを放つが
一夏はそれを通り過ぎざまに斬り伏せた。
「俺は昔からそうだ」
「何を言ってますの！？」
一夏は止まったかと思うと突然独り言のように呟きだした。
「幼いころから姉さんに世話ばかり掛けて姉さんの自由を俺が奪っていたんだ。あの人だって恋愛や好きな事だってしたかったのに

俺の為にそれらを全部我慢して俺をここまで育ててくれた。
でも、それも今日でお終いだ。俺は姉さんの剣を
受け継ぎ今度は俺があの人を護る！！あの人だけじゃない！！
俺に少しでも関係がある奴は俺が全員、護る！！」

ピット内では先程の一夏の言葉が響いていた。
『幼いころから姉さんに世話ばかり掛けて姉さんの自由を俺が
奪っていたんだ。あの人だって好きな物や好きな事だってしたかっ
たのに
俺の為にそれらを全部我慢して俺をここまで育ててくれた。
でも、それも今日でお終いだ。俺は姉さんの剣を
受け継ぎ今度は俺があの人を護る！！あの人だけじゃない！！
俺に少しでも関係がある奴は俺が全員、護る！！』
「馬鹿ものが、いつあんな言葉を吐く程成長したのだ」
千冬はその言葉を聞き涙が止まらなかった。
さっきまでまだまだと思っていた弟がこんなにまで成長し
悲しさもあるが嬉しさが多かった。
「先輩、これどうぞ」
「ああ、すまない」
千冬は麻耶からハンカチを受け取り涙をぬぐうがそれでも
涙の量は変わらなかった。

「さっきから貴方は何を言ってますの！？」
「そんなのは忘れろ。これでフィナーレだ」
一夏が雪片弐型を撫でるように触れると
エネルギーがチャージされ青白く光り輝き始めた。

「それと俺は手加減が出来ないから注意しろよ」
一夏が雪片弐型を振るうと同時にセシリアがミサイルを発射したが
エネルギーの斬撃はミサイルを一瞬にして破壊しセシリアに直撃し
試合終了の合図が鳴り響いた。
『試合終了、勝者織斑一夏』
その瞬間、アリーナは凄まじい歓声があがった。
先程の戦いを観戦し頬を赤らめるものや自分も負けていられないと
やる気が出て気合いを入れる者などもいた。
「「「「「きゃーーーーー!!!!!」」」」」
そんな中で悲鳴が聞こえ一夏は振り向くとISが解除され
そのまま真っ逆さまに落ちていくセシリアの姿が見えた。
どうやら先程の一撃で気を失っているようで動こうとしていなかった。

「セシリア!!」
一夏はすぐさま追いかけるが向こうの方が早く、追い付けなかった。
〜さっき言ったじゃねえか!!俺に少しでも関係のある奴は
全員護るって!!こんなとこで破ってたまるかよ!!!〜
『力を貸してあげる』
〜え?〜
頭の中に声が響いたと思うとスラスターが全開放され
先程とは比べ物にならない速度が出てギリギリ、セシリアの腕をつ
かめた。
「あ、危ないとこだった。セシリアは…寝てるか」
一夏は教師達にセシリアを引き渡し自分もピットに向かっていった。

「お帰り一夏」
「ああ、ただいま。太陽」

一夏を迎えたのは二人の幼馴染だった。
「強いんだな、一夏は」
「そりゃどうも。でも、まだまだだな」
「織斑……」
「はい」
「そ、そのなんだ・・・お疲れ様」
千冬は顔をそむけながら恥ずかしそうにしながら言った。
「あ、え、はい。それで、セシリアは」
「オルコットはただ、気絶しただけだ」
「そうですか…あ～疲れた」
「お疲れ様です。織斑君」
振り向くと後ろに白式の待機形態であるガントレットと分厚い本を1冊
持ち後ろに立っていた。
「今は白式は待機形態で眠っていますが織斑君が呼べば
いつでもきますから。それとこれは専用機持ちの制約です。読んで
おいてくださいね」
「分かりました。太陽、箒帰ろうか」
「ああ」
「おっけ～」

その後箒とは部屋の前で別れ今は二人きりとなった。
「あ～疲れた」
一夏は部屋に入るなりベッドに倒れこんだ。
「シャワーくらい浴びてきたら？汗臭いわよ？」
「ん～了解」
一夏は疲れと眠気からふらふらとおぼつかない足取りで
シャワールームに入っていった。
一夏がシャワーを浴び始めたのを確認すると太陽は先程の

模擬戦を録画した物を見ていた。
『俺が護る！！！』
「は～。やっぱり一夏はカッコいいな～」
太陽は顔を赤く染めて体をくねらせながら惚気ていた。
一夏とはもう１０年近くの付き合いである。それに一夏は格好いいので
太陽が惚れるのも時間の問題だったが中学の時に遂に惚れてしまったのである。
理由は入学式でガラの悪い先輩にしつこくナンパされていたところを一夏に助けてもらったのだ。その時にも、太陽は俺が護ると発言しその時に惚れたのであった。

「流石わ一夏ね～長年ゾディアーツと闘って来たせいか戦闘技術は千冬さんにも
引けを足らないほどにまで強くなったし。それにさらにかっこよさに磨きがかかってるし、また惚れ直しちゃった。ふふ」
「あ～スッキリした。悪いけど俺もう寝るわ」
「うん。御休み一夏」
「ああ、御休み」
一夏はよほど疲れていたのかものの数分で眠りについた。
〔ふふふ、一夏。覚悟しててね。絶対に私に惚れさせてあげるから〕
太陽は含み笑いをしながら今日の行動は終えた。

第5話　Ｉ　ｗａｓ　ｗａｉｔｉｎｇ　，Ｉｃｈｉｋａ（後書き）

こんばんわ～宿題に追われているケンです！！
如何でしたか？少し言っておくと今作の白式の
ワンオフアビリティーは零落白夜ではありません！！
どんなものかは出るまでのお楽しみ。
皆さん、考えてみてくださいね～

第6話　努力に失敗はつきもの

「では、1組のクラス代表は織斑一夏君に決定です！！あ、1繋がりで良いですね」
結局あの後、誰からも反対意見等も出ず無事に代表が決まった。
「あ、あの！！」
すると後ろの方から声が聞こえ全員が後ろを振り返るとセシリアが立っていた。
「あ、あの昨日はすみませんでした！！！！」
「は？」
「貴方を侮辱した事ですわ。本当にすみませんでした！！！」
セシリアはもう一度深く頭を下げた。
「ああ、良いよ別に。気にしてないし」
「で、ですが」
「良いったらいいの」
「そうですか……これからよろしくお願いしますわ一夏さん」
「ああ、よろしく頼むわ」
一夏の笑顔を見てセシリアは頬を赤くしていた。
この瞬間、クラスの生徒の心の中である仮定が生まれた。
セシリア・オルコットは織斑一夏に惚れたなという事である。

「「「織斑君、代表就任おめでとーーーーーー！！！！！」」」
放課後に指定した時間に食堂に来てくれと頼まれた一夏は食堂に行くと
クラッカーの音が何個も鳴り響いて地味に焦った。

テーブルには大量の食事が用意されておりどうやら、祝賀会の様なものらしい
お腹が減っていた一夏はありがたくその食事を頂いていった。
「いや～でも、ほんとに1組で良かった～」
「うんうん、ほかのクラスには自慢できるしね！！」
「ならなんでその他クラスの奴らもここにいるんだ？」
「「「気にしない、気にしない！！！」」」
「あっそ」
一夏は食事を再開させると一人の生徒が目の前に来た。
「どうも～新聞部の取材で～す。私はこういうものだよ～」
ご丁寧に渡された名刺には新聞部副部長、黛　薫子と書かれていた。
リボンの色から2年生の様だ。

「今話題の織斑君に一言を頂きます！！！クラス代表になってどうかな～？」
「まあ、地道に頑張っていきますよ」
「んも～暗いな～もっと、皆をドキドキさせる事は言えないかな～例えば俺に触れると火傷するぜとか」
「俺に触れると火傷するぜ～」
「一夏、棒読みで読んでも私はドキドキしないんだからね！！！！」
そう言う太陽だがその頬はうっすらと赤くなっていた。
「ま、それは良いとして次は二人目の専用機持ちのセシリアさんだよ～」
「そうですね、私は」
「一夏さんに惚れちゃったと言ってましたと。じゃあ、写真撮るから二人とも横に並んで～」
「ちょ、ちょっと！！！」
顔を赤くしながら抗議するセシリアをほったらかしにして
薫子は二人を横に並べカメラを構えた。
「じゃあ、いくよ～？１ｏｇ３２＋１ｏｇ３５は？」

「ｌｏｇ３１０」
「正解～」
カメラのシャッターが押されると同時に後ろに全員が入って来ていた。
あの瞬間に入りこむとは恐るべしである。
「み、皆さん！！！」
「セシリアだけに抜け駆けはさせないよ～」
こうして楽しい祝賀会は就寝時間のギリギリまで行われたとさ。

場所は変わり体育館。
ここは屋内スポーツの部活が使っているのだが今のところバスケ部しかないので
事実上のバスケ部専用の物になっていた。
そこに女子生徒が一人いた。
「何であんな奴がレギュラーに選ばれてるのよ！！！！！」
一人の女子生徒がバスケットボールを壁に叩きつけて怒っていた。
「あれだけ練習も休まずに行って体力が付くように毎日走ってるのに！！！！
なんであんな練習をさぼるような奴がレギュラーに選ばれるのよ！！！！！」
女子生徒は怒りをあらわにして何度も壁にバスケットボールを当て続けた。
「はあ、はあ、はあ」
少女がボールを取りに行こうと振り返ったとき後ろに
クロークを着たサソリの怪人が立っていた。
「だ、誰よあんた！？」
「力が欲しいか？」
「え？」
「憎いのだろ？レギュラーに選ばれた者が」
「…ええ、憎い！！！レギュラーになってる奴らが全員憎い！！！

！」
「だったらこれを使うが良い」
サソリの怪人はその少女に一つのゾディアーツスイッチを手渡した。
「宇宙に夢を、星に願いを」
少女はそのスイッチを受け取り赤いプッシュ式のスイッチを押すと星座が浮かび上がりゾディアーツとなった。
「す、凄い！！！力がみなぎってくる！！！ありが、あれ、いない」
お礼を言おうと視線を上げると先程のサソリの怪人はいなかった。
「ふふふ、まあ良いわ。これで、あいつらを痛めつけて私がレギュラーになれる！！！！」

少女がゾディアーツとなる15分前…
「ここがIS学園ね」
髪の毛をツインテールに結び胸はぺったんこの
「あ！？」
ごほん！髪の毛をツインテールに結びかわいらしい少女が校門前に立っていた。
「あれ？あたし何にいらついてんだろ。ま、良いや。総合受付所だったわね」
少女は総合受付所まで歩き編入の手続きをしていた。
「はい、これで手続きはお終いよ。IS学園にようこそ、鳳鈴音さん」
「あ、織斑一夏って何組ですか？」
「ああ、話題の子？あの子なら1組よ」
「ふ～ん。2組のクラス代表って決まってるんですか？」
「ええ、決まってるけどそれがどうしたの？」
「いや～変わってもらおうかなって」
鈴の顔は何かを企んでいる顔をしていた。

第6話　努力に失敗はつきもの（後書き）

こんばんわ～前書きにも書きましたが
努力には必ずしも成功が付いてくるわけではない。
これはよくありますよね～毎日遅くまで勉強したのに
点数が悪かったとかね。ま、そんなのに一々気をまわしてたら
精神がやんじゃいますね。
それよりも如何でしたか？
作者は今回のスイッチャーにはかなり同情できます。
それでは、さようなら～

第7話　目・標・破・壊

次の日の朝、一夏と太陽が教室に入ると一人の
生徒のところに皆が集まっていた。
不思議に思い近づいていくと机に松葉杖が立て掛けられており
どうやら足を怪我しているみたいだった。
「どうかしたのか？」
「実はね、今日朝連してたら怪物に襲われたの」
「怪物……どんな姿していた？」
「え、えっと緑色でまるでカメレオンみたいだった」
その少女は体を震わせ目に涙を浮かべていた。
「ありがと、それと悪いなまた怖い記憶を思い出してもらって」
「ううん、いいよ」

「太陽、どう思う」
二人は周りに聞こえない様に小さな声で話し始めた。
「うん。カメレオンて言う事はカメレオン座のゾディアーツね」
「そうか…調査を頼むわ」
「分かったわ」
その後チャイムが鳴り、ＳＨＲをして授業が始まった。

「あ、いい考え思いついた！！！」
「は？」
一夏は昼休みに食堂で昼食を取っていると突然、何かを
思いついたかのように立ち上がり叫んだ。
「部活を作ればいいんだ！！」

「だから、なんでよ」
「最近、ゾディアーツ被害も多くなってきてるからさ学園と地球の平和を護る部活だよ！！早速、会長に言ってくる！！！」
「あ、ちょっと一夏！！！」
太陽はトレイを慌てて返却し一夏の後を追っていった。

「ちょっと一夏！！！」
「遅いぞ、太陽！！！」
「あのね～」
「きゃぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！」
「「！！！！！」」
突然、叫び声が響き渡り慌てて叫び声が聞こえた場所に行くとそこには、襲われている生徒とゾディアーツがいた。
「なろ！！させるか！！ライダーキーーーーック！！！」
『うぉわ！』
一夏のとび蹴りを喰らってゾディアーツは横によろけた。
その隙に太陽が襲われていた生徒を安全な所まで避難させ、一夏はドライバーを取りだした。
『ちっ！！いいところで』
怪人はそう呟くと透明になってどこかに行ってしまった。
念のためにバガミールで辺りを解析したがどこにもいなかったので一夏はドライバーをなおして襲われた生徒のもとに近づいた。

「大丈夫か？」
「え、ええ。ありがとう」
「少し聞きたいんだけどいいかしら？」
「ええ。良いわよ」
「まずいつ襲われたの？」
「あたしが倉庫の備品の確認をしようとした時に急に

足を何かで叩かれたような痛みが走って蹲ってたらあいつがいたのよ」
「ふんふん、後あなたは誰かに恨まれたりとかしていないかしら」
「恨まれる事はしてないけど」
「そう、ありがと。立てる？」
「うん、ありがと、助けてくれて」
「ああ」
その後、チャイムが鳴り二人はダッシュで教室に帰っていった。
千冬に出席簿で叩かれたのは言うまでもない。

そして、放課後…
終礼も終わり帰ろうとした瞬間に突然、１組のドアが勢いよく開けられ
全員の視線がそちらに向き一夏もそちらを見ると
そこには久方ぶりに会う幼馴染がいた。
「一夏はいるかしら！！？？」
「俺はここにいるから道場破りみたいに入ってくるな」
「何よ、良いじゃない。もう放課後なんだし」
「一夏さん、そちらの方は？」
「ああ、こいつは幼馴染の鈴っていうんだ」
「鳳鈴音よ。よろしくね」
「ここじゃなんだから食堂行こうぜ」
「良いわよ」
一夏はドアの前で話すのもどうかと思い４人を広い食堂に
呼び、そこで話をする事にした。
廊下を歩きながら懐かしい話などをしていた。
「にしてもまた二人は一緒なのね」
「まあな～ところでいつお前はこっちに帰って来たんだよ」
「ま、５日前くらいね。あたしだって中国の代表候補生よ！！」

「へ～そりゃすげえこった」
「あんたほんとに思ってる？」
「まさか」
「あ、あんたね！！！」
鈴が一夏に突っかかろうとした瞬間に何かを壊すような
大きな音が外から聞こえてきた。実際に体育館で部活をしていたバスケ部が
全員避難しているのが見えた。
「な、なんなの！？」
「お前らは先に行っててくれ！！行くぞ、太陽！！」
「ええ」
二人は3人を残し悲鳴が聞こえた方向へと走っていった。
取り残された3人は言う事を聞く筈もなくこっそりとつけていった。

体育館ではカメレオンゾディアーツが用具を壊しながら暴れていた。
『全部ぶっ壊してやる！！！』
カメレオンは長い舌を使いタイマーや
得点板などを次々と破壊していった。
先程まで気合いの入った掛け声は聞こえず今は悲鳴だけが響いていた。
「な、なんなのよあれ！！」
「ひとまず逃げなさい！！」
「先生は！！！？？？」
「私は貴方達を守る義務があるから」
バスケ部の顧問らしき教師は生徒を避難させながら少しでもゾディアーツ
を止めるべくボールをぶつけたりなどしていたがゾディアーツには
無意味だった。
『あんたがいけないのよ！！！！全部、あんたがいけないんだ！！

！』
「待て！！カメレオン野郎！！！」
『また、お前たちか！！』
「貴方達何してるの！？早く逃げなさい！！！」
「そう言う訳にはいかないんですよ。太陽」
「ええ、先生は任せて頂戴」
太陽は教師を戦いの邪魔にならない所に避難させバガミールを起動させカメレオンゾディアーツの解析を始めた。

「さあ、行くぜ！！」
『3・2・1』
「変身！！！」
一夏は箒達が物陰に隠れて様子を見ている事に気付かずに変身をした。
「な、何あれ！？」
「一夏さんが」
「変った」
「宇宙来たーーーーー！！！！！」
『また、邪魔する気！？』
「当たり前だ！！」
『ロケット・オン』
「ライダーロケットパンチ！！！」
『きゃ！！！こんな所で止めるわけにはいかないのよ！！！』
カメレオンは再び体を透明にして逃げ去ってしまった。
「あーー！！！また逃がした！！！！」
「一夏！！！」
「太陽、どうだった？」
「解析は出来たけど……」
「ん？」
太陽が見ている方向をたどってみるとそこには

「げ！何でお前達が！？」
そこには先程置いてきた3人の姿があった。

第7話　目・標・破・壊（後書き）

如何でしたか？感想もお待ちしております！！！

オリスイッチも集めてみようかな？と考え始める自分であります。

年内更新は出来るだけしますがしない場合もありますので。

それでは！！！！！！！！！！！！！

第8話　先・生・失・望

一夏は自室に3人を呼び先程の事を説明していた。
「一夏、さっきの怪物はなんなのよ」
「あれはゾディアーツって言ってスイッチを使って変身するんだ」
「では、一夏さんの先程の姿も」
「全然違うわよ。一夏が使っているのはアストロスイッチ、向こうが使っているのはゾディアーツスイッチ」
「違いが分からんが要するに一夏はそのゾディアーツとやらを倒しているのか？」
「ああ、そう言う事になる。悪いな今まで黙っててて」
「別に良いわよ。どうせあんたの事だから
私達を巻き込ませない為に黙ってたんでしょ」
「ああ。この事は黙っててくれないか？」

「ああ。それと私達にも手伝わしてくれないか？」
「へ？」
「そうですわ！！二人だけでは何かと不便でしょうから
私達も手伝わせて頂きますわ！！！」
「はは、ありがとな皆」
「それであたし達は何をすれば良いのよ」
「スイッチャーの目星は付いてるわ。でも、
まだ確証が無いから何とも言えないけど」
「その人の名前は何ですの？」
セシリアが質問すると太陽はデータ解析の画面を見せその人物を見せた。
「名前は高梨ゆり。学年は私達と同じよ」
その人物を見た瞬間、箒が声を上げた。
「こいつなら知っているぞ」

「ほんとか！？」
「ああ。こいつは確かバスケ部だったはずだ。私が朝稽古に行く時いつもボールをドリブルしながら走ってるのを見ているから間違いない」
鈴が何かを思いついたように話し始めた。
「ねえ、確か襲われた人って全員バスケ部のレギュラーだったわよね？」
「ああ、そうだよな太陽」

「ええ、確かにバスケ部だけどそれが？」
「例えばよ、自主連も練習も頑張ってるのに自分がレギュラーに選ばれなかったっていう腹いせでスイッチを悪用してるんじゃないかしら」
「確かに、襲われてるのはレギュラーのメンバーが多いわね。一夏」
「ああ、決まりだな。皆、ありがとう」
「ふふ、このくらいなんてことはありませんわ。また、言ってくれれば何度でもやりますわよ」
「よ～し、ならお前ら仮面ライダー部の部員になれ！！！」
「か、仮面ライダー部？」
「そうだ！学園と地球の平和を護る部活だ！！！」
「へ～面白そうじゃない。あたしは入るわ」
「私も偶になら顔を出そう」
「わたくしも良いですわ」
「よ～し、ここに仮面ライダー部結成だ～」
「「おーーー！！！」」
その後、騒ぎすぎて寮長の千冬に叩かれたのは言うまでもない。

翌日、高梨は最後の標的を狩る為にある人物を体育館に呼んでいた。

すると体育館のドアが開き入ってきたのはバスケ部の顧問の柊美琴(ひいらぎ)だった。
「話って何？高梨さん」
「ふふ、先生～私練習頑張ってますよね～」
「ええ、他の子達と比べたら練習量は多いわね」
「でも、先生は練習さぼってる奴をレギュラーにした」
「それは実力を考えて」
「うるさい！！！先生は実力何か見ていない！！
あいつよりも私の方が上手いのに私を外した！！！」
「ちょ、ちょっと待って高梨さん。確かに貴方は1年生の中では
一番上手よ。でもね、貴方は」
「うるさい！！！あたしはあんたを許さない！！！」
高梨がスイッチを取りだし押しかけた時、
スイッチが何かに狙撃されて手から離れた。
「だ、誰よ！！！」
撃たれた方向を見るとセシリアがスターライトＭＫ？で狙撃をして
いた。
そこには仮面ライダー部の部員もいた。
「そこまでだ。高梨さん」
「織斑一夏！！！！」
高梨は一夏を睨みつけた。
「スイッチを使うのはやめろ」
「うるさい！！あたしの気持ちなんか分からないでしょ！！」
「ああ、分からないな。でも、この先生がお前を外したことは間違
ってないぞ」
「どういう意味よ！？」
「俺さ、この前にバスケ部の人に高梨さんの練習試合の様子を
録画したやつを見せてもらったんだ。確かに上手かったよ」
「だったら！！！」
「でもさ、自己中プレーが多いんだよね～一人で

勝手にドライブしたり撃つべきじゃない時にシュート撃つしおまけにチームメイトの事なんか頭に入ってないし。だから、外されたんだよ」
「うるさい、うるさい、うるさい！！！！」
『ラストワン』
高梨の感情に呼応するかのごとくスイッチが変化し浮かびあがり高梨の手に戻っていった。

「止めろ！！自力で人間に戻れなくなるぞ！！！」
「それでも良いわよ！！こいつをぶっ潰せるならね！！」
高梨がスイッチを押すとカメレオン座が浮かび上がり体が繭に包まれ排出され精神だけがゾディアーツとなった。
『そら！！』
「きゃ！何よこれ！？」
カメレオンゾディアーツは舌を伸ばし柊を捕らえると屋上に飛び移りさらっていった。
「あ、やべえ」
「一夏！！あたしが連れていくわ！！」
「ああ、頼む」
一夏は鈴の甲龍（シェンロン）に捕まり運ばれながらドライバーをつけた。
『3・2・1』
「変身！！！！」
「これが、フォーゼ」
「ああ、ありがとな鈴」
一夏は屋上に飛び降りるとカメレオンゾディアーツが柊を壁際に押し込み落そうとしていた。
「動かないで！！！こいつを落とされたくなかったら動かないで。そして、変身を解きなさい！！！！」
「あの野郎！！！」

「はは、先生、がっかりだな～」
「何！？」
「え、ちょ」
柊は一夏の方を向き小さくうなずくと一夏も何かを
感じたのかそのまま黙り、手にはＮＯ，５マジックハンドスイッチ
が握られていた。

「私は貴方には期待していたわ。この子は将来、素晴らしい選手に
なるって」
「だ、黙れ！！！」
「でも、レギュラーを外されたくらいでここまでするなんて正直失
望したわ」
「言ってな！！！」
「きゃぁぁぁぁぁぁ！！！！」
柊が落とされた瞬間に一夏はすばやくマジックハンドに変え、スイ
ッチを入れた。
『マジックハンド、マジックハンド・オン』
「そら！！！！」
一夏が腕を伸ばすとマジックハンドもそれに合わせるようにして
伸びて柊をキャッチした。
「な、何よそれ！？」
「体が伸びるのはなお前だけじゃないんだ！！！」
「あたしをわざと怒らしたわね！？」
「貴方は少し短気な方だからね」
「でも、正直危なかったですよ？」
「女性を護るのが男性の仕事でしょ？」
「はは！！んじゃ、タイマンはらせてもらうぜ！！！」
「くそ！！！」
カメレオンゾディアーツは一夏に向かって舌を伸ばし攻撃しようと
するがそれを避けながら近づきカメレオンゾディアーツを掴み

下に落とした。
「こっちだ！！」
「きゃぁぁぁぁぁぁ！！！」
下に落とすと起き上がる暇も与えずに一夏はカメレオンゾディアーツを掴み
頭突きをかまし足を引っかけ背負い投げの要領で投げ飛ばした。
「くそ！！」
『ランチャー、レーダー・オン』
「これでもくらえ！！」
一夏はレーダーでロックオンしミサイルを４発撃ちこむと
カメレオンゾディアーツは空中に浮かんだ。
「あぁぁぁ！！！」
「よし、止めだ！！！」
一夏はマジックハンドからロケットに変えスイッチを入れた。
『ロケット、ドリル・オン。ロケット、ドリル・リミットブレイク』
「喰らえ！！ライダーロケットドリルキーーーーック！！！！！」
「あぁぁぁぁぁぁ！！！！！」
ドリルがカメレオンゾディアーツを貫き爆発を起こした。
空からはスイッチが落ちてきた。
「よっと」
スイッチをＯＦＦにするとスイッチは消滅し高梨が目を覚ました。

「ん、ん～」
「良かった。目を覚ましたのね、高梨さん」
「せ、先生。ごめんなさい！！！私の所為でレギュラーの皆が」
「ううん。私も悪かったわ。貴方に何も言わずにレギュラーを
外したりして。クラブは当分は休部ね」
こうして、無事に高梨は元に戻り休部が解除された後の試合で
劇的にプレーが変化したのは言うまでもない。

第8話　先・生・失・望（後書き）

こんばんわ～ケンです。
如何でしたか？相変わらず文章表現が下手すぎて
泣けてきます。感想もお待ちしておりますので。
それでは

第9話　侵・入・者

あれから、数日後。一夏たちは仮面ライダー部となった皆にラビットハッチ
の事を教えそこが部活の拠点となった。
「お～浮いてる、浮いてる～」
「ちょっと、鈴さん！！！勝手に重力を変えないで下さいまし！！！」
「良いじゃないのよ～こんな経験滅多に出来ないんだし」
「確かにそうですがその所為で色々と浮いてますわよ！！！」
部室には個人の色々な物が置いてありそれが重力が
６分の１になった所為でふわふわと浮いていた。
「ちぇ～」
鈴は渋々グラビティーコントロールのスイッチを
押し重力を元に戻した。

「ふ～やっと落ち着けますわ」
「でも、まさか宇宙に行けるなんてね～」
「そうですわね」
「そろそろ行くぞ。時間だ」
「おっけ～一夏、負けないわよ！！」
「それはこっちの台詞だ」
実は今日はクラス別代表トーナメントの当日であり
対戦表は先程太陽に見てきてもらうと
一回戦から鈴と一夏があたるらしい。
箒は先に行ってると言ってピットで待機している頃だろう。
四人も早歩きで会場へと向かった。

会場となる第3アリーナは観客に溢れておりそこには
各国の主要人物がＶＩＰ席で観戦をしていた。
いつもこのくらい多いのだが今回はちょっと違った。
それは織斑一夏の存在である。
各国は使えれば引き抜くという姿勢を取っているが
委員会からは織斑一夏の配属国家はこちらで決めると言い張り
日夜、論争が繰り広げられていることを一夏達は知らない。
「そろそろ時間か」
一夏はピット内の椅子に座っていたが時計を確認すると
上着を脱ぎＩＳスーツに着がえた。
「一夏さんなら大丈夫ですわ！！！」
「勝って来い！！私達は応援しているぞ！！」
「ま、楽に行ってきなさいな」
「ああ、じゃ、行くか。白式」
一夏がガントレットに手を置くと一夏が光に包まれ
白式を纏いフィールドへと向かった。

「待ってたわよ、一夏」
既にフィールドには鈴が立っており気合い十分といった
雰囲気が感じられた。
「あたしの強さ見せてあげるわ」
「その言葉そっくりそのまま返すぜ、鈴」
アリーナに試合の始まりを告げるブザーが鳴り響くと
両者、武装を展開しぶつけあった。
「やるじゃない。初撃をかわすなんて」
「そりゃ、どうも！！」
一夏と鈴は武装を振るい続け火花を撒き散らし続けた。
{一旦、距離を取るか}
一夏が距離を取ろうと後ろに下がろうとした瞬間…

「甘い！！！」
甲龍の肩のアーマーがスライドすると何か銃口に似た物が見え
一夏は本能的に何かを感じ翼を出し高速で上空へとあがると
地面が何か砲弾が当たったように抉れた。
「やるじゃない。でもあれはジャブだからね！！」
そう言い砲身も砲弾も見えない弾丸が襲いかかってきた。

あれから数分経つが一夏はフォーゼで鍛え上げられた感覚で
避けているがやはり完全には避けきれず何回か掠ったりもした。
「やるじゃないの。初見で龍砲が
直撃しないのはあんたが初めてよ」
「そりゃ、どうも。じゃあ、俺も秘密兵器を出そう」
「は、何を言って」
一夏が剣道の突きを距離が離れているのにも関わらずした瞬間、
甲龍の肩が爆発を起こした。
「え？」

一方、ピット内では箒達が今の光景に驚いていた。
「一夏はいったい何をしたんだ？」
「確か私も似たような攻撃をされましたわ」
代表を決める模擬戦でセシリアは距離が離れているにもかかわらず
一夏が剣を振るうと武装が爆発し破損した経験をしていた。
「如月、お前はあれをどう見る」
「織斑先生が思ってるのと同じですよ。一夏は雪片弐型の
刀身を不可視のエネルギーで伸ばして攻撃してますね」
「そんな事は可能なんですの？」
「いや、私も長くＩＳに関わっているがこんな事例は初めてだ」

「ああ！！ブリ〇チの神〇ですね！！凄いです！！」
何故か山田麻耶だけが一人で感激していた。

「さっきまでの威勢はどうした？鈴」
「うっさいわね！！こっからが本気よ！！」
「そりゃ楽しみだ」
鈴はそう言うが実際はかなり劣勢だった。まるで刀が
伸びているように遠距離から攻撃を受け既にエネルギーは
５割以上削られている。しかも一夏はそう毎回
遠くからの刀の攻撃をする訳でもなくだましを入れたり等
もう鈴はパニクッていた。
〜もう龍砲も片方しか生きてないし一夏にもそう
ダメージは与えれてないし。わたしが勝つにはあれしかないわね〜
鈴は何か策を思いついたのか一夏に丸腰の状態で無謀にも突撃して
いった。
「何をする気か知らないが、これで終わりだ！！！」
一夏が雪片弐型の刀身を撫でるように触れるとエネルギーが
チャージされていき青白く光り輝いていた。
「喰らえ！！！」
剣を振るうとエネルギーの斬撃が飛び鈴に直撃し爆煙を上げた。
「やったか？」
「まだに決まってんでしょうが！！！」
爆煙の中から鈴が瞬時加速（イグニッションブースト）を使い
一夏に抱きつくようにして密着した。

「な、しま！！」
「遅いわよ！！」
甲龍の龍砲が最大威力で放たれ両者とも大きくエネルギーを削られ
た。
「く…そ」

「まだよ！！これで最後」
鈴が止めの一撃を加えようとした瞬間、突如アリーナのシールドを荷電粒子砲が突き破り大爆発を起こした。
「な、なんなの？」
そこには腕が異様に長くスラスターも非常に大きいものを備え付けている真っ黒なＩＳが姿を現した。

第9話　侵・入・者（後書き）

連続更新です！！！！！
それでは！！！！！

第１０話　リミットブレイク

「あ？あいつ、一体なんなんだ？」
「さあ？こっちが聞きたいわよ」
すると黒いＩＳは体中に銃口のような穴があき辺りに無差別に
荷電粒子砲を放ち始めた。
「きゃあ！なんなのよ、あいつは！！出鱈目に撃ち過ぎでしょ！！」
「しゃべるよりも避けろ馬鹿！！！」
『織斑君、鳳さん！！！すぐにアリーナから脱出してください！！
教師陣達が鎮圧に向かいますから！！！』
オープンチャンネルから麻耶の声が聞こえてきた。
かなり焦ってるらしく声に出さなくてもいいものを
声に出してまで叫んでいた。
「そうしたいんですがね山田先生、俺達がここを退くと
皆が危ないんですよね～だから、俺たちであいつをぶっ潰します」
『え、ちょ、織斑ｋ』
一夏はチャンネルを閉じると雪片弐型を強く握り締めた。
「鈴、邪魔すんなよ。あいつは俺達の戦いを
邪魔したんだ。俺がぶっ潰す！！！」
「はいはい。あんたは昔からそうよね。自分のしてる事とかに
邪魔されたくないしね。でも、援護はさせてよね。あいつやばそう
だから」
「ああ、行くぞ！！」

「ちょっと織斑君！？鳳さん！？聞こえてますかーーーー！！？？」
「良いではないか山田君。あいつらがすると
言ったんだ。任せてみるのも良い」
そう言い千冬はコーヒーの入ったカップに七味トウガラシを入れて

いた。
ピットは薄暗いので勘違いもするだろうがそれだけ心配なのだろうか。
「あの先輩、それ七味ですけど」
「……何故、七味がここにある」
「あ！！心配なんですね！？いくら弟さんが強くても
ああやって助けも当分来ない密閉された空間に閉じ込められて」
「喰らえ」
「うぎゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！目が！！！目がぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」
「私は親族ネタでおちょくられるのが一番嫌いなんだ。肝に銘じておけ」
千冬は麻耶の目に少量の七味を入れたのだ。
実際に体験した人なら分かると思うが七味はめっちゃ痛い。
本当に痛い。よい子はマネしない様に。
しかし、誰も一夏の事を心配などしていなかった。
太陽は論文を読み、セシリアは落ち着いた表情でモニターを見ていた。
その為に箒がピットから出ていったのには誰も気づいていなかった。

一方、戦っている当人達は少し苦戦していた。
先程まで闘っていた為に鈴は龍砲の片方をやられさらにはエネルギーも7割がた失い、一夏は先程の鈴の捨て身の攻撃で5割も削られていた為にそうそうエネルギーを使えなかった。
「なろ！！」
一夏は先程の見えない刀身で相手を攻撃していくが何故か直撃せずにどれもかすり傷しか与えられなかった。さらには、人間には耐えられない程の速度で移動したりなどしており

全身装甲（フルスキン）という点でも疑問を持っていた。
「なあ、鈴」
「何よ」
「あいつ奇妙じゃないか？まるで俺達の攻撃を
機械が避けてるような避け方をしてねえか？」
「まあ、そんな感じはするけどＩＳは人が乗らないと動かせない。
それが鉄則よ……と言いたいけどあれは」
「無人機かもな。なら好都合だ」
「何？無人機なら勝てるの？」
「ああ。思う存分やれる」
一夏が雪片弐型のエネルギーをチャージしようとした瞬間に
アリーナに箒の声が響いてきた。
『一夏ーーーーーー！！！！男なら、男ならその程度の
敵に勝たんかーーーーー！！！！！』
「な！あのおバカ！！」
無人機は箒という新たなターゲットに照準を合わせようとしていた。

一夏は雪片弐型をフルチャージし無人機に向かって投げると
まるでポインターの様に刀が形態変化を起こした。
「俺の友達は誰にもやらせねえぞ！！！！」
一夏は翼で上空に羽ばたくとポインターに合わせるように
蹴りを入れるとポインターがドリルの様に回転し無人機を貫いた。
「ふぃ～終わったか」
一夏がその場を去ろうとした瞬間にチャンネルから鈴の声が響いて
きた。
「一夏！！まだ、そいつ動いてるよ！！！」
「！！！！！！！」
一夏が振り向いたと同時に最大威力の
荷電粒子砲が一夏を飲み込んだ。

〜俺はこんな所で死ぬのか？〜
一夏は荷電粒子砲に飲み込まれながらそう考えていた。
頭の中にはまるで走馬灯のように太陽達との記憶が流れていた。
〜死ねない！！！！こんな所で死んだら太陽を助けられない！！！！
白式、俺に力をくれ！！！！あいつらを、太陽を護る力を！！！！〜
『ふふ、聞いたよ』

「い、一夏」
鈴は絶望しながら目の前の光景を見ていた。
白式のエネルギーはもう既に少ないのに最大威力の
あれをくらっては絶望的と思わざるを得なかった。
すると、その時鈴の耳に電子音声が流れるのが聞こえた。
『リミットブレイク』
「え？」
すると次の瞬間、荷電粒子砲が弾け飛びそこには一夏が
立っていた。無人機は先程の攻撃でエネルギーが尽きたのか
完全に機能を停止した。
「うぅ」
一夏はその場に倒れた。気を失う寸前に最後に見えたのは
涙を流しながらこちらに近づいてくる太陽の姿だった。

ここで少し世間話をしよう。
如月太陽という少女は外見は普通の女の子だが内面は異常である。
その理由は幼いころに幾度となく誘拐を受けたからであった。
彼女の父親は宇宙飛行士でその影響で太陽も宇宙に興味を持ち
最年少の天文学者となったわけであるがその父親もコズミックエナジーの
研究に同僚と共に勤しんでいたのだが同僚の一人に裏切られ

月面基地、つまりラビットハッチに一人取り残された。
そこでフォーゼシステムとアストロスイッチを開発し
この世を去った。そしてそのシステムは娘の太陽へ継がれたのだが
このシステムを悪用せんとする組織に幾度となく誘拐を受け
誰も信じなくなった。それは母親も含まれており
話した回数は両手の指の本数よりも少ないのかもしれない。
母親は滅多に帰ってこず何をしているのかも不明。
そして、5歳の時に再び誘拐された時に織斑一夏と出会い
何故か彼だけは信じれると本能的に悟り、以来
一夏にしか心を開くことはなくさらに一夏の事を愛している。
だが、その度合いが異常だった。彼はいわゆるイケメンと呼ばれる
部類で
よく、ラブレターなどを貰っていたのだがそれを太陽が一夏に気付
かれる前に
回収し燃やした。そして極めつけは直接手を下したこともあるのだが
それはまた別の機会に語ろう。

「ん、ん～。ここは」
一夏が目を覚ますと薬品のにおいが
うっすらとする医務室だった。
「目を覚ましたか、一夏」
「千冬姉」
隣には千冬が椅子に座っていた。
「全くお前は本当に無茶をする。怪我でもされたら
こっちが困るんだぞ」
「ごめん、鈴は大丈夫なのか？」
「ああ、鳳はピンピンしているさ。今は事情聴取してるがな」
「そっか」
「私はこれから仕事があるから行く。それと」

「ん？」
「もうそいつを悲しませるなよ。一夏」
その言葉を残し千冬は医務室を後にした。
何を言っているのか分からない一夏だったがふと隣を見ると
太陽が隣で眠っているのに気付いた。
目の下には涙の跡がうっすらと見えていた。
「こう言う意味か……ごめんな、太陽」
一夏はそっと太陽の頭を撫でもう一眠りする事にした。

場所は変わりここはＩＳ学園、地下研究所。
一定以上の権限がないと立ち入れない場所に千冬が座っており
目の前には先程の撃破された無人機、それに戦闘の映像が流れていた。
「織斑先生」
「どうでしたか、山田先生」
「解析の結果、織斑君の最後の一撃で機能中枢がやられており
復元は不可能でしたがコアは無事でした」
「それでそのコアは」
「はい。無所属のコアでした」
「……そうか。それで、例の件は」
「解析班によると最後の白式の技はＩＳのエネルギーでは無いそうです」
「どういう意味だ？」
「分かりません。なんらかのエネルギーが白式に流れ込み
変化を起こしているようです」
「そうか…引き続き頼む」
「はい」
麻耶は一礼をして職場に戻っていった。

千冬は重い表情で一夏が最後にした技を何度もリピートしていた。

〝一夏、お前は一体何を抱えているんだ〟

第１０話　リミットブレイク（後書き）

こんばんわ～こんばんわ～。
確かこれに似た歌が昭和にあったはず。
たしか万国博覧会の時の歌だったかな？
そんな事はどうでも良くて、如何でしたか？
宿題が多すぎて忙しすぎるぜ。
それでは、良いお年を！！！！！

第１１話　勧・善・懲・悪

あれから一夏は怪我もそれほど無いとのことで普通の日常生活に戻っていた。
勿論、仮面ライダー部の活動も行っている。
しかし、問題が一つあった。それは……
「は！？何でダメなんですか！！会長！！！」
昼休みに仮面ライダー部を作る許可を貰おうと
生徒会室にいるのだが返答はＮＯだった。
「駄目なものは駄目なのよ～。そもそも活動内容が活動内容だから
余計に承諾できないのよね～」
会長の楯無は要求棄却と書かれた扇子で仰いでいた。
「なんでなのよ！？この学園と地球の平和を護るなんて
これ以上の内容は無いじゃないのよ！！」
鈴はいら立ちを隠さずに年上の楯無にため口で文句を言っていた。
「だから～部活にはそれぞれ予算が振り分けられるんだけどね、
今の学園の考えは予算は出来るだけＩＳに回そうっていうものなのよ～
だから無駄遣いはするなって上からうるさく言われてるのよね～」
「あんたも一夏に助けられた癖に？」
太陽はジト目で楯無を睨んでいた。
「そ、それはそれ。これはこれ」
結局、その後も粘ったが許可は一向に降りなかった。

「あ～もう！！なんで、ダメなのよ！！！！」
「落ち着いて下さい、鈴さん。あの人の言い分も最もですし
ここでは会長の権力は大きいですから」
「ま、良いじゃねえか。学校に認められなくとも

俺達は俺たちで活動するし予算なんかなくても出来んだしさ」
一夏と太陽はスイッチの調整室でスイッチを調整していた。
すると、スイッチが突然バチバチとまるで電流が火花を
散らすような音が聞こえてきた。
「なんなの？このスイッチ。他のよりもコズミックエナジーの
量が比較にならないほど大きい」
「どれどれ」
一夏がスイッチに触れようとした瞬間、
突然ガントレットが淡く輝き始めた。
「このスイッチ、白式と共鳴しあってるのではありませんか？」
「あ～確かに。セシリアの言うとおり白式も反応してるわね～」
いつのまにか調整室に入って来ていた二人が
白式とスイッチを交互に観察し始めた。
「そのスイッチなんて名前ですの？」
「ＮＯ１０エレキスイッチよ。一応、調整は出来たけど
使えるかどうかは正直怪しいわね」
すると、突然太陽の所有物のカバンから電話のコール音が鳴り響い
てきた。
「偵察していたバガミールからの連絡だわ」
画面にはゾディアーツと襲われている女子生徒がいた。

「な、なんなのよ！？あんたは！！」
今話している生徒、メリー・クリスは目の前にいる怪物に
驚きのあまり腰を抜かしていた。
『貴方はテストでカンニングをしていた』
「そ、それが何よ！！」
『悪は許さない！！！』
ゾディアーツはメリーに向けて殴りかかろうとした瞬間に
何かに後ろから殴られ吹き飛んでしまった。

『誰！？』
そこには黄色いロボットがいた。名前はパワーダイザー。
胸にあるコクピットのような所から太陽が額に汗を流して
降りてきた。その呼吸はかなり乱れていた。
「はあ、はあ、はあ。あんたは、はあ、逃げなさい」
「あ、ありがと！！」
「大丈夫か、太陽！！！！」
後ろから一夏達が走ってきた。
「ま、なんとかね。それよりもあいつは
一角獣座、ユニコーンゾディアーツよ」
「分かった。お前は休んでろ。セシリアと鈴はこいつを見ていてくれ」
「分かったわ」
「頑張ってくださいね！！」
「おう」
一夏はドライバーをつけスイッチを入れていくとカウントがはじめられた。
『3・2・1』
「変身！！！！」
空高く手を上げると頭上に輪っかが現れ、一夏がフォーゼに変身していった。
「ん～宇宙来たーーーーーーーー！！！！！！！！」
『か、仮面ライダー！？』
「何だ知ってんのか？ま、良いや。仮面ライダーフォーゼ。
タイマンはらせてもらうぜ！！！！！」
『ロケット・オン』
一夏はロケットスイッチを入れると腕にロケットモジュールが現れた。
「ライダーロケットパーーーンチ！！！！！」
『きゃ！！！！』

一夏はロケットの噴射でユニコーンに近づき文字通り
ロケットでパンチを加えた。

「あれを試すのはいい機会ね。オルコットさん、これを一夏に渡してちょうだい」
「分かりましたわ。一夏さん！！！」
「ん？」
「新しいスイッチですわ！！！！」
「おう！！試させてもらうぜ」
セシリアは一夏に向けてエレキスイッチを投げ渡すと
一夏はすぐさまロケットスイッチと交換をした。
『エレキ』
スイッチを入れると静電気の様にバチっと言う音がした。
「ん？ま、良いか」
一夏はそんな事など気にも留めずにエレキスイッチを入れた。
『エレキ・オン』
すると右腕に電流が流れ込みロッドが現れ右腕の肘から
下だけが金色に染まった。
「剣？というよりロッド？」
『余所見しないで！！！！！』
ユニコーンが一夏に走って近づいていくが一夏はロッドを
横にして持っていた為にユニコーンにあたるとユニコーンは吹き飛ばされた。
『な、何あれ！？』
「お、すげえじゃん。行くぜ！！！」
一夏がロッドでユニコーンを切りつけた瞬間、両者にロッドの
電流が流れ込み感電してしまった。
『ぐぅ！！』
「あぎゅげぎゃぎぇぎょ！！！」
「パワーが逆流してるの？」

「逆流するぐらいに強いってどんなのよ」
肩を借りて立っている太陽の呟きにツッコミを入れる
鈴だが、太陽の言うとおり何度も切りつけているがその度に
一夏とユニコーンの両者が電流でダメージを負っていた。
『ここは一旦逃げる！！！はぁ！！！』
「うぉ！！」
ユニコーンは手からチャクラムの様な形の怪光線を
地面へとぶつけその爆煙でどこかへ逃げていった。
「くそ！！逃げられた！！」

あれからラビットハッチに一旦戻り太陽はしんどいので保健室に
行くと教師に言ってそこでバガミールの映像の解析を行うという。
残りのメンバーは箒にも内容を話し放課後にスイッチャーの
目星を自分たちでもつけていく事にした。
鈴は1年生の生徒たちに聞いていきセシリアは教師達に
箒は他の部活との交流が唯一あるためクラブ生に聞きにいった。
そして、一夏は上級生に聞きにいっていた。
「あ、ちょっと良いですか？」
「あ、織斑君じゃん。なに？」
「最近、変わったな～っていう人とかいませんか？」
「ん～特には見ないけどね～」
「そうですか。ありがとうございました」
「また今度、部活見学に来てね～」

「は～なかなかいねえもんだな～。それにしても、
こいつ中々凶暴だな～」
一夏はポケットからエレキスイッチを取りだしまじまじと眺めてい
た。

「どうすればこいつとも友達になれるかね～、ぐぇ！」
スイッチを見ていた為に前を見ていなかった
一夏は曲がり角で誰かとぶつかってしまった。
「痛たたた、大丈夫か…ってちふ、じゃなくて織斑先生」
「ああ、すまないな。大丈夫か？」
「あ、はい。こっちこそすみません。それじゃ！！」
一夏は情報収集をするべくその場を去っていった。
「全く元気がいいことだな…ん？これは、なんだ？」
千冬の足もとには黄色のスイッチ、エレキスイッチが
転がっていた。
「あいつのか？……いや、あいつがこんな物を集める訳はないか」
そのスイッチを千冬はポケットに入れ自室へと向かっていった。

第１１話　勧・善・懲・悪（後書き）

こんばんわ～ケンです。如何でしたか？
今回のスイッチャーは多分タイトルで分かると思います。
感想もお待ちしておりますので、それではよいお年を。

第12話　夜・間・戦・闘

放課後、一夏たちは太陽からスイッチャーが分かったと連絡を受けラビットハッチに集合していた。
「もう体は大丈夫なのか？太陽」
「ええ。少し休んだら具合は良くなったわ。それよりもスイッチャーの話よ」
「ああ、頼む」
太陽は解析データの画面を見せるとそこにはスイッチャーと思われる少女が映っていた。
「この子がスイッチャーですの？」
「ええ。名前は更識簪。生徒会長の実妹で日本の代表候補生よ」
「でも、なんでこいつがスイッチャーだって分かったのだ？」
箒の質問に太陽はもう一つの映像を見せた。
「今回は偶々、バガミールにその瞬間が映ってたわ。これがその映像よ」
太陽はバガミールの映像を皆に見せるとそこにはスイッチを持った更識簪と襲われたメリー・クリスの姿がはっきり映っていた。
「でも、なんで彼女は襲ったのでしょうか？」
「そこまで詳しくは分からないわ。もっと詳しく調査してみないと」

それから晩ご飯も食べシャワーを浴びた一夏はなんとなく外をぶらぶら
したいと思い何故かついてきた太陽と夜の学園を散歩していた。
「なあ、太陽」
「何？一夏」
「なんで皆、こんなにもスイッチに魅せられるんだろうな」

「分からないわ。この学園でもスイッチがばら撒かれてるみたいだし、
誰がどこで何の目的で配っているのか分からないのが実態ね」
「そうだよな……あれって」
一夏が指をさした方向を見てみるとそこには青い髪の毛をした生徒が何かを手に握りしめていた。
「もしかしてあいつ」
「ええ、行きましょう」
二人はそっとその生徒に近づいていくとぶつぶつと呟いているのが聞こえてきた。
「ふふふ、これで悪い事をした人は残り１０人。この力で悪を懲らしめられる！！！！」
「それはちょっと違うな」
「だ、誰！？」
「俺は織斑一夏。さっきの話は聞かせてもらった」
「その声、貴方が放課後の時に邪魔した仮面ライダー？」
「ああ、そうだ。君なんだろ？あのユニコーンゾディアーツは。更識簪さん」
「もうばれてたんだ。凄い情報収集力だね」
「私をなめないでよね。女一人の情報くらい引き出せるわよ」
「貴方達も私の邪魔をするの？」
「邪魔じゃない。君を救うんだ」
「じゃあ、貴方達も悪だ！！！！」
簪はポケットからスイッチを取りだしボタンをプッシュすると一角獣座が浮かび上がり簪がユニコーンゾディアーツとなった。
『私はこの力で悪を懲らしめる！！！！』
「正義のヒーロー気取りもいいとこだな。太陽下がっててくれ」
「ええ」
一夏は太陽を下がらせるとドライバーを取りだし腰につけスイッチを押していくとカウントがはじめられた。

『3・2・1』
「変」
『させない！！！！』
ユニコーンが一夏がレバーを引く瞬間に腕からチャクラム状の
怪光線を放ち変身を邪魔しようとしたが一夏の手元に雪片弐型が
現れると怪光線を斬撃を飛ばして全て落としてしまった。
『そ、そんな！！！！』
「残念だったな！！！そんなの経験済みなんだよ！！！変身！！！」
気を取り直し一夏はレバーを引きフォーゼへと変身した。
「宇宙…って今は夜か。宇宙来た～」
一夏はいつもの音量ではなく小さい声で決めゼリフを言った。
「タイマンはらせてもらうぜ！！」
『チェーンソー・オン』
一夏は左足にチェーンソーモジュールを呼び出し切りつけていくが
ユニコーンはそれを腕で防いでいた。
「おら！！」
『くぅ！！』
「やるじゃねえか！！」
「一夏！！！」
「ん？」
「新しいスイッチ！！！ビートとチェーンアレイ！！！」
受け取ったスイッチには12，13と書かれていた。
「お、サンキュ～さっそく使わせてもらうぜ！！」
『ビート、チェーンアレイ』
「押しにくいなこのスイッチ」
『チェーンアレイ、ビート・オン』
一夏の右腕に鎖に鉄球がつながったチェーンアレイが、右足にスピ
ーカが現れ
スピーカーからかなり高い音が出てユニコーンは思わず耳を塞いだ。
『うぅ！！あ、頭が痛い！！！』

「くぅ〜！！！念のためにヘッドホン持って来たけど響く〜」
『くぁぁ！』
ユニコーンはあまりの頭の痛さに膝をついた。
「おお、すげえ。行くぜ！！」
一夏はビートをＯＦＦにし鉄球を振り回し始めた。
『きゃあ！！』
「そらそらそら！！！！」
一夏は連続で回転させて何度もユニコーンに鉄球をぶつけた。
「必殺！！鉄球投げ！！！」
『きゃあ！！！』
一夏は鉄球の部分をそのまんま野球投げでユニコーンにぶつけると
ユニコーンは壁まで吹き飛んでしまった。

「はっは〜どうだ！！！」
『悪は絶対に許さない！！！ふぁ！！！』
ユニコーンが自身の顔に手を近づけると角が伸びて顔が
お面を取るように取れ、フェンシングの様に変化した。
「うぉ！！馬面の下に、はぅ！！！」
一夏はその光景に驚き振り回すのを止めてしまったために鉄球が
一夏の股間に思いっきり直撃し変な声を上げた。
「う、馬面の下にもう一つ顔が！！！」
この戦いを影からスコーピオンゾディアーツが観察しており
目の前の光景に驚いていた。
『ほぅ。スイッチが進化したか』
『あぁぁぁ！！！！』
「うぉ！！」
簪はまるでフェンシングを過去に習っていたかのような
動きで一夏にサーベルをぶつけてきた。
「この野郎！！！喰らえ！！！」
『ふん！！！』

「ぐぇ！！」
一夏は鉄球を投げるがユニコーンはそれを
サーベルではじき返し一夏に直撃させた。
「痛たたた」
「一夏！！！エレキを使いなさい！！！」
「エ、エレキをか？」
「なに？ビビってるの？」
「んな訳あるか！！！……あ、あれ？」
「どうしたのよ！？早く使いなさいよ！！！」
「ま、まあちょっと待て心の準備が」
〜無い無い無い無い無い！！！！エレキが無い！！！
どっかで落としたのか！？〜
エレキスイッチは千冬が所持していることには気づいていなかった。

「何をしてるのよ！？早く使いなさいよ！！！」
「あ〜もう！！！」
『ランチャー、レーダー・オン』
「ちょ、ちょっと一夏！！！！」
「喰らえ！！！」
『はぁ！！！！』
簪は放たれたミサイルを全てサーベルで叩き切った。
「げ！！もう一回！！！」
一夏がさらにミサイルを撃とうとした瞬間に簪は
スイッチを切り元に戻ってしまった。
「うぉっと！！！危ね！！」
「どういうつもりよ」
「別に。貴方達は何か悪い事をしたわけじゃないから止めは
ささないだけ。もし、また私の邪魔をしたら今度は許さない」
そう言い簪は闇夜に消えていった。

第１２話　夜・間・戦・闘（後書き）

こんばんわ、ケンです！！
如何でしたか？３０日まで塾がある僕っていったい何を
楽しくて講座を取ったのやら。ま、後悔先に立たずでしたっけ？
そんな感じで頑張っていきます！！感想もお待ちしております！！
最近は暇すぎて話を作りすぎまして１日２話投稿で
当分は行きたいと思います。それではさようなら～

第13話　能・力・進・化

ある一室ではスコーピオンが例の男性にユニコーンの報告をしていた。
「ほ～。スイッチが進化をしたと」
『はい。本来、ユニコーンの武器は手から放つ破壊光弾のみ。しかし、彼女の思いとシンクロし新たに武器を生成しました』
「彼女は確か、特撮好きだったと聞いているが」
『ええ。恐らくその時の武器を作ったかと』
「ふふふ。やはり、この学園は素晴らしい素質を持つ生徒が多い。これだから止められない」
男性がにやけると男性の両目が赤く輝いた。
『少し動いてもよろしいでしょうか？』
「良いだろう。スコーピオン、君には期待しているよ」
『ありがとうございます』

一夏は今、ラビットハッチで正座をしながら太陽に睨まれていた。この光景を例えるなら蛇に睨まれた蛙がまさにピッタリだった。その光景を見ている部員達は苦笑いで眺めていた。
「で？いつ、エレキスイッチを落としたのよ」
「え、えっと、分からねえ」
「分からないじゃないのよ！！！！！」
「「「！！！！！」」」
突然、太陽の怒号がラビットハッチに響きわたりセシリア達は驚いてしまった。

いつもはそっけないがここまで怒りをあらわにしているのを
見るのは一夏も初めてだった。
「何で落としたのなら落としたって言わないのよ！！！！！！」
「わ、悪い」
「もっと早く言ってくれればスイッチだって探すしユニコーンとの
戦闘だって考えた！！！！！それで、ほかの生徒が襲われたりでも
したら
どう責任をとるのよ！！！！！貴方だって怪我をするかも
しれないのよ！？分かってるの！？」
太陽のマシンガンの様な説教に一夏はさらに縮こまっていった。
「……」
「もういい。スイッチは自分で探して。
私はなにも手伝わない」
そのまま太陽はラビットハッチから出ていった。

翌日の朝、一夏はいつもよりも早く起きて部屋を出ていった。
既に太陽が起きていたが昨日の事もあり一言も話さずに
部屋を出た。一夏が部屋を出たのを見ると太陽は
大きくため息をついた。
「は～。なんで昨日私あんなに言っちゃったんだろ」
太陽は昨日、言い過ぎた事を自覚しているみたいだが
それは一夏の事を想っての事でもあった。
「一夏……ごめんね」

その頃、一夏は学校中を探し回っていた。
昨日通ったルートをなんとか思い出しどこかに落ちてないかを探して

いると目の前に千冬がいるのが見えた。
「こんな所で何をしているんだ？一夏」
どうやら職務外なのか名字ではなく名前で呼ばれたので
一夏も名前で呼ぶことにした。
「あ、ああちょっとね」
「なんだ？言ってみろ。私も手伝うぞ」
「いや、良いよ自分で探すから」
一夏は少しいらつきながら千冬の
助けを断った。
「そうか……ま、頑張れよ」
千冬はそう言い職員室へと向かった。
〜なんで俺はさっき千冬姉にいらついてたんだ？〜

そして時間は流れ昼休み。
一夏は昼食も食べずにスイッチを探していた。
セシリア達からも手伝おうかと言われたが自分の責任だと言って
一人で探すことにした。すると、どこからか花瓶を割ったような音
が聞こえてきた。
それも、一回ではなく何回も。不審に思った一夏はその方向へ行っ
てみると
そこには、ユニコーンと生徒をかばっている千冬の姿が見えた。
「千冬姉！！！」
一夏は走りだしてユニコーンに蹴りを入れた。
『きゃ！また、貴方』
「い、一夏！！！なぜ、来たんだ！！逃げろ！！！」
「そう言う訳にはいかない！！」
一夏はドライバーを取りだしスイッチを押していくと
カウントがはじめられた。
『３・２・１』

「変身！！！！」
「くっ！！」
千冬が突風で目を瞑り、再び開けるとそこにはいつもの弟の姿ではないものがいた。
「宇宙来たーーーーーー！！！！！」
「な、なんなのよあれは！？」
「い、一夏、お前は」
「話は後だ！！先にその子を！！！！！」
「ああ。行くぞ」
千冬は生徒を連れて安全な所へと逃げていった。
『逃がさない！！！！』
「こっちの台詞だ！！！！！」
『ロケット・オン』
一夏はロケットスイッチを入れるとロケットパンチを喰らわし別の方向へと吹き飛ばした。
『きゃあ！！！！』
「さあ、行くぜ！！！！」
その戦闘の様子を屋上で眺めている者がいた。
さそり座のゾディアーツ、スコオーピオンであった。
『ふん』
スコーピオンは飛び降りフォーゼに下降しながらの踵落としを決めた。

「ぐわ！お前は！！」
『フォーゼ、貴様は邪魔だ』
スコーピオンはクロークを脱ぎ棄てユニコーンと共に一夏に攻撃を仕掛けていった。
一夏も応戦するがスコーピオンの蹴りを凌ぐとその隙を狙ってユニコーンのサーベルが、サーベルを防ぐと蹴りが入り徐々にダメージが増えていった。

『ふん！！』
「ああ！！」
スコーピオンの蹴りをまともに喰らい吹き飛ばされてしまった。
「一夏！！」
「な、千冬姉！！なんでここに！！さっき逃げろって」
『はぁ！！』
ユニコーンが二人に向けて手から大量の破壊光弾の放ち始めたのを見た一夏は千冬を突き飛ばした。
「い、一夏！！」
「うわぁぁぁぁぁぁ！！！！」
全ての破壊光弾を喰らった一夏は変身が解け、気を失い倒れ伏してしまった。
「い、一夏！！しっかりしろ！！！」
『この程度か。お前は続けろ』
『はい』
ユニコーンはどこに飛び去りスコーピオンは瞬間移動をしてどこかに消え去った。

千冬は倒れた一夏をすぐに医務室に運びこみ治療を受けさせた。
「先生！！一夏は！？」
「落ち着いて下さい！！命に別条はありませんから」
「す、すみません。中に入っても？」
「ええ、どうぞ」
千冬が中に入ると一夏はベッドで横になり眠っていた。
千冬はポケットからエレキを取りだした。
先程の戦闘を見たとき自分の持っているスイッチが似ていると思いドライバーにある物と比べると色は違えど同じだった。
「ん、ん～」

「目が覚めたか、一夏」
「ああ、なんとか……なんで千冬姉がそれを持ってるんだ」
一夏は千冬の手に持たれているエレキを見て驚いていた。
「この前にお前とぶつかったときがあるだろう。
その時に落ちていた」
「あ、あの時か。だから学校中探してもなかったんだ」
「お前の探している物はこれなのか？」
「ああ、ありがと」
一夏はエレキを受け取ろうとすると千冬が手を引いたために取れなかった。
「千冬姉？」
「一夏。さっきのはなんなんだ」
「……」
「何で言ってくれないんだ！！！一夏！！！」
「千冬姉には言えない」
千冬は一夏の肩に手を置き問いただした。弟が怪物と
戦っているのを知れば誰だって問いただす。それが兄弟というもの。
しかし、一夏は一向に口を割ろうとはしなかった。それでも
千冬は何度も一夏に問いただした。
「一夏！！！！」
「うるさい！！！！！」
「！！！！！」
千冬は一夏の怒号を聞いて黙ってしまった。
「俺は千冬姉に全部教えないといけないのか！？俺の事を全部！！
そりゃ姉弟だから話さなきゃいけないこともあるさ！！！
でも、俺の秘密も話さないといけないのかよ！！！！！！！」
「当たり前だろうが！！！！私はお前の姉であり保護者だ！！！
お前が何をしてるのかを知らないといけない！！！！」
「じゃあ、なんで千冬姉は俺がここに入学するまでここで
働いてた事を教えてくれなかったんだ！！！？？？」

「そ、それは」
「千冬姉だって俺に何も話してくれないじゃないか！！！
ＩＳの事も俺の親の事もそうじゃないか！！！！母親ぶるなよ！！
！！」
「！！！！！」
千冬はその言葉を聞いたとたんに顔色をかえ一夏の頬をはたいた。

「それが貴様をここまで育ててくれた人に言う言葉か！？
もう良い！！！貴様の事など知らん！！！好きにしろ！！！！
金輪際私の事を姉と呼ぶな！！！！！」
千冬は一夏にエレキスイッチを投げて医務室から出ていった。
そして入りちがいにセシリアが医務室に入ってきた。
「な、何かありましたの？一夏さん」
「いや、何もない。それでどうしたんだ？」
「あ、そうですわ！！！これを見て下さい！！！」
セシリアが一夏に手紙を渡し一夏は読んでいくと
そこにはこう書かれていた。
『如月太陽は預かった。返して欲しければ同封してある
地図の廃工場に来て。時間内に来なかったら如月太陽は死ぬ』
「くそ！！！！こいつは何を正義と見て何を悪と
みてんだ！！！！この手紙はいつ届いたんだ？」
「分かりませんわ。太陽さんの机にこれがあったのを放課後に見つ
けましたの」
「時間は……後１０分しかない！！！セシリア！！！
お前はこの事を全員に伝えてくれ！！俺は先に行く！！」
「分かりましたわ！！！！」
一夏は服を着替えすぐさま置いてあるバイクに乗り教師の
制止も聞かずに校門をバイクで飛び越えていった。
「織斑先生！！織斑君が！！！！」
「あんな奴の事など放っておけ！！！」

「で、ですが！！！」
「放っておけといったら放っておけ！！」
「は、はい」
千冬は教師を気迫で黙らせ職員室へと帰っていった。

第13話　能・力・進・化（後書き）

こんにちわ！！カップ麺食って胸やけを起こしたケンでございます！！！

久々にカップ麺食おうかなとお母さんの用意してくれたおにぎりと一緒に

食べたらまさかの相性最悪だったのかはたまたカップ麺がいけなかったのか

めちゃくちゃ吐きそうっす。うっぷ！

如何でしたか？感想もお待ちしております～す。

それでは！！

第１４話　電・気・変・身

太陽は気が付くと廃工場で縄で縛られた状態で放置されていた。
周りを見渡すと最近に廃されたのか機器等はすでに
回収されていたがまだ、床などはキレイな状態だった。
「目を覚ました？如月さん」
目の前に簪が歩いてきた。手にはスイッチが握られていた。
「なんでこんな事をしたのよ！？」
「ねえ、特撮番組見てる？」
「は？何を言ってんのよ」
「そのテレビではね悪は必ず正義に倒されるの。それが私は好きなの」
「回答になってないわ。動機はなんなのよ！？」
「今の学校は悪が満ちてる。テストでカンニングしたり校則破ったりしてる人がたくさんいる。私はそれが気に食わなかった！！！！だから私はこの力で悪を根絶する！！！！」
「ぷはははは！！！！ばっかじゃないの？」
太陽は簪の余りにもおかしな動機に笑いをこらえる事が出来なかった。
「どういう意味？」
「あんたがやってるのはただの弱い者いじめじゃないのよ！！！あんたがしてる事こそ悪なのよ！！！！」
「なんとでも言って。もうすぐ貴方は死ぬから」
「どういう意味よ！？」
「ここに織斑君が私が指定した時間にこなかったら
貴方を殺すって言ってるから。後、１分もないよ」
「い、一夏は必ず来る！！！！だって私を護るって言ってくれたもん！！！」
「それは本心で言ってるの？」

「え？」
簪の問いに太陽は黙りこくってしまった。
確かに一夏は護ると言っているがそれは一夏の本心か、それとも
フォーゼとして言っているのか、それは定かではない。
「彼は仮面ライダーとして言ってるんだよ」
「そ、そんな事ない！！！！一夏は……一夏は…」
「太陽！！！！！」
「「！！！！！」」
工場にバイクのエンジンの音と一夏の声が響いた。
その声を聞いたとき簪は驚きに顔を染め太陽には嬉しさが満ち溢れた。

「な、なんで？ＩＳ学園から間に合わないようここを選んだのに！！！」
「人間の行動は時には可能性すら超えるんだよ！！！！それと、更識さん」
「な、何！？」
「人は正義の為ならどこまでも残酷になれるんだ。今、
君がしてるのは正義なんかじゃない！！！！！」
「う、うるさい！！！」
「一夏！！！！ほら間に合ったんだから離しなさいよ！！！」
「そんな訳ないでしょ！！！貴方は最初から始末する気だったのよ」
『ラスト・ワン』
スイッチが簪の感情に呼応するように形を変えスイッチを押すと
一角獣座が現れ簪の肉体は繭に包まれ排出され精神だけが
ゾディアーツとなった。それを見た一夏はすぐさま、ドライバーを
取りだした。
『３・２・１』
「変身！！！！！！！！！」
一夏はフォーゼとなった。

「宇宙来たーーーーーーーー！！！！！」
『ロケット・オン』
一夏は叫びながらロケットスイッチを入れユニコーンを太陽から遠ざけた。
太陽の縄はポテキチョンがハサミで切断しており、その時に他のメンバーも廃工場に来た。
「大丈夫か！？如月！！！！！」
「ええ、大丈夫よ。私は一夏の所に行くけど貴方達は？」
「「「行くに決まってる！！！！！」」」

『きゃあ！！！』
「さあ、タイマンはらせてもらうぜ！！！！！」
一夏はロケットで太陽から離れた狭い通路で簪を地面に叩きつけた。
『私は負けるわけにはいかない！！！！！』
簪は両手から破壊光弾を大量に放ち始めた。
「うぉ！！」
「きゃあ！！」
「みんな外に逃げるわよ！！！！」
太陽は近くにいては危険だと判断しいったん全員と外へと非難した。
一夏は狭い通路にいた為に爆風で外へと飛ばされた。
「うぉぉぉぉぉ！！！！！」
一夏はどうにかして受け身を取ってダメージを減らしエレキスイッチを取りだした。
「エレキ……更識さん、俺は君の全てを受けいれる！！！！！」
「何を言ってるの！？」
一夏のいきなりの発言に簪は驚き思わず聞き入ってしまった。
それは太陽達も同じだった。

「君のその悪を憎む心や太陽が俺以外に友達を作らないとことか
それ以外の皆のねじ曲がってひん曲がった部分も俺は受け入れる！
！！！」
『エレキ』
「使えるの？一夏」
「ああ、コツは掴んだ」
「「「頑張って！！！！」」」
「あぁぁぁぁぁぁ！！！！！」
「よっと、そら！！」
一夏は簪のサーベルを避け、蹴りをいれ遠くの方に蹴とばし
エレキスイッチをＯＮにした。
『エレキ・オン』
エレキスイッチがＯＮにされると右腕にロッドが現れ、前回は肘より下しか
金色に染まらなかったが今回は違い体全体に電流が流れ込み
全身が金色に染まりエレキステイツへとステイツチェンジした。
「お～！！金色になった！！！」
鈴がエレキステイツを見て感嘆の声を上げた。
「このパワー痺れるぜ！！！！」
一夏はロッドにあるコンセントを3個あるプラグのうちの
左側に差し込むとロッドに電流が流れ込んだ。
「あぁぁ！！」
「おら！！！」
一夏はユニコーンのサーベルをロッドで弾き
ユニコーンを切ると電流が流れ火花が散った。
「エレキスイッチはステイツチェンジの力を持つスイッチだったのね」
太陽はなぜ、エレキスイッチが他のスイッチを圧倒する量のコズミックエネジー
を保有しているのか分かり感心していた。

「あぁ！！」
「次はこいつだ！！！」
一夏はコンセントを差し替え、ロッドを振ると電気の斬撃が飛んだ。
「きゃ！！この！！」
ユニコーンは斬撃を避けて空高く飛びあがり一夏にサーベルを
つきたてようとしたが一夏は３つ目のコンセントに差し込み
ロッドを振ると電流がユニコーンの体に巻きつき拘束具の様になった。
「あぁぁ！！！」
「よし、一夏！！！リミットブレイクよ！！！
エレキスイッチをロッドに！！！！」
「分かった！！」
一夏はドライバーからエレキスイッチを取りロッドの下にある
くぼみに差し込むと警報の様な音が響き渡り電子音声が流れた。
『リミットブレイク』
「あぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！」
「行くぜ！！！ライダー１００億ボルトブレイク！！！！！！」
「きゃぁぁぁぁぁぁ！！！！！」
ユニコーンが最後の力を振り絞り一夏に特攻をしかけるが
一夏はすれ違いざまに斬りつけるとユニコーンは大爆発を起こし
スイッチだけが残った。
「よっと」
一夏がスイッチをＯＦＦにするとスイッチが消滅し簪が目を覚まし
た。
「「「やったーーー！！！！」」」
「これがエレキの力、やっぱり普通じゃなかった」
一夏はエレキスイッチを元に戻し変身を解除した。

それから衰弱気味の簪を回収して学園に戻った。
医務室の先生によるとただたんに衰弱しただけなので
2日ほど安静にしていればいいとの事。
「ま、ひと先ずこれで一件落ちゃｋ」
「あーーーーーーーーーー！！！！！！！！」
突然、一夏が叫び声をあげたので何事かと思い振り向くと
一夏は涙目の状態だった。
「お、俺、千冬姉にひどい事言った」
「ど、どうしたんですか？一夏さん」
「「「「は？」」」」
その頃、千冬はというと……
「ひっく！！うぅ～」
「だ、大丈夫ですか？先輩」
部屋で山田先生に今日の事を愚痴っていた。
「大丈夫な訳なかろう！！！一夏を叩いてしまった。もう、嫌われ
た」
千冬は号泣しながら山田先生に泣きついていた。
普段の千冬からは想像できない状況に
山田先生はかなり困惑していた。
「で、でもさっきの話だと織斑君が悪いのでは？」
「それでもだ！！！それでも私は一夏に手を上げないと
誓っていたのに手を上げて…うわぁぁぁ～ん！！！」
ひたすら泣き続ける千冬にオロオロしながら
一晩中慰め続けた。

第１４話　電・気・変・身（後書き）

こんばんわ～ケンでっせ～
如何でしたか？宿題多すぎんだろといつも呟きながら
更新しております。オリゾディアーツは必ず入れますので
ご安心を。それでは、さようなら～

第１５話　姉・弟・喧・嘩

あれから一夏はかなり後悔しているのか何度か謝りに行こうとしたがその時に限っていつも千冬はいないと言われていた。
しかし、それは千冬が全ての教師に頼んだ事であり本当は職員室にいるのだが
今は会えないとして一方的に一夏を門前払いしていた。
そして今日は学校が９時登校なので新スイッチのテストを複数していた。
ライダー部の全員がラビットハッチに集合していた。
「箒さん、今日は朝稽古はないのですの？」
「ああ、今日は休息日らしい」
珍しく箒も出席していた。
するとラビットハッチのドアが開き全員がその方向を見ると
そこには一夏と一夏に連れてこられた簪がいた。
「な、なんでそいつがここに！？」
箒は驚いた様に一夏に聞くと一夏はケロッとしてこう言った。
「こいつを再教育する為に仮面ライダー部に入部させることにした」
「「「えーーーー！？」」」
「あ、あの、その。ごめんなさい！！！！」
簪の謝罪を見て４人は黙りこくってしまった。
「私の所為で迷惑を掛けてしまって」
「ま、反省もしてるしさ、それにこいつ頭も良いんだよ」
「一夏がいいというなら別に良いけど」
「「同感」」
「よーーし！！ライダー部一人増えたぜ！！！」
「だから、そんな部は無いって。は～
じゃあ、今日のテストはＮＯ１４のスモーク、ＮＯ１５のスパイク
そしてＮＯ１６のウインチよ。実戦でも使えるか試して頂戴」

「任せろ」
一夏は太陽から3つ受け取ると交換した。
『スモーク、スパイク、ウインチ』
「あ、言い忘れてたけどスモークは使っちゃだm」
『スモーク・オン』
スモークスイッチをＯＮするとラビットハッチに煙が充満した。
「げほ！げほ！」
「ば、ばか！！！使わないでって言ったでしょ！！！！」
「ま、前が見えん！！！」
ラビットハッチは一時、混乱に見舞われ煙が
入口から出るまで何も出来なかった。
「あ～悪い」
「「「「「馬鹿！！！！」」」」」
「すみません。じゃあ、次行く？」
「もう時間が無いから行きましょ。一夏の所為でね！！！！」
「す、すみません」

「皆さん、今日は嬉しいお知らせがありますよ～」
今日のＳＨＲはこの一言から始まった。
「なんと転校生がこのクラスに二人も来ます！！！！！」
その連絡を受けると教室は生徒達のざわめきに支配された。
なんせＩＳ学園に転入しようとすれば国家、もしくは企業の推薦を
貰わなければ編入試験すら受けられない。
そう言う事で転入生は国家の代表候補生がほとんどである。
「はいはい。静かにしてくださ～い。では、入って来てくださ～い」
山田先生がそう言うと同時にドアが開き二人の生徒が入ってきた。
一人は銀色の髪の毛をそのまま伸ばしましたみたいな髪の毛であり
もう一人の要旨は何やら魔女が着る服の様なものに改造された制服

を着ており
ちゃっかりフードもキチンと作られていた。
そのフードを取ると金髪碧眼の少女の顔が現れた。
「フランス代表候補生の
シャルロット・デュノアです。よろしくお願いします」
もう一人の生徒はまっすぐに立っていた。
片目は眼帯で隠しておりウサギのマークが描いてあった。
「ボーデヴィッヒ。挨拶をしろ」
「はい、教官」
「ここでは先生だ」
千冬に言われるとボーデヴィッヒは敬礼をしながら自己紹介をした。
「ラウラ・ボーデヴィッヒだ」
「「「……」」」
「そ、それだけですか？」
「これだけだ」
するとラウラは一夏の方に歩きだし始め目の前に来ると
睨みつけながら頬をはたいた。

「ドイツの挨拶はこうすんのかよ」
「な！！！！」
かに見えたが一夏はラウラの手を目もくれずに片腕で止めていた。
「認めん！！！！貴様が教官の弟などと！！！」
ラウラがそう発言した瞬間、一夏は顔色を一気に変え
ラウラを教室の床にたたきつけた。
「ぐぁ！！」
「おい、忠告しておいてやる。俺を織斑千冬の
弟として見るな。織斑一夏として見ろ」
「織斑、席に戻れ」
「はい」
一夏はラウラの拘束を外すと座席に戻りラウラも

一夏を睨みつけながら自分の座席に座った。
「い、１時間目は実習ですので遅れないで下さいね～」
「あ、あの織斑先生」
「織斑、遅刻するなよ」
一夏が千冬に話しかけようとすると千冬は引き離すように実習の準備にいった。
「はい」

アリーナに着くと既に1，2組が全員整列していた。
今回は合同授業らしい。
「では、これより合同授業を始める！！！」
「「「「「「はい！！！！！！」」」」」」
女子たちの気合いの入った声が響き渡った。
目の前にはジャージを着た千冬が立っており担当はあの世界最強なので気合が入るのも無理はないのだろうか。
太陽は学園から特別に許可をもらっているのでＩＳスーツではなくジャージでレポートを取っていた。
「今回はＩＳの簡単な操作をしてもらう」
「どいてくださ～～～～～～い！！！！！！」
上から山田先生の声が聞こえ見上げると打鉄を纏った山田先生が上空から落ちてきた。ＩＳは補助がないとただの鉄の塊である。
これが生徒の上に落ちたら……まあ、クビは確実である。
「あ～もう！！！」
一夏は白式を展開し山田先生をキャッチすると拍手が送られた。
「何で落ちてきたんですか？」
「足を滑らせちゃって、そ、それとは、離してくれませんか？」
麻耶は顔を赤くしながら一夏に頼み込んだ。

なぜなら今の体勢はお姫様だっこ、そのものである。
「あ、すみませ、うぉ！！！」
一夏が降ろそうとすると目の前を青い光が通過した。
横を見るとセシリアがライフルで狙い撃ちをしていた。
「ほほほほほ～外してしまいましたわ」
「貴様ら、覚悟はいいか？」
後ろには鬼が、いやそんな言葉では形容できない程の
恐ろしい何かが立っていた。
その後、少ししばかれ無事授業は進められた。

その頃、学園の一通りの少ない場所で一人の生徒が苛立っていた。
「なんでお姉ちゃんばかりが褒められるの！！
私だって頑張ってるのに少し失敗するだけで貴方のお姉さんは
こんな事は失敗しないって先生に言われるし上級生からは
恥さらしって言われるし！！！！！もう嫌だ」
『潰したくはないか？』
「え？だ、誰！？」
後ろを振り向くとそこにはスコーピオンが立っていた。
その手にはスイッチが握られていた。
『君を罵る奴らを全員、その手でつぶしたくはないか？』
「そうしたいけど私はＩＳもうまく使えないし」
『ならこれを使いたまえ』
スコーピオンはスイッチを渡そうと手を伸ばすがその生徒は
警戒しているのかなかなかスイッチを受け取らなかった。
『これを使えば力が手に入る。さあ、宇宙に夢を、星に願いを』
スイッチを受け取りプッシュすると星座が浮かび上がり
ゾディアーツへと姿を変えさせた。

『こ、これは！？』

『おめでとう。これで君は力が手に入った。ハウンド』

第１５話　姉・弟・喧・嘩（後書き）

こんばんわ、今回で今年最後の更新です。
皆さん、今年の１年は如何でしたか？
お正月も変わらず更新致しますので何とぞよろしくお願いします。
それでは、良いお年を

第16話　千・冬・崇・拝

実習は無事終わり、その後の授業も終わった一夏はシャルルに
模擬戦に誘われ今は第3アリーナにいた。
実はもうすぐ個人別大会が開かれるのでアリーナは結構な人が
自主連に励んでいた。その中に一夏達がいた。
「織斑君、準備は良い？」
「一夏で良い。ああ準備はオーケーだ」
「じゃ、始めるよ」
シャルルはマシンガンをコールし一夏に連射し始めたが
一夏はそれをかわしシャルルに切りかかるがそれをシャルルは
近距離武器で防ぎもう片方の腕にライフルをコールした。
「高速切替（ラピットスイッチ）か」
「よく知ってるね。喰らえ！！！」
一夏はもろにそれを受けるが距離を取ろうとも
避けようともしなかった。
「でも、これで終わりだ」
雪片弐型が淡く輝きだし次の瞬間にはエネルギーの斬撃が
シャルルに零距離で直撃し大爆発を起こした。

結局あの模擬戦はアリーナの時間が来たためドローとなったが
エネルギーの残量は一夏が多かった。
「強いんだね！！一夏は」
「いや、俺はまだまだだよ。千冬姉に…は」
「どうかしたの？」
一夏の言葉が急に弱弱しくなったのに不思議に思った
シャルルは尋ねてみたが一夏は何もないと言った。
そのまま廊下を歩いていると前から千冬が歩いてきた。

「お、織斑先生！！！！」
「なんだ？織斑」
「今日の晩、寮長室に」
「駄目だ。私も忙しいんだ」
一夏が喋りかけると千冬は冷たくあしらいそのまま
振り返りもせず帰っていった。

現時刻、１８：３０分
「あ～どうすりゃいいんだ」
「それは貴方が悪い」
「そうだけどさ～」
一夏はベッドに横たわり呟くと太陽が髪を乾かしながら
呆れ気味につっこんだ。
「まあ、今は反抗期の時期と言われてるけど
そんなのただの自分の強さを誇示したがる調子のりなだけよ」
「……」
「ま、この事は貴方が成長するチャンスだと思えば良いんじゃない？」
「でも、千冬姉がとりあってくれないと」
「は～。貴方はどれだけ姉さんに甘えれば気が済むの？」
「別に俺は甘えてなんか」
「甘えてるわよ。むしろ甘え過ぎ。今回の事だって
貴方は千冬さんは自分に手を出さないって甘えてるから
あんなひどい事を言った。違う？」
「……」
「貴方は自分に少しでも関係のある人は護るって言ってたけど
護るどころか傷付けてるだけじゃないの。貴方は千冬さんの脛をかじって
威張ってるようなものよ」
「俺は……」

その時学園を偵察していたバガミールから連絡が入り
コール音が鳴り響いた。

その頃、千冬はラウラと話していた。
「何故ですか！？教官！！！」
「何度も言っているだろ。私は教師だ。教官と呼ぶな」
「お願いです！！再びドイツで教官として来て下さい！！！
こんなＩＳをアクセサリーの一種と見なしている奴らに教官が
教えていては教官の腕は落ちます！！！！」
「そこまでにしておけよ、クソガキ」
「！！！！！！」
千冬の殺気にラウラは体を固まらせた。
第一線を退いているとはいえ初代世界最強である。
「私は教師に望んでなった。それだけだ」
「し、しかし！！！！！」
その時、木々が何かに薙ぎ倒された。
そこにはハウンドゾディアーツがチェーンを両手に持って立っていた
「な、なんだ！？」
『す、凄い！！！この力ならやれる！！！私はやれる！！！』
ハウンドは両肩のチェーンを取り振り回し木々をなぎ倒していった。
「貴様！！！何者だ！？」
ラウラはＩＳを展開しハウンドに向かったがチェーンに阻まれ
上手く近寄れなかった。
『専用機持ち！！！！潰す！！！！！』
ハウンドが両手から何かを射出しようとした瞬間、
後ろから声が聞こえてきた。
「待ちやがれ！！！犬っころ！！！！！」
『ん？』
「き、貴様なぜここに！？邪魔だ！！！」

「一夏、あれはりょうけん座の、ハウンドゾディアーツよ」
「ああ、解析頼むぜ」
「ええ、任せて」
『3・2・1』
「セシリア達は周りの皆の避難を頼む！！！」
「任せて下さい！！！」
「変身！！！！」
一夏はフォーゼとなった。

「な、なんだあれは！？」
「宇宙来たーーーーーー！！！！！！」
『な、なんなの貴方は！？』
「仮面ライダーフォーゼ！！！タイマンはらせてもらうぜ！！！」
『あぁぁぁ！！！』
ハウンドは高速で動きながらチェーンをフォーゼにぶつけていった。
その速さに一夏はついていけず何度もチェーンを喰らってしまった。
「うぉ！こ、こいつ速い！！！！！」
「あ！一夏！！！あのスモーク使えるんじゃ！？」
「おお！！ナイス鈴！！！」
一夏は鈴の助言を聞きひらめいた様にスイッチを入れた。
『スモーク・オン』
「喰らいやがれ！！！」
『きゃ！！げほ！な、何これ！？』
右足に現れた発煙装置から大量の煙がハウンドに向けて
吐き出され目くらましとなった。
「おお～！！！すっげえ！！」
「よ～し！！次はトゲトゲよ！！！」
『スパイク・オン』
一夏はスモークをＯＦＦにしスパイクをＯＮにすると
左足に無数の棘が付いているユニットが現れた。

「行くぜ！！！」
『ぐぅ！！』
一夏が蹴りを入れるとそれに合わせて棘が伸縮し
ダメージを与えていった。
「そらそらそら！！！」
「うわぁ～。痛そう！！」
その光景を見ていた鈴は思わず顔をしかめていた。

『こ、こんな所でやられるわけにはいかない！！！！！』
「逃がすか！！！」
『ウインチ・オン』
ハウンドは逃げようとするが一夏はウインチをＯＮにした。
「そら！！」
『きゃ！！何これ！？』
「はっは～。捕まえたぜ！！」
「よ～し。最後はビリビリよ～！！！」
『エレキ。エレキ・オン』
一夏はエレキをＯＮにするとロッドが右腕に現れ全身が
金色に染まりエレキステイツにステイツチェンジをした。
一夏はロッドのプラグに差し込むとロッドに電流が流れ込んだ。
「喰らえ！！ライダー電気ショック！！！」
『うわぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！』
一夏はウインチにロッドを触れさせると電流が
ウインチを伝いハウンドを痺れさせた。
「まんまじゃないのよ」
「一夏はネーミングセンスはいまいちだからね」

『あ…ぐ』
「今元に戻してやるからな」

『リミットブレイク』
一夏はエレキスイッチをロッドに差し込むと警報の様な
音が鳴り響きリミットブレイクが発動した。
「行くぜ！！ライダー１００億、うぉ！！！」
一夏が行こうとした瞬間に後ろからミサイルの様なものを
撃ちこまれた衝撃でロッドを落としてしまいスイッチも外れ
ステイツが元に戻ってしまった。
「誰だ！？」
後ろを振り向くと大きなレールカノンで一夏を
狙撃したラウラが立っていた。
その隙にハウンドがウインチを切って
逃走をした。
「どけ！！！そいつは私が倒す！！！」
「今はそんなグダグダ言ってる場合じゃねえんだよ！！！」
『ロケット・オン』
「逃がすか！！！」
一夏はロケットを装備しハウンドに追い打ちをかけようとするが
ラウラが一夏に飛びつきバランスを崩した。
「ちょ！！馬鹿！！どっか行け！！邪魔だ！！！」
「言った筈だ！！私は貴様を認めん！！ここで排除する！！」
『よく分からないけど喰らえ！！！！！』
ハウンドが両手から爪の様なものを一夏に向けて飛ばした。
「「うわぁぁぁぁぁぁ！！！！！」」
それは直撃し大爆発を起こした。

第１６話　千・冬・崇・拝（後書き）

こんにちわ！！今年最後の更新っす！！！
感想お待ちしております！！！それでは！！！！！

第17話　本・格・活・動

大爆発を起こした二人は地面に叩きつけられラウラのＩＳは
エネルギーが尽きて解除されてしまった。
「痛たたたた」
『隙ありだよ！！！』
ハウンドはフォーゼが怯んでいる隙にチェーンを何度もぶつけた。
「うわ！！くそ、あのチェーン厄介だな」
「どうしよ！？太陽！！」
「あ！そうだ、チェーンならハサミで切れば良い！！
一夏！！これ使って！！！」
太陽は鞄からシザーススイッチを取りだし一夏に投げた。
「おお！！ハサミか！！よ～し」
『シザース、シザースオン』
一夏はシザーススイッチをＯＮにすると左腕に
シザースモジュールが現れた。
「行くぜ！！」
一夏はハウンドのチェーンをシザースで切断しハウンドを切り刻んだ。
「おら！！」
『きゃ！！！』

「よし！！このまま、一夏！！後ろ！！！」
「は？うぉ！！」
後ろからスコーピオンがとび蹴りをかましてきたのを
ギリギリでかわした。
「またお前か！！サソリ野郎！！！」
『フォーゼ、貴様に邪魔はさせせん！！！ふん！！！』
スコーピオンは腕から破壊光弾を放ち爆煙をあげると

ハウンドと共にどこかに消え去ってしまった。
「くそ！！逃がした！！！」
一夏はいらつきながら変身を解除するとラウラのもとに歩いていった。
「おい、てめえ！！」
「ぐぅ！！」
一夏はラウラの胸元をつかむと食ってかかった。
「なぜあの時邪魔をした！？」
「黙れ！！！貴様ごときに倒せんのも分からんのか！！？？」
「あいつはＩＳみたいな平気で勝てるような奴じゃねえんだよ！！！
それにＩＳみたいに絶対防御がある訳でもないのにＩＳで攻撃したら
スイッチャーに負担がかかるだろうが！！！！」
「一夏さん！！落ち着いて下さい！！！今はスイッチャー
を探す方が先ですわ！！！」
「そうよ、一夏！！！」
「ちっ！！分かった」
一夏は鈴とセシリアの呼びかけで落ち着いたのかラウラを離し
ラビットハッチへと帰っていった。
「お怪我はありませんか！？教官！！！」
「あ、ああ」
「織斑先生は良い御身分ですね」
ラウラが千冬に怪我の有無を確認していると後ろから
太陽の声が聞こえてきた。
「どういう意味だ！？」
「あんたみたいな奴らに崇拝されてウハウハ気分ですか」
「貴様！！教官を侮辱するのか！？」
「待て、ボーデヴィッヒ。どういう意味だ？如月」
「一人の生徒すらまっとうに教育も出来ないでよく教師だって
名乗ってますね。これなら一夏が暴言を吐いたのも分かるわ」
「き、貴様！！」

ラウラが太陽に飛びつこうとした瞬間に千冬が止めに入った。
「きょ、教官！！！」
「ボーデヴィッヒ。お前は帰れ」
「し、しかし！！」
「言う事が聞けんのか」
「す、すみません」
ラウラは肩を落として帰っていった。
その後数分、千冬は太陽と話しこんで自室へと帰っていった。

ラビットハッチではライダー部が話しこんでいた。
「あーー！！！もう！！イライラするわね、あいつ！！！！」
鈴はまだ怒りが収まらないのか椅子をガンガンと蹴っていた。
それは他の部員も同じだった。
「落ち着け、鈴。苛立っても仕方無い」
「あんたにだけは言われたくないわね」
一夏はそう言うも相当イライラしてるのか先程から
スイッチをＯＮにしたりＯＦＦにしたりと忙しく指を動かしていた。
すると奥の方で情報を収集していた太陽と簪が部屋から出てきた。
「どうだったのですか？」
「うん。如月さんにはスイッチャーを探してもらって私はラウラさんに
ついて調べてたんだけどまあまあ分かったかな」
「じゃあ、まずはスイッチャーから行こうか」
一夏がそう言うと太陽は解析画面を見せるとそこにはＩＳ学園の監視カメラの映像だった。
「お前これ」
「ハッキングしちゃった。テヘッ？」
「「「「「テヘッじゃねえよ！！！！」」」」」
この瞬間だけは全員の性格が改変され関西人になった。

「まあ、そんな事は置いておいて」
「おいといていいのか？」
箒は疑問に思ったがまあ、ほっといた。
「見て、ここに映ってるの分かる？」
太陽はほんとに小さな個所を指差したが全く見えなかった。
「太陽さん。全然見えないんですが」
「で、こっちが拡大なんだけどね」
「「「「「それを見せろよ！！！！」」」」」
拡大画面にはスコーピオンがスイッチを渡している映像が見えた。

「この生徒の名前は布仏本音。３年生の布仏虚の妹よ」
「あれ？こいつ1組にいなかったか？」
「ええ、いるわ。ほら、貴方がのほほんさんて呼んでる人よ」
「ああ！！こんな名前だったのか」
「知らなかったのか？一夏」
「あ、ああ、まあな」
「それは良いけど動機はなんなのよ」
鈴が太陽に質問すると今度が簪が喋り始めた。
簪の話によると本音は自分とは幼馴染らしい。
「多分本音がゾディアーツになったのはお姉さんが
原因だと思うの」
「姉さん……か」
「うん。虚さんは整備課で3年の中では主席なの。でも、
本音はお姉さんよりも出来ないって周りの人から言われてて
それでいつも悩んでたから」
「……俺と一緒だな」
「え？」
一夏はポツリと呟くと過去の話をし始めた。
それは本音と似たような境遇だった。
「俺のところも姉さんが昔から凄かったんだ。剣道は

勿論強かったし勉強だっていつも満点近い成績を取ってて
通知表もオール5なんか珍しくもなかった。でも、
俺はさ勉強はいまいちだし剣道もさほど強くない。
唯一勝てるのは宇宙の事だったけどそんなの誰も認めてくれなかった。
周りはいつもあの人が弟さんを想ってわざと答えていないんだって
言われたし教師からも姉さんならこんな事は間違わないって言われたな」
一夏の話を聞いていた者は誰も口を開こうとはしなかった。
本音の物と同じだったからだ。

「一夏は凄いと思うよ！！！」
簪が急に大声をあげて話し始めた。
「一夏は今はフォーゼになって私を助けてくれた！！！こんなの
一夏にしかできない凄いことだよ！！！！」
「そうだぞ！！一夏！！！お前だって十分凄い！！自信を持て！！！」
簪に同調するように全員が声を揚げだした。
「ああ！！あいつにもその事を教えてやらねえとな！！！
仮面ライダー部の活動開始だーーーーーーー！！！！」
「「「「おーーーーー！！！！！！」」」」
こうして本音を助ける為に仮面ライダー部は動き出した。

第17話　本・格・活・動（後書き）

明けましておめでとうございます！！
今年も良い年でありますように！！
それでは、さようなら！！！

第18話　姉・妹・喧・嘩

翌日、一夏は朝早く起きて寮長室の前に立っていた。
千冬に謝りに来た為であった。ドアを何回かノックするも
やはりいないのかそれとも居留守を使っているのかは分からないが
反応が無かった為、ドアの前で謝ることにした。
「千冬姉？起きてたら聞いてて。この前はひどい事言ってごめん。
千冬姉の苦しさなんか知らずにあんなひどい事を言って。
もしもこの話を聞いてたら放課後に俺の秘密を話すから
屋上まで来て下さい。それじゃ」
千冬は部屋の中で一夏の謝罪と誘いを聞いていた。
丁度ノックされた時に目を覚ましたのだった。
「……一夏」

そして時間は流れ昼休み。
鈴とセシリアは個人別トーナメントに備えて鍛錬を
しようとアリーナに来ると鉢合わせになってしまった。
「あら、鈴さん。どうしてここに？」
「それはこっちの台詞よ。なんであんたこそここに」
「私は今度の大会に向けての特訓ですわ」
「奇遇じゃない。あたしもそうなのよ。ねえ、この際
どっちが強いか決めない？」
「良いですわね。私の力見せて差し上げますわ！！！」
二人は自身の専用機を展開し模擬戦を始めようとした瞬間
二人の間を荷電粒子砲が抜けていき地面を爆発させた。
「誰よ！！！」
二人が飛んできた方向に目を向けるとそこには

専用機を展開したラウラの姿があった。
「イギリスの第三世代ＩＳ、ブルー・ティアーズと中国の第三世代ＩＳ、甲龍か。スペックで見た方が強そうだな。所詮は、古いのと多いのが取り柄の国か」
「我が国を侮辱しますの！？」
「悔しかったらかかって来い。実力の差を見せてやる」
「はっは～。いい度胸じゃない。セシリア」
「ええ、行きますわよ！！！！」

その頃一夏とシャルルは昼食を食べ終え教室に戻ろうとしていた。
すると何やらアリーナの方が騒がしいので行ってみるとどうやら模擬戦をしているらしく野次馬がたくさんいた。
しかし、些か野次馬の顔は引きつっていたので二人もその様子を見てみると
そこには鈴とセシリアが圧倒されている場面だった。
二人の装甲はすでにボロボロでダメージレベルはＣを超えていた。
「あの野郎！！！白式！！！」
「い、一夏！？」
一夏は白式を展開し雪片弐型でシールドバリヤーを切り裂き
二人を救助に向かった。
「ラウラーーーーー！！！！」
「何だ貴様か。ちょうどいい、見ていろ貴様の友を潰してやろう」
ラウラが鈴にとどめを刺そうとエネルギー手刀を振り上げた瞬間、
「やめろっつってんだろうがーーーーーーーーー！！！！！！！」
一夏の叫び声が聞こえ手刀が何かに弾かれた。
「な！」
ラウラは驚き一夏の方を向くとそこにはバチバチと
音を立てている白式が立っていた。
「貴様何をした！？」

一夏も自分が何をしたのかよく分かって
いないような顔をしていたがすぐにラウラの方向へ振り向いた。
「そんな事はどうでも良い！！！お前は俺に用があるんだろうが！！！
だったら俺にかかって来いよ！！！！」
「良いだろう。ここで貴様を潰してやろう！！！」
ラウラが手刀を持ち一夏に突っ込もうとした瞬間、
近接用ブレードを片手に持った千冬に止められた。
「まったく。これだからガキの扱いは困る」
「きょ、教官！！！」
「刀を下せ、二人とも。シールドバリヤーを破ってまで
戦うようでは止めざるを得ない。この決着はトーナメントで決めろ」
「教官がそう仰るなら」
「分かりました」
「よし。今後一切の私闘を認めん！！！」

その後シャルルにも手伝ってもらい二人を保健室まで運ぶと
二人にＩＳがダメージレベルＣを超えた為試合は無理だと言われ落
ち込んでいると
保健室に雪崩のように生徒達がたくさん入って来てこう言った。
「「「「「「織斑君！！！私と組んで！！！！」」」」」
「どういう意味だよ」
「これ」
手渡された手紙には今回のトーナメントは二人一組での
参加を命じると書かれておりどうやら前の非常時に備えての事みた
いだ。
「あ～悪い。俺、シャルと組むから。な？」
「うん」
実は一夏は簪からのリーク情報により皆よりも早くに

情報を知っておりシャルにその事を伝え先手を打っていたのだった。
それを知ると生徒達は肩を落としながら帰っていった。

そして時間はさらに流れ放課後になると一夏は屋上にいた。
千冬が来れば秘密を話すというのを果たす為であったが
既に放課後から1時間経っており一向に来る気配はなかった。
辺りも日が暮れ始め暗くなりかけていた。
「やっぱ来ないか」
一夏が諦めて自室に戻ろうとした時、屋上に通じる
ドアが開いた音がした。そこには千冬がいた。
「一夏……」
「千冬姉…」
「「ごめん（すまない）！！！！」」
二人して同時に頭を下げ謝罪をしていた。
「え？なんで千冬姉が謝るのさ」
「わ、私はお前に手をあげてしまったから」
「そんな事どうでもいいよ！！！！」
「どうでもよくない！！！」
「！！！！！」
「私は両親に捨てられてからお前には決して手をあげずに
護ろうと誓った！！！なのに私はお前を」
「千冬姉」
一夏は千冬にそっと抱きついた。一夏の背は千冬と同じくらいであり
楽に抱き締める事が出来た。
「良いよ。俺は千冬姉にひどい事を言ったんだ。そんな事に比べれ
ば」
「だ、だが私は」
「あーーーーもう！！！だったらお互いに悪かったという事で
今回の事はながそう！！！！」

「…ふふ！！お前は昔から大雑把だったな」
それから一夏はフォーゼの事やゾディアーツの事を全て
包み隠さずに千冬に話した。それを千冬は何も言わずに聞いていた。

「これが俺の抱えている秘密」
「では今度は私」
千冬が話しかけた時一夏は急に立ち上がった。
「良いよ、千冬姉。また今度で」
「だが」
「確かに両親の事は知りたいけど今は千冬姉が
家族なんだしそれで良いや。また今度ゆっくり教えてね」
「ああ。すまない」
「じゃ、帰ろうか」
「一夏」
「ん？」
帰ろうと歩きだしたとき千冬に呼び止められ後ろを振り向くと
千冬は家族である一夏にしか見せない笑顔でこう言った。
「明日からのトーナメント。頑張れよ！！」
「ああ、頑張る！！！」
こうして織斑姉弟の初めての喧嘩は無事幕を閉じた。

しかし、ある姉妹はさらに関係が悪化している事に
一夏は気づいていなかった。それは、一夏が千冬と
仲直りする１５分前の事。生徒会室にて。

「何回言ったらわかるの！！？？もっと布仏家の
誇りを持ちなさいって言ってるでしょ！！！！！」
「うるさいよ！！！誇り誇りってお姉ちゃんは硬すぎるんだよ！！
！！」
「貴方がいい加減にしてるだけでしょうが！！！！」

「たまには私の好きにさせてよ！！！」
「ただでさえ貴方はやることが遅いのにこれ以上好きにやらせてたらもっと遅くなるでしょうが！！！」
「そんなの仕方がないでしょ！！！生まれたときからこうなんだもん！！！！！」

生徒会室で本音とその姉の虚は姉妹喧嘩をしていた。
別にこれが初めてではないが最近はかなり頻繁に言いあいしており
楯無も初めは止めに入っていたがこれは手に負えないと悟り
経過を見守ることにした。

「だったら少しでもＩＳの整備の知識を上げる為に勉強しなさいよ！！！」
「まだ１年生だからそんなに詰め込まなくてもいいでしょ！！！！」
「私が１年の時は貴方よりも良かったのに今の貴方の成績を見てみなさいよ！！！」
「どこが悪いの！？学年で５位以内に入ってるんだからいいじゃない！！！」
「そう言う問題じゃないの！！！あーーもう！！貴方の事を日々言われてるこっちの身にもなってよ！！！！」
「それってどういう意味！？ねえ、教えてよ！！！」
「貴方が出来損ないって言う事よ！！！！」
「！！！！！！」
「いつもいつも言われてる私の身にもなってよ」
本音はその言葉を聞いて言葉を失った。いくら上級生に咎められようが
姉には慰められていたので耐える事が出来た。しかし、姉にも言われた
事で今まで溜めていたものが一気に涙として、そして
憎しみとして溢れ出してきた。

「虚ちゃん！！今すぐ謝って！！！」
「あ、本音ごめｎ」
虚が楯無に言われ自分の過ちに気付いたのか
すぐに謝ろうとしたが時すでに遅し。
「もう良い！！！私は布仏から出ていく！！！
お姉ちゃんはあとで潰す！！！覚えておいて！！！」
本音は涙を流しながら生徒会室から出ていった。
「待って！！！本音！！」
虚が後を追いかけようと慌てて外に出たが既に本音の
姿はどこにも見えなかった。

第１８話　姉・妹・喧・嘩（後書き）

こんにちわ～ケンです。
如何でしたか？今日から塾だと考えると吐き気と目眩が。
そんな事で今年も頑張っていきましょう！！！！！

第19話　怪・物・最・強

翌日、事態は一気に急変した。
それは楯無と虚が一夏の部屋に来たことから始まった。
「どうしたんですか！？その足の傷！！」
一夏が見て驚いたのは虚の足には無数の切り傷の様なものがあり
血もかなり出て痛々しかった。
「本音が！！！本音がどこにもいないんです！！！お願いです！！
本音を探してください！！！お願いします！！！」
虚は涙を流しながら土下座をしていた。自分の足がひどい怪我を
しているにも関わらずそんな事には一切触れずに本音の
捜索を頼みに来ていた。
「お、落ち着いて下さい！！何があったんですか！？」
「実はね」
楯無の話によると虚と本音が姉妹喧嘩を起こしそのまま
本音が出ていったきり部屋にも戻っておらず虚は
パニックになって裸足である事にも拘らず
学園を飛び出して探したがいないとの事。
それで楯無達は一夏に助けを求めに来たという事らしい。

「お願いです！！！織斑さん！！！本音を！！」
「虚さん。顔をあげて下さい」
「織斑さん」
「のほほんさんは仮面ライダー部が必ず見つけます！！！！
太陽！！！皆にこの事を連絡してくれ！！！」
「分かったわ！！！」
太陽はすぐさま仮面ライダー部員に室内電話を使い皆を
一夏の部屋に集めると先程の事を話した。
すると全員が本音を探すと言い慌てて外出届を出しに行った。

一夏もバイクに乗り校外へと探しに行った。
その光景を見ていた楯無と虚は言葉が出てこなかった。
他人であるにもかかわらずここまで必死に探してくれることに
虚は感激し涙を流しながらお礼を言った。
「ありがとう！！ありがとうございます！！」
「礼を言うのは後で良いわ。それよりも早く探さないと。
更識妹さん。貴方はそっちのエリアの監視カメラをハッキングして」
「分かった」
特に簪は気合いが入ってるのかいつもよりも速いスピードで
キーボードを叩いていった。

その頃本音は自暴自棄になりながら街中を歩いていた。
〜もう私を庇ってくれる人なんていない〜
するといかにもヤンキーなチャラチャラした数人が本音の
事を見るとニヤニヤし始めた。
「なあ、あいつ可愛くね？」
「ああ、おっぱいもでかいし。俺、めっちゃタイプ」
「犯すか？」
「は！！良いね、犯して俺らの玩具にするか」
そう言うとその数人は本音を人目の少ない裏地へと無理やり
押し込んだ。しかし、本音は抵抗も何もしなかった。
〜……憎い！！憎い！憎い！憎い！全てが憎い！！！〜
「あれ？もしかしてこの子痴女じゃね」
「はは！！言えてる！！じゃ、俺から」
男が本音の胸に触れようとした瞬間、急にその男が倒れ伏した。
他の男も同様に倒れ伏すとそこにはスコーピオンが立っていた。
「貴方は」
『君は人間を捨てる覚悟があるか？』
「…当たり前。もうこんな世界なんかいらない！！！

全部壊してやりたい！！！！」
『ならそのスイッチを押すがいい。
もうすぐラスト・ワンだ』

「どこにいるんだよ！？」
すると太陽に渡された携帯が鳴り響いた。
「分かったか！？」
『ええ！！監視カメラに映ってるわ！！今から送るからそこに
行って頂戴。私達もすぐに行くから』
「ああ、ありがとな！！」
携帯を切るとすぐにメールが届きそこには本音がいる場所の地図が
添付されて送られてきた。それを見た一夏はエンジンをフルにつけ
急いで向かった。

「あ、来た来た」
「のほほんさん！！こんなとこにいたのか。さ、帰ろうぜ！！」
一夏が本音の手を引き帰らせようとするが本音は動こうとしなかっ
た。
「のほほんさん？」
「ねえ、オリムー。私ね気付いたの」
「何にだよ」
「私はお姉ちゃんにも皆にも必要にされていないんだって」
「そんな事はない！！あれから虚さんはお前を必死に夜通しで探し
てたんだ！！！」
「嘘だ！あの人がそんな事する筈がない！！
こんな世界、全部壊してやる！！！！！」

「本音！！！」
後ろから虚達が急いできた。
「お願い、本音！！！謝るから、戻って来て！！！」
『ラスト・ワン』
スイッチが本音の憎悪に呼応するように
禍々しいものに変化した。
「止めろ！！！のほほんさん！！それ以上堕ちたら戻れなくなるぞ！！！」
「そんなのどうだっていい！！！！！」
本音はスイッチを押すとりょうけん座が現れ本音の精神がゾディアーツとなり
体が繭に包まれ排出された。その姿を見た虚はショックのあまり気を失い倒れてしまった。
「ほ、本音が怪物に」
「虚ちゃん！！しっかりして！！！」
『演技もいい加減にして！！ばればれだよ！！』
「演技なんかじゃねえ！！お前を心配してくれてんだ！！」
『黙って！！貴方に何が分かるの！？』
「俺もお前と同じだった！！優秀すぎる姉を持って周りには
自分は咎められてばかりだった。でも、俺はのほほんさん
みたいにはならなかった！！！俺は千冬姉を信じてるからだ！！！」
『信じる！？そんなの一方的な物でしかない！！！』
「違う！！！虚さんだってお前の事を信じている筈だ！！
そりゃ喧嘩をする時だってある！！！ひどい事を言われたり
言ったりすることもある！！それでも俺は姉さんを信じる！！」
一夏はドライバーを出しスイッチを順番に押していくと
カウントが始められた。
『3・2・1』
「変身！！！！！」
一夏はレバーを引き仮面ライダーフォーゼとなった。

「宇宙来たーーーーー！！！！！」
『あ、貴方が！！』
「仮面ライダーフォーゼ！！タイマンはらせてもらうぜ！！！」
『ロケット・オン』
「ライダーロケットパーーーーンチ！！！！」
『きゃぁぁぁ！！！』
ハウンドはロケットパンチを喰らい遠くに吹き飛ばされた。
それを一夏は追いかけていくとその後を部員達も追いかけていった。

「よっと」
『ランチャー・オン』
「喰らえ！！！」
『全部落とす！！！』
一夏はミサイルを放つがハウンドはそれを全て爪の様なものを
両手から射出して迎撃した。
「やるじゃねえか。だったらこいつで行くぜ！！」
『エレキ。エレキ・オン』
『い、色が変わった！？』
「行くぜ！！」
一夏はロッドでハウンドを切り刻んでいった。
ハウンドも負けじと反撃をしようとするが一夏は
電磁ネットをハウンドに纏わりつかせ反撃を許さなかった。

『きゃあ！！』
「よし、行くぜ！！おらおら、ぐうぇ！！」
一夏が追撃を加えようとハウンドに近づこうとすると
横から何かに蹴とばされこけてしまった。
「誰だ！？ってサソリ野郎！！」
そこにはクロークを脱ぎ捨て身軽になったスコーピオンが立ってい

た。
『フォーゼ、貴様はここで倒す』
「くそ！！厄介な時に！！」
『こっちもいるよ！！』
「しまっ！！うわぁぁ！！」
一夏はスコーピオンの攻撃を避けるのに集中しすぎてハウンドの攻撃を避けきれずにもろに喰らい
さらにスコーピオンの破壊光弾も加えられ吹き飛ばされた。

「ああ！！またサソリが！！！」
鈴が鬱陶しそうに言うのを聞いた太陽はパワーダイザーを遠隔操作し自分のいる場所にまで移動させた。
「私はもうどうなってもいい。私にはこれしかない！！！」
太陽がパワーダイザーに乗り込もうとした時後ろから誰かに肩を掴まれた。後ろを振り向くとそこには…
「保健室の常連には重すぎる物だ。こう言うのは同じ怪物がするものだ」
「お、織斑先生！？なぜここに！！」
「お前達が慌てて出ていったのを見てな。後をつけさしてもらった。話は一夏から聞いている。私に任せろ」
「お願いします！！」
千冬の顔は戦士の顔をしていた。

「うわ！！！」
一夏は苦戦を強いられていた。一夏といえど2対1はキツイものであった。
「さあ！！最後の狩りだよ！！！」
二人が一夏にとどめを刺そうと近づいた瞬間…

「うぉぉぉぉぉぉぉ！！！！」
「「！！！！」」
パワーダイザーが路面を滑るように近づいて来て2体に
タックルをかまし遠くへと吹き飛ばした。
「しっかりしろ！！一夏！！」
「千冬姉か！？」
「ああ」
「千冬姉、一緒に戦おう！！ここなら千冬姉も
自由に戦う事が出来る！！！」
「自由？何故だ？」
千冬は一夏に疑問をぶつけると変身している為見えないが
一夏は笑いながらこう言った。
「表面の名誉が無いからだよ。ブリュンヒルデとかそんな肩書は無
くなるんだ！！！
千冬姉は自由に自分の判断で戦えるんだ！！！それは俺たちだけの
勲章だ！！」
「私達だけの勲章か…悪くないな。行くぞ！！」
「ああ！！」
「「おぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！！！！！」」
一夏はハウンドを千冬はスコーピオンへと向かっていった。
千冬は現役時代に鍛え上げられた体力と経験でその巨体からは想像も
つかないほど身軽に動き回りあらゆる方向からパンチを加えていっ
た。
『くっ！！』
「せいや！！」
『おわ！！』
スコーピオンがダイザーのパワーで倒れた瞬間、足で抑え込んだ。
「そら！！」

『くっ！！。はぁ！！』
「おわぁぁぁぁぁぁ！！！」
一夏はハウンドに吹き飛ばされたがダイザーに掴まれ
振り回されながらハウンドに向かって投げられた。
「せーーーの！！！」
「エレキとドリルの力を組み合わせて！！」
「任せろ！！！」
『ドリル・オン』
一夏は空中でドリルをオンにしリミットブレイクを発動した。
『エレキ、ドリル・リミットブレイク』
「喰らえ！！ライダー電光ドリルキーーーーック！！！！」
『あぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！』
逃げようとしていたハウンドをドリルで貫くと
スイッチを残し大爆発を起こした。
「よっと！」
スイッチをオフにすると消滅し本音に精神が戻り意識を取り戻した。
「本音！？本音！？よかった！！！本当に良かった！！！」
虚は涙を流しながら本音を抱きしめた。
「お…姉ちゃん？」
「そうだよ！！お姉ちゃんだよ！！ごめんね！！
ひどい事言って！！ごめんね！！」
「お姉ちゃ～ん」
「何だから昨日の俺達見てるみたいだな。千冬姉」
「ふん。そうだな、…あ」
「どうかしたのか千冬姉」
「お前たち試合はどうするんだ？」
「「「あ」」」
その後ダッシュで学校にまで走りギリギリ間に合った一夏であった。

第19話　怪・物・最・強（後書き）

こんばんわ～ケンです！！！！
如何でしたか？私も姉が欲しかった。
オリゾディアーツも随時募集中で～す。
それでは！！！！

第２０話　電・気・白・式

息を切らしながら慌ててピットに入ってきた一夏達を見て山田先生とシャルは心配そうに眺めていた。
「い、一夏？大丈夫？」
「はあ、はあ、はあ。ま、まあ大丈夫だ」
「ま、まあひと先ず間に合ったんだ。行って来い、一夏！！」
千冬の激励に一夏は嬉しいながらも待ったをかけた。
「ちょ、ちょっと待ってくれ。少し休憩を」
「でも、後５分よ」
一夏はどうにかして３分で呼吸を落ち着かせ白式を展開し
シャルと共にフィールドへと向かっていった。

「なぜ貴様たちは二人揃って息が乱れてるんだ」
ラウラのペアである箒もまだ少し息が荒く膝に手を
ついて息を整えていた。
「まあ、ちょっとあってな。じゃ、始めようか」
「ここで貴様を潰す！！！！」
試合の始まりを告げる合図が鳴り響くとシャルは箒へ
一夏はラウラへと向かっていった。
一夏はラウラに雪片弐型で切ろうとするがそれをラウラは
いとも簡単にエネルギー手刀で防いだ。
「おら！！」
「効くか！！」
「だったら！！」
一夏は距離を取り遠くから突きをするとラウラの専用機
シュヴァルツェア・レーゲンの腕の部分が火花を散らし
エネルギーが少し削られた。

「な！貴様何をした！？」
「さあ？それを探すのも戦闘の醍醐味だぜ！！」
一夏はラウラが撃ってくるレールカノンを機動力をもってして
かわしながらある事を考えていた。それは先程から白式が
妙な音を発していたことだった。
〜なんなんだ。このバチバチって鳴ってる音は。
それに何だか体が重く感じる〜

その頃、ピットでは太陽がせわしく解析画面とリアル中継を交互に
見ていた。
「やっぱりそうだ」
「何がだ？如月」
「さっきからおかしいと思ったんです。一夏の動きがいつもより
かなり遅くなってます」
「じゃ、じゃあ白式に異常でも！？」
山田先生が慌てふためきながら太陽に聞くが太陽は
首を振り否定を表した。
「いや違う。白式が何かをしている？」
「あ！！まさか、白式までもステイツチェンジするんじゃ！？」
「そんな訳ありませんわよ！！いくらなんでも白式が」
「そうよ、それよ！！！！」
太陽は鈴の冗談を聞いて何かに気付いたのか慌てて
画面を二つ呼びだした。それはフォーゼの時のと白式の時のだった。
「やっぱりそうだ。見て」
太陽に言われ鈴達は画面に食いつくように見ると
左右の画面が似ている事に気付いた。
「ねえ、これ似てない？」
「確かに似てますわね」

「まさか、白式が進化でもするというの？」
太陽はモニターに目を再びやった。

「どうした！？動きが鈍いんじゃないのか！？」
ラウラが背中からワイヤーブレードが複数一夏に向けて射出された。
「くそ！！邪魔だな！！」
一夏はそれを剣で弾きながらかわしていくが徐々に壁際へと追い込まれていった。
〜一旦、空中に上がるか〜
一夏が翼を出し羽ばたこうとした瞬間に一夏の足が地面にめり込むほど質量が増した。
「な！どうなってんだよ！！！！」
「隙ありだ！！！！！」
ラウラはその隙を見逃す訳もなくレールカノンから最大威力の砲弾を何発も撃ちだし一夏に直撃し大爆発を起こした。
「間に合わなかった！！」
箒を下したシャルは一夏の援護に向かおうとした矢先に一夏がやられたのを見てしまった。
「これで後は貴様だけだ。ま、私が勝つがな」
『エレキ・オン』
「な、なんだ！？何の音だ！！！！」
会場全体に電子音声が流れ観客も不思議に思い始めたがどこから流れているものかが分からなかった。
仮面ライダー部員を除いて。
「まさかステイツチェンジなのか」
箒がそう呟いた瞬間、爆煙が一気に晴れそこに現れたのは金色にボディが変色した白式を纏う一夏の姿があった。

「な！貴様何をした！？何だその姿は！！」
一夏の目の前のウインドウには単一仕様能力（ワンオフアビリティー）
ステイツチェンジと書かれていた。
「まさか二次形態移行（セカンドシフト）？」
「いや、シャルこれは白式の力だ」
「何が起ころうが貴様を潰す！！！」
「行くぜ！！！！」
一夏は新たな武装であるビリーザロッドを右手に
雪片弐型を左手に持ち二刀流でラウラに向かっていった。
「せいや！！」
「くぅ！！舐めるな！！！」
ラウラはエネルギー手刀を弾かれると手をかざしＡＩＣを発動しようとするが
一夏は雪片弐型で手のひらを切り刻みＡＩＣのある部分が破損を起こした。
「な！！！」
「鈴達からとっくに聞いてんだ！！これで正々堂々と
タイマンはらせてもらうぜ！！！」
「くそ！！」
ラウラはエネルギー手刀をコールし一夏に向かっていったが
一夏はロッドで手刀を弾いた。
「しまっ！！」
「遅い！！喰らえ！！」
『リミットブレイク』
電子音声が流れ雪片弐型が青白く輝きだしエネルギーを溜め始め
一夏はラウラを一閃した。
「が…あ」
エネルギー尽きたのかラウラはＩＳが解除し地面に倒れ伏した。
「ふぃ～。終わった、終わった」
「やったね一夏！！」

「おう、やったな！！！」
一夏の笑顔を見た瞬間にシャルの顔が一気に真っ赤に染まった。
それを見た箒は呆れながら二人に近づいていった。
「あぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！！！！」
「「「！！！！！」」」
後ろからラウラの叫び声が聞こえ後ろを振り向くと
ラウラが何か液状の様なものに包みこまれていくのが見えた。
「な、なんだこれは！？」
その液状の様なものは人の形をかたどった。
その姿を見た一夏は怒りが溢れ出した。
「ふ、ふざけてんじゃねえぞ！！！お前、千冬姉を真似しやがって！！！」
「落ち着いて一夏！！！！！」
「うるせえ！！離せ！！あいつをぶっ飛ばさねえと気が済まねえ！！」
一夏は先程までの冷静さを失いシャルに止められるのを振り切り
今にも飛びかかろうとしていた。
「一夏！！！！！！」
箒は一夏の頬を思いっきりひっぱ叩いた。
「ほ、箒」
「落ち着け！！何があったか知らないが
冷静にならなければ死ぬぞ！！！！」
「……悪い。ありがとな箒」
一夏は立ち上がるとラウラに向かっていった。
「あぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！」
ラウラは巨大な剣を一夏に振りかざすが一夏はそれを
雪片弐型で防ぐとリミットブレイクを発動した。
『エレキ、リミットブレイク』
「ラウラ、今助けてやる！！！ライダー１００億ボルトブレーーーイク！！！」

一夏はロッドでラウラを真っ二つに切り裂くと液状の様なものの中から
ラウラが落ちてきた。それを一夏は優しく受け取ると
笑顔でこう言った。
「一発ぶっ飛ばすのは勘弁しておいてやる」

「ここは」
「起きたか」
「教官」
ラウラは目を覚ますと隣から声が聞こえ
そちらを向くと尊敬してやまない千冬がいた。
「一体何があったのですか？」
「一応機密なんだがな、貴様のＩＳにＶＴシステムがあった」
ＶＴシステムとは通称ヴァルキリー・トレース・システム。
過去のモンド・グロッソの戦闘方法をデータ化し、そのまま再現・
実行するシステム。
それがラウラの専用機に巧妙に隠されていた。
「教官、私は」
「は～。貴様は誰だ？」
「え？」
千冬の突然の質問にラウラはすぐに答えられなかった。
「貴様はラウラ・ボーデヴィッヒでありそれ以外の何ものでもない。
お前のしたい事をお前の意思でしろ」
「は、はい」
その返事を聞いた千冬は医務室から去った。
「織斑一夏……」
ラウラは誰もいない医務室で一人呟いた。

翌日の朝のＳＨＲにて。
「おはようございま～す」
いつも通り山田先生がＳＨＲを始めようとするといきなり
教室のドアが開きラウラが入ってきた。
するとラウラは山田先生に目もくれずにまっすぐ一夏の方へ向って
いった。
「ん？何か用か？」
「ああ」
するとラウラはいきなり土下座をしだした。この光景には
全員が驚いた。
「頼む！！私に戦い方を教えてくれ！！」
「は！？いやいや何言ってんだ」
「貴様の戦いは尊敬に値するものだ！！だから頼む！！」
「は～。じゃあ、条件がある」
「なんだ！！」
ラウラは目をキラキラさせながら一夏に問うと一夏は
笑いながらこう言った。
「俺の友達になって仮面ライダー部に入れ！！それが条件だ！！」
「友達？」
「ああ、そうだ！！友達だ！！！」
一夏はラウラに手を差し出すとラウラは戸惑いながらも
手を差し出し友達の証として拳を数回ぶつけあった。
「ああ！！分かった！！」
ラウラも笑顔で一夏に返事をした。
こうして仮面ライダー部はさらに増え一夏の友達人数も一人増えた。

第２０話　電・気・白・式（後書き）

こんばんわ～如何でしたか？
感想もお待ちしております～
それでは、さようなら！！！！！！

第21話　霊・感・少・女

一夏がラウラにラビットハッチ、及びフォーゼについて話したので
正式にラウラが仮面ライダー部に入部した。
しかし、一人だけ仮面ライダー部を認めていない者がいた。
それは……
「てことでラウラが仮面ライダー部に入部したのでカンパーーーイ
！！！」
「「「「「カンパーーーーイ！！！！！」」」」」
何に対して乾杯と言っているのか入らないがまあ、
当人達は楽しんでいるのでそれで良しとしよう。
しかし……
「だから！！仮面ライダー部はないって言ってるでしょ！！！」
「まあまあ、太陽さん。そんな堅い事は言わずに」
「は～。そろそろ登校の時間だしいきましょ」
太陽がそう言うと全員、慌てて学校の準備を
持ちラビットハッチから出ていった。

「山ちゃん先生おはよ～」
「ですから～！！先生にあだ名は駄目ですよ～」
「おはようございます、山田先生」
「うぅ！！如月さんだけです！！ちゃんと言ってくれるのは」
「山山先生、おはようございます」
「や、山山？」
「でか乳先生、おはようございます」
「で、でか乳！？」
鈴が恨めしそうに山田先生の大きく開かれた胸元を見ながら
挨拶をすると既に山田先生は涙目になっていた。

「おはよう、一夏」
「ああ、おはよう、シャル」
後ろからシャルの声が聞こえ振り向くと何故か
晴れてるのに傘を差しているシャルがいた。
周りの生徒は奇妙な物を見る目でその光景を見ていた。
「なんで晴れてんのに傘差してんだ？」
「ん？もうすぐ空が泣くからだよ」
シャルは一夏に意味深な事を言った瞬間、
土砂降りの雨が一夏たちを襲った。
「でしょ？」
「すっげーーー！！！」
一夏は大層驚いていたが太陽はそれを冷めたような顔で見ていた。
「そんなの偶然に決まってるわ」
「太陽」
太陽はＮＯ２０の赤いスイッチを持ちながら呟き始めた。
「私が信じるのはアストロスイッチとコズミックエナジーだけよ」
そうは言いながらも太陽はばっちし折り畳み傘を差していた。
その後、用務員さんが親切にタオルを貸してくれ、
一夏達は濡れた髪などをふいて教室に向かった。

『では、これで１学期終業式を終わります』
今日は１学期の終業式の日であり２日後には
臨海学校も待ち受けていた。
それぞれが自室に帰っているとシャルが一夏に喋りかけてきた。
「ねえ、一夏」
「ん？何だ、シャル」
「今日一緒にデパートに行かない？」
「デパート？水着を買いに行くのか？」

「うん、そうなんだけど、どう？」
「ん～。先約がいるんだが良いか？」
「先約って？」
「ああ、それは」
「私よ！！！！！！」
後ろから急に声が聞こえたかと思うと後ろには
太陽が既にいく準備万端の格好で立っていた。
その格好はボストンバックにノースリーブを着て
下はショートパンツをはいていた。
「ああ、如月さんか。うん、別に私は気にしないよ」
「そっか、太陽も良いよな？」
「別に良いけど、あんたまさかこの格好で行くの？」
「勿論。これが私の普段着だよ」
太陽が指摘するのも無理はなくシャルの今の服装は
いつもの魔女の服の様な制服だった。
さらにそれは長そでロングスカートの状態になっており
今の季節とは真逆の格好だった。
「あ、あっそう。じゃ、校門で待ってるから」
「ああ、悪いな」
一夏は服を着替える為に一度自室に帰っていった。

「じゃ行こうか」
「「おっけ～」」
一夏が待ち合わせ場所に来ると二人はすぐに
立ち上がり一夏の両脇に立った。二人のその距離は
一夏の腕に胸が当たるギリギリの距離に立っていた。

一夏は初めは気にしたが数分もたつとすぐに慣れ
そのままデパートに向かって歩き出した。
しかし、周りの人間は季節とは違い冷やかな目で3人を見ていた。
いや、というよりもシャルの格好を凝視していた。
「なあ、シャル」
「ん？な～に？」
「お前その格好恥ずかしくないのか？」
一夏がそう聞くとシャルはすぐにうつむきぶつぶつと何かを呟き始めた。
「…やっぱり、ここにも私の居場所はない…」
「なんか言ったか？」
「何もないよ」
「そっか、着いたぞ」
3人は駅前にあるここら辺では一番大きいデパートに入っていった。

「ねえ、これどう？」
「あ、ああ。良いんじゃないのか？」
「もう！！さっきからそればっかり！！！」
一夏はかれこれ30分くらい太陽の水着試着に付き合わされていた。
一夏の両手には水着が何着も置かれておりさながら物干しざおのようだった。
しかも値札をよく見ると一般的な価格よりも高いものが多かった。
これでも太陽は異例中の異例の15歳での天文学者である。
お給料も貰っておりその額は国家代表と変わらないんじゃないのかと思うくらい高かった。その代りに太陽のもとに来る仕事の量もそれに比例しとても多い。
「大変なんだね。一夏は」
「ああ、シャルか。まあ、もう慣れっこって言うか、なんと言うか。

それよりもお前は決まったのか？」
「うん、もう清算してきちゃった」
「そっか」
「何だお前たちもいたのか」
隣から声が聞こえ振り向くとそこには山田先生と千冬が立っていた。
その手には買い物袋が何個か握られていた。
「先生方も水着を買いに？」
「今は勤務外だ。まあ、そう言うところだ」
「そっか」
すると空気を呼んだのか山田先生がシャルを連れて
どこかに行ってしまった。
「お前はまた、如月の荷物持ちか？」
「まあね。もう慣れたけど」
「そうか、おm」
千冬が言いかけた瞬間、突然非常ベルが鳴り響いた。
「な、なんだ！？」
『火災が発生しました！！お客様は速やかに避難してください！！
繰り返します！！お客様は、こ、ここまで火が！！！！』
「一夏！！！ゾディアーツだよ！！！！！」
「この火事の原因が？」
「そうよ！！ほら、さっさと行くわよ！！！！」

『ははははははははははは！！！！！全部燃えちゃえ！！！！！』
2つ上の階で一体のゾディアーツが杖から
炎を出しありとあらゆる物を燃やしていた。
「だ、誰か助けて！！！！！」
『無駄無駄！！！！！誰もここには来ないわよ！！！！！』
「ちょっと待ったーーーーーーー！！！！！！」

『あ！？誰よ！！！！』
「千冬姉は取り残された人を頼む」
「任せろ。大丈夫ですか！？私の肩につかまって！！！」
「一夏。頑張って」
「ああ、解析頼むぜ」
『３・２・１』
「変身！！！！！」
『くっ！！！』
突然吹き荒れた突風にゾディアーツは怯み、もう一度
前を見るとそこにはフォーゼがいた。
『な、なんなのよ！！！！』
「宇宙来たーーーーーーーー！！！！！ってあっち！！！
これ唯の炎じゃねえな！！近寄れねえぞ！！！」
一夏は進もうとするがゾディアーツが起こした特殊な炎なのか
フォーゼでも進めなかった。
「炎…これの出番ね。一夏！！！新スイッチ！！」
「分かった！！！太陽も逃げてくれ！！！」
「ええ、分かったわ！！！」
一夏は投げられたスイッチを受け取りロケットスイッチと交換をした。
『ファイヤー。ファイヤー・オン』
「おお！！今度は熱いのがどっと来るぜ！！！」
フォーゼの姿が白メインのベースステイツから赤メインの
ファイヤーステイツへとステイツチェンジした。
ベルトの横の接続部分にはヒーハックガンが装備されていた。
一夏はそれを分離させ消火モードにしファイヤースイッチを
ヒーハックガンにつけるとサイレンの様な音が鳴り響き
リミットブレイクが発動した。
『リミットブレイク』
「いっけーーー！！！」

ヒーハックガンから大量の水が放出され炎が鎮火した。
『覚えておけ！！！！！』
ゾディアーツは窓からどこかへと飛び去ってしまった。
「あ、待てこの野郎！！！！」
一夏もそのまま後を追いかけた。その光景を見ている者がいるとも知らずに。

第２１話　霊・感・少・女（後書き）

こんばんわ～如何でしたか？
感想も待ってま～す。短編の方もよろしくっす！！！

第２２話　鎮・火・点・火

『何なのよ！！いったいあいつは！！！』
人気の少ない場所に降り立ったゾディアーツは苛立ちを隠せないようで
地面に杖を叩きつけながらグチグチ
呟いていると後ろから一夏が追いかけてきた。
「待ちやがれ！！杖野郎！！！」
『ま、またあんた！！許さない！！！』
ゾディアーツは空中に浮かびあがると杖を振り一夏に向けて
炎の玉を何発も連発し始めた。
「うぉ！！危ねえな！！！」
一夏はどうにかして炎の玉を避けているが攻撃の
手段が思い浮かばず四苦八苦していた。すると、
後ろから太陽と千冬が後を追いかけてきた。
「一夏！！！ヒーハックガンは鎮火と点火、ふたつの力があるわ！！」
「おお！！これ火も出るのか！？よーーし！！」
一夏は分離させていた部分をもう一度接続し
ベルトの接合部分から取り外すとバズーカの様な形になり
引き金を引くと炎の玉が勢いよく撃ちだされた。
「おお、すっげえ！！行くぜ！！！」
一夏はゾディアーツの炎の玉を連続で撃ちだすことで相殺させ
本体にぶつけて地上に下ろした。
『なかなかやるじゃない。行くわよ！！！』
「よっしゃ！！」
相手は杖を自在に振り回し攻撃してきたが一夏はそれを
足で受け止め至近距離から何発も炎の弾丸を直撃させた。
「おら！！」

『ぐぅ！！』
「次は新スイッチだ！！！」
『ガトリング。ガトリング・オン』
左足にガトリングが現れ一歩踏む込むと何発もの弾丸が
ゾディアーツに向けて発射された。
『くそ！！邪魔よ！！』
杖を地面に打ち込みそこから炎を拡散させ弾丸を防いでいた。
「やるじゃねえか！！！」
『そっちもね！！はあ！！！』
二人が戦っている光景をシャルは木の陰に隠れて見ていた。
「わ、私もあれを使えばここからサヨナラできるのかな？」
『ああ、出来るとも』
「！！！！」
シャルの後ろから急に声が聞こえ振り向くと後ろには
スコーピオンがスイッチを手に握り立っていた。
「だ、誰！！！」
『これを使えばこの星とサヨナラできるとも。
サヨナラしたいのだろう？』
「う、うん」
「あっち！！くそ！！、ん？シャル！！！」
一夏は攻撃を受けて転びふと横を見るとスコーピオンと
シャルが立っているのが見え太陽達も一夏の叫びに気付きそちらの
方を振り向いた。
「止めろ、デュノア！！！！！」
『させるもんですか！！！！！うら！！！』
「きゃあ！！」
「くっ！！」
千冬がシャルに叫び止めさせようと近づこうとするが闘っていた
ゾディアーツが杖から炎を出し行かせない様に邪魔をした。
『さあ、君もこのスイッチを使うんだ。宇宙に夢を、星に願いを』

シャルは警戒しながらもスイッチを受け取ると
スコーピオンから離れた。
「止めろ！！シャル！！それを使っちゃダメだ！！！」
「黙ってて！！！！」
「シャ、シャル」
シャルの叫びに一夏は黙ってしまった。
「わ、私は昔から皆には分からないようなことが分かった！！！
今日の天気を当てることだってそうだし幽霊だって見える！！
それを知った両親は私を汚いものを見るような眼で見てくるし、
何か家で物が無くなれば真っ先に私を疑われるしもう嫌なの！！！
この星に私の居場所なんてない！！ここからさよならしたいの！！
！」
『私と一緒ね』
ゾディアーツが遠くの方からシャルの近くに飛んできた。
するとスイッチをオフにしその姿を現した。
「私も貴方と同じような境遇よ。私と一緒にこの星からサヨナラしましょ」
「は、はい！！」
二人は一緒にどこかへ行こうとした。
「待て、シャル！！！！」
『ここは行かさんよ。フォーゼ』
「邪魔だ！！どけ！！！」
『ふん！！！！』
「くっ！！！ど、どこに行った！？」
スコーピオンが手から破壊光弾を出し目くらまし代わりに使い
どこかえと消え去った。それはシャル達も同じだった。

「どうすればいいんだ」

一夏はラビットハッチで一人悩んでいた。
自分の言葉でシャルは傷ついたんだと思いこみ一夏は
周りの言葉すら聞こえなくなるほど考え込んでいた。
「一夏！！！！！！！」
「うぉ！！！びっくりした。太陽か」
「あなたは少し悩みすぎよ。スイッチャーが分かったわ」
太陽は一夏に解析画面を見せるとそこには先程の
女性の顔写真が映っていた。
「名前は笠木真由。年齢は１７歳、第３高等学校に在籍していて
周りとはかなり浮いていていつも一人でいて怪しげなことをしてい
るらしいわ」
「確かそこの学校って今めちゃくちゃ荒れてるん
じゃなかったのか？窓ガラスが割れたりとか」
「それは外から見たらそう見えるだけで実際は荒れてなんかないわ。
ただ、学校で起こる全ての事象を笠木の所為にしてるらしいわ。教
師も生徒も含めて」
「最悪すぎるだろ、それ」
一夏はそう言いながら立ち上がると出口へと向かっていった。
「どこに行くの？」
「少しな」

その頃、シャルは笠木とともに行動していた。
今は笠木の家にいておりその中はシャルの自室と大差ないくらいの
不気味なものだった。オカルトグッズが所狭しと置かれており
母親も気味悪がってあまり近寄ってこないらしい。
「そう、貴方もそんな経験が」
「はい。それでこっちに代表候補生として出されたんです」
「そう、これからは私と一緒にいましょ。そうしたらこことも

すぐにサヨナラできる」
「はい！！」
その後、二人でオカルトに関する話をして家を出た。
シャルは気分がいいのかその顔は終始嬉しそうに
笑顔だった。すると後ろから自分の名を呼ぶ声が聞こえてきた。
「シャル」
「なに？また、私を冷やかしに来たの？」
「違う。お前には別の事を聞きに来たんだ」
「別の事？」
「ああ、お前はこの星からサヨナラしたらどこに行く気なんだ？」
「私の居場所が見つかる宇宙に行くよ。それで笠木さんと
一緒に私達だけの居場所を作るんだ」
「居場所ね～……なあ、お前宇宙がどんなところか知ってるか？」
「え？知らないよ」
「だったら俺が教えてやるよ」
一夏はドライバーを取りだすとフォーゼに変身をした。
『3・2・1』
「変身！！」
「きゃ！！」
「よし、着いて来い！！」
「え、ちょ！！離して！！！」
『ロケット・オン』
「いっくぜーーーー！！！」
「きゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！」
一夏はシャルを掴んでロケットスイッチをＯＮにしてロケットモジュールで
空高く上がり学園に戻るとラビットハッチへとシャルを押し込んだ。
「つ、月に来ちゃった～…ぐす！！ひぐ！！」

「どうだ～してやったり～」
一夏はピョンピョン飛び跳ねながら泣いているシャルを
おちょくっていた。
「なあ、シャル」
「なに？」
「お前はさ、変わりたいんじゃねえの？」
「え？」
シャルは一夏の急な質問に何も答えられなかった。
「だってそうだろ？スイッチを手に入れたのも自分が
変わりたいからスイッチを手に取ったわけだし
この星からサヨナラしたいってのも変わりたいっていう一心
言ってるんじゃないのかな～って」
「……」
シャルは図星だったのかずっと無言で俯いていた。
「ほら、見てみろよ。宇宙って冷たいだろ？地球みたいに
温もりはないし、宇宙服来てないと全身が一瞬にして凍りついちま
う。
そんな極寒の中で居場所なんか見つけられっこないと思うぜ」
「じゃあ、どうすれば良いって言うの！？」
「俺達が作ってやる！！！」
「え？」
「お前の居場所は俺達仮面ライダー部が作る！！！」
「お～い」
無線で呼ぶ声が聞こえたかと思うと宇宙服を着た部員全員が
シャルと一夏のもとに集まっていた。
「ふ～。なかなか動きにくいな宇宙というのも」
千冬は初めての宇宙に少し困惑していた。
「な、なんでみんなが」
「ごめんね。貴方の気持ちなんか知らずに
変な事言って。一夏が言ってた通り貴方の居場所は

私達が作るわ！！！！ねえ？」
「「「「「「勿論！！！！！！」」」」」
「み、みんな。ひっく！！ぐす！！」
シャルは自分を迎え入れた人がようやく現れ
涙が止まらなかった。

「は！？学校を燃やす！？」
「うん、笠木さんは確かにそう言ってた」
シャルによると笠木は自分の学校を炎で燃やしつくす
計画を今日に実行するらしい。
「どうする？如月」
「勿論、行きましょう」
仮面ライダー部は全員で第３高等学校に向かっていった。

第２２話　鎮・火・点・火（後書き）

こんばんわ～如何でしたか？
眠いので今日はここまで。それでは～

第２３話　最・強・消・防・士

笠木真由は一人学校の屋上に立っていた。屋上には
５分後にこの学校を燃やしつくす為の起爆剤の役割をする魔法陣が
書かれていた。
真由はあまりこの学校に楽しい思い出など
無くあるのは理不尽に全ての原因であると言われ
教師からは叱責を受け続けた。初めは真由も否定をし続けたが教師に
お前の事などだれも信用していないと言われその日から否定するのも
止め、一人ひっそりと隅の方で過ごしてきた。しかし、そんな日も
もう今日でお終い。この学校を燃やしつくせば全て終わる。

「今日が記念日になる。私がこの星とさよならする記念日」
真由はポケットからスイッチを取り出しボタンをプッシュしようと
した瞬間、
「そうはさせねえ！！！」
「きゃ！！」
後ろから衝撃が真由を襲いよろけてしまった。
「誰よ！！！」
「本物の月からのお助け人かな？」
「笠木さん！！！」
後ろからシャル達が後を追ってきた。
「何でシャルさんがそっちにいるのよ！！！！！」
「笠木さん聞いて！！！私ねさっき宇宙に行って来たの！！！
そこは私が思ってた場所とは全然違った！！！とても冷たかった！
！！
最初は良いと思ったけど皆が私の居場所を作ってくれるって言って
くれた！！！！

温かかった！！！！嬉しかった！！だから笠木さんもこっちに来ようよ！！！！」
「ふざけないでよ！！！そんなの信じられるもんか！！！！」
『ラスト・ワン』

真由の憎しみと呼応するようにスイッチが禍々しいものへと変化した。
「駄目だ！！こっちに戻って来い！！！！」
「いまさら戻らないわよ！！！！！」
真由がスイッチを押すと精神だけがゾディアーツとなり体が地面に倒れ伏した。
「だったらお前を倒す！！！！」
『3・2・1』
「変身！！！！！」
一夏はフォーゼへと変身した。
「宇宙来たーーーーーーーーー！！！！！！！！」
『ロケット・オン』
一夏はロケットスイッチをＯＮにするとそのジェット噴射で相手に近づき下に落とした。
『きゃ！！こんな所で負けるわけにはいかないのよ！！！！うら！！！』
「痛！！！！くっそ！！！」

アルターは杖を振り回し一夏を殴ると炎の玉を何発も連続で撃ち始めた。
「だったらこいつで行くか！！！」
一夏はエレキスイッチをロケットと交換しＯＮにした。
『エレキ、エレキ・オン』

一夏は炎の玉を避けながらエレキステイツへとステイツチェンジをした。
「いくぜ！！！！」
ロッドにプラグを差し込みアルターを斬りつけていくがラストワンをしたため前よりもパワーアップしていた。
「こいつ強いな！！おら！！」
『くぅ！！』
「う、受け止めた！？」
『ふぁぁ！！』
「うわぁぁぁ！！なんてエネルギーだ」
一夏は杖で吹き飛ばされるとそう呟くがさらにアルターが火の玉を放ってきたため避けるとアルターは杖を地面に叩きつけ杖に炎を纏わせると屋上に書いておいた起爆装置の様なものの役目をする魔法陣へと投げ込んだ。
『皆、消し飛べ！！！！！！』
「や、やべえ！！」
『任せろ！！！』
後ろからパワーダイザーが滑るように走りこみ壁を伝って屋上に上がると間一髪のところで杖を受け止めた。
『ふ～。間一髪だったな』
千冬はそう呟きながら杖をパワーダイザーの力でへし折った。
『な！！よくも！！！うわぁぁ！！』
「うぉ！！どわぁぁぁぁぁ！！！」
アルターは邪魔された事に激昂し今までよりも強い力で一夏を殴り遠くへと投げ飛ばした。

『燃え尽きてしまえ！！』
アルターは頭から先ほどよりも激しく炎を出すと鞭のようにしならせ一夏に攻撃を与えていった。その激しさに一夏は近寄れなかった。

「うぉ！！近寄れねえ！！！消火といえばこいつの出番だ！！」
一夏はエレキスイッチをＯＦＦにしファイヤーと交換した。
『ファイヤー。ファイヤー・オン』
ファイヤースイッチをＯＮにするとフォーゼが炎に包まれ
ヒーハックガンを装備したファイヤーステイツへとステイツチェンジをした。
『うらぁ！！』
「うぉ！！こいつで行くぜ！！」
『シールド、シールドオン』
一夏はスペースシャトルを模した楯を出し、それで炎を防ぎながら
ヒーハックガンで炎の弾丸を撃っていくが向こうの炎の方が
火力が強いのか炎に掻き消された。

それを見ていた太陽と鈴は何か手立てはないものかと
考えていると太陽が思い出したかのようにシャルに聞き始めた。
「シャル！！何か感じない？貴方ならスイッチの本質を
見抜けるかもしれない！！！！！」
太陽はシャルの肩を掴んで揺さぶりながら聞くが急に
聞かれたのでシャルも何がなんだか分からなかった。
「そ、そんな急に言われても」
「お願い！！フォーゼのピンチなの！！！」
「ピンチって全然そんな風に感じないというか、
むしろ力が強まってる、あ！」
シャルは何かに気付いたのか一夏に大声で叫び始めた。
「一夏ーーーーーー！！！！！」
「ん？」
「楯で防いじゃ駄目ーーー！！！！！」
「よし、お前が言うなら！！」
一夏は起き上がるとシールドスイッチをＯＦＦにして

アルターの攻撃を真っ向から受ける事にした。
「よし！こい！！！」
『ふざけてるの！？うえぇぁ！！』
アルターが鞭のように炎をしならせて一夏にぶつけるが一夏は
喰らっても少しよろけるだけだった。

「え？ちょっと！！」
「そ、そうか！！」
鈴が一夏の突然の行動に戸惑うが太陽は何かに気付いたのか
バガミールを起動させて解析をし始めた。
「見て。熱攻撃を吸収できるんだわ。スイッチにエネルギーを蓄えてる。
凄い、これがファイヤーステイツの力」
「違うよ。一夏の力だよ」
「一夏の？…一夏のシャルの全てを受け入れるという
姿勢がファイヤーステイツの眠れる力を覚ましたっていうの？」
一夏は真正面から何度も炎を喰らっているがその全てを
ファイヤースイッチが吸収し力を蓄えていた。
「うぉぉ！！おら！！」
『きゃ！！』
一夏は一気に走りだしアルターの後ろを取り背中に
蹴りを打ちこんで遠くへと蹴り飛ばした。
「一夏！！溜めた力を撃ちだして！！！」
「おう！！」
一夏はドライバーからスイッチを取るとヒーハックガンに
挿入しリミットブレイクを発動した。
『リミットブレイク』
「ライダー爆熱シュート！！！！！！」
『あぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！』
アルターは全力で炎を撃ち出すもヒーハックガンの

爆熱シュートに飲み込まれアルターに直撃し大爆発を起こした。
爆発を起こした後スイッチが転がってきたので一夏はそれを拾うとOFFにしてスイッチを消滅させた。
「ふ～これで一件落着か」
「そうね」
一夏は変身を解除しシャルに近づくと手を差し伸べた。
その光景にシャルは一瞬、戸惑うがすぐに分かり
友達のしるしを交わした。
「ねえ、私もライダー部に入っても良い？」
「勿論！！！！」

翌日、仮面ライダー部でハイキングに行こうという事で
近くの大きな公園に集まっているがシャルと一夏がまだ来てなかった。
「遅いですわね、一夏さんとシャルロットさん」
「あいつが遅刻するなんて結構あるけど5分以上は初めてじゃない？」
鈴は時計を見ながら言っていると後ろから二人の大声が聞こえてきた。
「「青春街道ダーーーーッシュ！！！！！！！！」」
二人は湖に向かって走っていき堺の近くまで走ると
二人で何かを同時に投げた。
「ははははははは！！！遅れて悪いな！！」
「は～。別に良いけど。さあ、シャル。ゾディアーツスイッチを頂戴」
実はシャルはスコーピオンに貰ったスイッチをそのまま、

持っていた為太陽は貴重なサンプルが手に入ったと大喜びしており
シャルだけは特別らしい。スイッチの本質も見抜けるだとか何とか
で。
「今さっき投げたのがそれだよ」
「は？」
「ははははははは！！！別に良いじゃねえか！！仮面ライダー部も
これで８人になったんだし、良いじゃ…ね、え…た、太陽さん？」
一夏は笑っていたが次第に冷や汗をかき始め苦笑いに変わっていっ
た。
なぜなら太陽様がご立腹していた為である。
神様、仏様、太陽様である。
「良い訳ないでしょうがーーーーーーー！！！！！！！！」
「ぐぇ！！つ、冷たい！！」
太陽は一夏にドロップキックをかまして
湖につき落とした。
この部で一番強いのは太陽かもしれない。

第２３話　最・強・消・防・士（後書き）

こんばんわ～ケンです。如何でしたか？
これでライダー部はそろったかな？
メテオどうやって出そうか只今考え中。
でも、メテオギャラクシーとドライバーの必殺技の音声がめちゃくちゃ聞き取りづらかったのは私だけでしょうか？
それでは、さようなら

第２４話　過・去（前書き）

今回のゾディアーツはオリゾディアーツです！！！
のっぽガキさん提案です！！！！！

第２４話　過・去

これは物語が始まる前の話である。
まだ、太陽がスイッチのロールアウトする方法を習得していない頃、
一夏はＮＯ１～ＮＯ４だけでゾディアーツを倒していた。
この話はその頃のお話。

「一夏ーーーーーー！！！！！」
廊下から太陽の元気のいい声が聞こえると一夏と一緒にいた弾は羨ましそうに見ながらも一夏を茶化した。
「おい、奥さんが来たぜ」
「奥さんじゃねえし」
「でも、いいよな～。この学校で一番美人と言われている人と幼馴染なんてさ～」
「おいおい、弾。そんな事一夏の前で言ったらボコボコにされるぞ。太陽をそんな目で見るなってな」
「でもよ～数馬。羨ましすぎるぞ！！」
「知らねえよ。でも釣り合ってんじゃねえのか？この学校で一番持てる男と女。これ以上最高のカップリングはないぜ？」
「う～」

弾は廊下で嬉しそうに一夏と話している太陽とそれを
笑顔で聞いている一夏を見て犬の様に唸りだした。

その頃、別の場所では。
「ぎゃはははははは！！！！！」
「や、止めて下さい！！！！それは大切なものなんです！！」
人気の少ない校舎裏で大勢の男子生徒が楽器を蹴とばして遊んでいた。
抑えつけられている女子生徒は涙を流しながらも止めるように懇願しているが
ヤンキーである彼らには一切届かず大切な楽器を目の前で蹴飛ばされるのを
ただ見ているしか出来なかった。楽器はすでにボロボロで所々ヒビが入っていた。
「ヘイパス！！！」
「おっけ～。いっけ～マグナムシュート！！！」
一人の生徒がパスを貰うと全力で壁に向かって
楽器を蹴とばすと楽器は粉砕した。
「何だよそのシュート！！！お前ネーミングセンスねえな～」
「いいじゃんかよ～。帰ろうぜ～」
生徒達は満足したのか大声で笑いながら帰っていった。
「わ、私の楽器が。な、なんで、なんでこうなるのよ！！！！！」
少女は地面に手を何度もぶつけながら涙を流していた。
先程の生徒達が許せなかった。いつも通り練習していたら急に
絡みだして楽器を奪われ先程のようにされもう楽器は
修理が不可能にまで壊された。すると目の前から誰かがやってくる
足音が聞こえまたかと思い見上げるとそこには杖を持った怪人が現れた。

「あ、貴方は？」
『君は素晴らしい素質を持っているね。これを使うが良い、全てを超越する力が手に入る』
怪人が手を伸ばすと手の中にはスイッチが握られていた。
「こ、これを使えばさっきの楽器を潰した奴らを倒せるの？」
『ああ、倒せるとも。さあ、宇宙に夢を、星に願いを』

少女はその握られているスイッチに手を伸ばし受け取ると怪人は杖を地面に叩きつけどこかに消え去ってしまった。
試しに押してみると少女はゾディアーツへと進化した。
『す、凄い！！！これならあいつらを潰せる！！！！』

「ねえ、一夏～」
「ん？なんだ」
「今日の晩御飯何が良い？」
「別に俺は太陽が作るもんなら何でも良いぞ」
「もう！馬鹿」
太陽は一夏の言葉に顔を赤くしながら一夏を叩くと向こうの方から叫び声が聞こえてきた。
「なんだ？」
「さあ？」
すると建物から見たまんまヤンキーの男子生徒が顔を恐怖に染めながら走ってきた。
すると建物の奥からも叫び声が聞こえてきたので行ってみるとそこにはゾディアーツがいた。

「ゾディアーツ！！！」
『ん？なに？貴方達も邪魔するの？だったら潰すよ』
「一夏！！見て！！体に琴座がある。ハープゾディアーツだよ！！」
「ああ、そうみたいだな」
一夏はドライバーを取りだすと腰につけスイッチを押していくと
カウントが開始された。
『3・2・1』
「変身！！！！」
一夏がレバーを引くとフォーゼへと変身した。
「宇宙来たーーーーーーーー！！！！！！」
『な、なんなのよ！！！！あんたは！』
「仮面ライダーフォーゼ！！！タイマンはらしてもらうぜ！！！」
一夏はハープに向かって走っていきパンチを繰り出し
ハープを遠くの方にまで吹き飛ばした。
『きゃぁぁぁ！！！』
「どんどん行くぜ！！」
『ランチャー、レーダー・オン』
「ロックオン！！喰らえ！！！！！」
ランチャーモジュールから4発のミサイルが発射され
ハープに全弾命中し大爆発を起こした。
『きゃぁぁぁ！！！』
「よっしゃ！！」
『あぁぁぁぁぁぁ！！』
「な、なんだ！？」
ハープはいきなり叫び声をあげたかたと思うと
手に琴の様なものが召喚された。
その光景を杖を持ったゾディアーツが建物の屋上から眺めていた。
『やはり彼女は素質がありますね』

『はあ、はあ。許さない！！』
ハープは琴を弾くと周りの地面が何かに抉られていった。
「うぁ！！あ、頭が！！」
一夏はその音を聞くと頭が割れるような
痛みを感じ、次の瞬間には吹き飛ばされていた。
「うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」
「一夏！！！！」
「来るな馬鹿！！！！」
『皆吹き飛べ！！！！！』
ハープは先ほどよりも大きく琴を弾くと
さらに大きな音が流れ周りがさらに抉られ
大爆発を起こした。
『はあ、はあ。ふふふ、消えちゃった』
ハープはさらなる標的を潰す為どこかへと消え去った。

「あ、危なかった」
一夏は咄嗟にロケットをＯＮにして空中に
太陽も抱えたままで回避していた。
一夏は地上に降りると太陽を下ろし
変身を解除した。
「だ、大丈夫？いｔ」
「馬鹿かお前は！！！！！！！」
「！！！！！！」
いきなり一夏に大声を出されて太陽は驚いたが
一夏の顔はいつものように優しいものではなく
本気で怒っている顔をしていた。
「なんであの時俺の近くに来たんだ！！！！」
「い、一夏が心配で」

「心配してくれるのは嬉しいけどお前は
ゾディアーツの攻撃を受けたら死ぬかもしれないんだぞ！！！！」
「ご、ごめん」
「いや、俺も言いすぎた。でも、今度から今回
みたいな事はしないでくれ」
「うん、分かった」
太陽は笑顔で言うと一夏は少し顔を赤くして
家の方へと歩きだした。

第２４話　過・去（後書き）

こんばんわ、如何でしたか？
それではさようなら～

第２５話　過・去・２

その後、一夏は太陽の家に行き、太陽の解析を待っていた。
その間、一夏は太陽に部屋で待っていてと言われたので待っていた。
「ここが太陽の部屋か～。何回かここの家には来てるけど
あいつの部屋に入るのは始めてだな」
一夏はあたりを見渡すとふと机の引き出しが気になったので
散策してみる事にし、引き出しを開けるとそこには
日記が入っていた。題名は一夏と私の日記だった。
ペラっとページをめくると初めて会った日から書かれていた。

×月×日。
今日もまた誘拐された。だけど、今日誘拐されてよかったと思った。
なぜなら一夏に会えたから。私はあまり他人とは話さないんだけど
一夏だけは心の底から信じても良いって思えた。一夏にだったら
私の全てを捧げても良い。

次のページを見ようとした時、太陽が２階に上がってくる
音がしたので慌てて引き出しに日記をなおしベッドに座った。
「ごめん、待たせたかな？」
「い、いや大丈夫だぞ」
心なしか一夏の顔は焦ってるように見えた。
太陽は不思議に思いながらも一夏の隣に座り
解析画面を見せながら説明をし始めた。

その頃、ハープとなった生徒はというと残る標的を
片っ端から潰していっていた。どんなに助けをこいても
一切妥協せず全員を潰していった。
『ははははははは！！！！全部潰れちゃえぇぇぇぇぇぇぇ！！！！！！』
「動くな！！！警察だ！！！！手をあげて降伏しろ！！！！」
警官隊も拳銃でゾディアーツを威嚇しているものの、そのようなもので
勝てる筈もなくハープの琴で全員、吹き飛ばされていた。
『ははははははは！！！！もう最高！！！！
この力で全部気に入らない奴潰しちゃお！！！！！！』
「させねえよ！！！！」
上から声が聞こえたかと思うと上の歩道橋から
フォーゼが降りて来てハープにかかと落としを喰らわした。
「これ以上、好きにはさせねえよ！！！！！」
『だったらあんたも潰す！！！！！』
ハープが琴を弾こうとした瞬間に一夏はロケットモジュールを
使い人気のいない場所まで飛んでいった。

「そらよ！！！！」
『きゃぁぁぁぁぁぁ！！！！！』
一夏は地面にハープを叩き落とすとランチャーとレーダーを
ＯＮにしハープめがけて放った。
「喰らえ！！！！！」

『そんなもの！！！』
しかし、ハープの琴の攻撃により全て落とされた。
「もうやめにしようぜ！！！！井坂！！！！」
『へ～。どこで気付いたの？』
「太陽が情報を集めていたらお前が楽器を
壊されたって言う証言が出てきたんだ」
するとハープはスイッチをＯＦＦにし元の姿に戻った。
「そ、正解。あたしが犯人でした～」
「もう止めろよ！！！こんな事しても意味がないぞ！！！！」
「うるさいわね！！！！あんたなんかに分からないでしょ！！！！
ずっと大切に使ってきた楽器を壊されたんだよ！？
私にはあいつらに復讐する権利があるのよ！！！！」
「違う！！！！例えそんな事をされても誰にも人を傷つける
権利はない！！！！そんなスイッチを使わなくても
もっと解決方があったはずだ！！」
「うるさい！！うるさい！！！」
『ラストワン』
井坂の憎しみに呼応するかのようにスイッチが
禍々しいものに変化した。

「私はこれを使ってあいつらをぶっ潰す！！！！」
「だったら俺がしてやる！！！！！」
「は？何言ってんのよ！？」
「お前がわざわざそんな罪をかぶる必要はない！！！
俺に言ってくれれば全部俺がしてやる！！！金だって
協力してやる！！！！！」
「な、なんなのよあんたは！！！」
「俺は織斑一夏！！！学校の全員と友達になる男だ！！！」
「あぁぁぁぁぁぁ！！！！！」
井坂は叫びながらスイッチを押すと精神が

ゾディアーツとなり肉体が射出された。
「今俺が助けてやる！！！」
一夏はハープに走っていくとハープは二つに増えた
琴を同時に弾きならし超音波攻撃を繰り出すと
地面が抉れていった。
「おらおらおら！！！！」
『な、なんで効かないの！？』
「ライダーパーーーーンチ！！！！！」
『きゃ！！！』
一夏はハープの琴の攻撃を受けても全く
苦しまずにそのままハープにパンチを入れた。
「琴の音さえ聞かなければこっちのもんだ！！！」
『でも、どうやって…まさか耳栓を！？』
「そうだ！！めちゃくちゃ高かい耳栓をつけてんだよ！！！
御蔭でこっちの家計は火の車なんだよ！！！！唯一の収入源の
千冬姉のお給料をどうにかしてきりもみしている俺の身にもなれ！
！！」
『し、知らないわよ！！！！』
「知っていようがいまいがぶっ飛ばす！！！！」
『ランチャー、レーダー・オン』
「喰らえ！！！！！」
一夏はミサイルを４発発射するもハープは琴の超音波で
破壊し爆煙が辺りを包んだ。
「ライダーロケットパーンチ！！！！！！」
『きゃ！！！！』
一夏は爆煙にまぎれてロケットスイッチをＯＮにし
ハープにロケットパンチを直撃させた。
「どんどん行くぜ！！！！！」
一夏はもう一度、レーダーでロックオンしミサイルを

撃ちハープを空中に上げた。
「さ～て、止めだ！！！！」
『ドリル・オン』
一夏はもう一度レバーを引くとリミットブレイクが発動した。
『ロケット、ドリル・リミットブレイク』
「喰らえ！！！ライダーロケットドリルキーーーーック！！！！！！」
『きゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！』
空中に上がり身動きの取れないハープをドリルで貫きスイッチを残してハープは消滅した。スイッチをＯＦＦにすると井坂が目を覚ました。

「大丈夫か？」
「うん……」
「あんたが使っていた楽器はもうないけど
これから使う楽器なら私が費用を出してあげるけど」
「え？」
「こいつの家かなりお金持ちでさ、楽器ぐらい買ってくれるぞ」
「でも、お金が」
「お金は無利子、無利息、無担保の夢のような形で貸すから
出世払いでも何でも良いから返してくれればいいわよ」
その言葉を聞いたとたん井坂は目から大量の涙を流し始めた。
「あ、ありがと！！！」
その後、井坂は新しい楽器とともに音楽界に彗星の如く
現れた天才として名を知らしめるのはまだ先の事。

第２５話　過・去・２（後書き）

こんばんわ～ケンです。如何でしたか？
今回はオリゾディアーツ第１弾でした！！！！
少し呆気ないかとも思いますがそこはご勘弁を（笑）
それでは、御休みなさい

第２６話　臨・海・学・校

４台のバスがある場所に向かって高速道路を走っていた。
ＩＳ学園の１年生は今日から臨海学校でありその宿泊する旅館に向かっていた。
バスの中では大いに盛り上がっていた。
「よーーし！！織斑一夏、歌いまーーす！！！！」
「「「「「「いぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！！！！」」」」」」
「ミュージックスタート！！！！！！！」
一夏が指を鳴らすとあらかじめ太陽が準備していたＭＤから大音量で音楽が流れてきた。（曲名はフォーゼのＯＰでお願いします）
一夏は機嫌よく歌っておりバスの中にいる生徒たちもかなりノリに乗っていた。
「フォーゼ！！！いぇ～い！！！！！」
「「「「いぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！！！」」」」
「さあ、２曲名行くぜ！！！！！！」
（曲名はフォーゼの挿入歌です）
千冬は前の席で、しかも大音量が直で聞こえる場所に座っていた為かなりうるさく聞こえていた。
「ふふふ、織斑君楽しそうですね」
「あいつはいっつもそうだ。一緒に出かけてもうるさくして場をかきむしりまくる」
「でも、先輩も嬉しそうな顔してますよ」
「んん！！ほっとけ」
山田先生の言うとおり千冬の顔はいつもの女子生徒からの歓声を鬱陶しく聞いている顔ではなく本当に楽しそうに弟が歌っているのを聞いているような顔をしていた。
後ろではさらに、一夏と太陽のデュエットが始まっていた。

一夏達が楽しくバスで歌ってる頃、ある場所では…
「やあ、リブラ。お疲れだね」
『いえ、この程度は普通ですよ。しかし、何故
今回アメリカのＩＳを攻撃しろという命令を？』
杖を持ったゾディアーツがドーム状の椅子に座った
男性の前に立っていた。
「少し興味深い事に気づいてね。今回はそれを
試そうと思っているんだ」
座っていた男性の目が赤色に染まっていた。

「今日からここがお世話になる3日間お世話になる花月荘だ。
くれぐれも迷惑はかけない様に」
「「「「「「よろしくお願いします！！！！！」」」」」
「ふふふ、元気がよろしい事で。荷物は中に入って
置いておいてください。後で私たちが部屋毎に持っていきますので。
後、水着に着替える時は別館の方で着替えて下さいまし」
全員説明が終わるや否や一斉に中に入っていき
鞄から水着を出して別館の方へダッシュで入っていった。
「若いっていいわね～」
「お前も十分若いから、太陽」
「あら、こちらが例の」
「あ、はい。織斑一夏です。何かと迷惑をかけてすみません。
特に風呂の事とか部屋分けとか」

「いえいえ。お気づかいなく」
一夏と太陽も中へと入っていった。太陽は水着には着替えず
涼しい恰好で外に出るらしい。太陽の体は激しい
運動があまり出来ないくらい弱い。

「海だーーーーーーーーーーーー！！！！！！！！！」
「うるさいですわよ！！鈴さん！！！！」
「良いじゃなのよ別に！！！！！」
早速、少女達は目の前の海に飛び込んでいった。
浮わを持ってプカプカ浮かぶ者、友達たちと水を掛け合い
海水が目に入り、目がぁぁぁぁぁぁぁ、と叫ぶ者など
全員が楽しそうにはしゃいでいた。
するとそこに場違いな少年が現れた。
「へ～綺麗だな～」
「あ、オリム～だ」
「のほほんさん。もう良いのか？」
「うん！！ありがとうね、お姉ちゃんとも仲直り出来たし
オリム～には感謝しきれないよ」
「いや、良いってことよ」
「にしても織斑君、なんで服着てるの？」
一夏は何故か海にも拘らず上に服を羽織っていた。
「ああ、ちょっと体に傷があってな」
「あ、ごめんね」
「いや、いいさ。俺はここで眺めとくわ」
一夏は準備していたシートを敷いてパラソルを立てて
横になった。隣に太陽も座りいつもの様子になった。

生徒達の中には残念がっていた生徒もいるが既に海に向かっていった。

「たっち～」
「た、たっち？」
「そうだよ～ちょっと来て～」
太陽は日傘をさして本音とともに一夏とは
少し離れた場所に向かっていった。
「で、どうしたの？一夏の隣にいたいんだけど」
「すぐに終わるよ～たっち～ってオリム～の事
どう思ってるの～？」
「勿論、好きよ、いや愛してるわ」
太陽は恥ずかしがる素振りも見せずに真顔で
本音に一夏に抱いている感情を吐露した。
本音は感づいていたのか驚きもせずこう言った。
「そっか～ありがと、それだけだよ」
本音はまた、海の方へと歩いていった。
「何が聞きたかったのよ」
太陽は何が言いたかったのか分からないまま
一夏のいるところへと帰っていった。
「まさか、二人とも同じことを言うなんてね～」

「あ、千冬姉」
「何故お前は服を着ているんだ」
千冬が水着姿で来ると周りの女子生徒がそのスタイルに
メロメロになっていたが千冬はそんな事は気にしないでいた。

「……こっち来て千冬姉」
一夏は千冬の手を取ると人気のない海岸まで
千冬を連れてくると服を脱いだ。
「お、お前その傷！！」
一夏の体には痛々しい傷がいくつもついていた。
切り傷ややけどの跡などゾディアーツとの戦いでついたらしい傷が
たくさんあった。
「それも奴らとの戦いのものか」
「ああ、まあな」
「……すまない、一夏。私は何もしてやれない」
「気にする事はないよ。俺の所為がほとんどだから」
その後、一夏は千冬を皆がいる海岸にまで
連れていき自分はパラソルの下で休んでいた。

「ええ、分かってます。ええ、まだ動く
様子は見せていません。はい、では」
山田先生が宴会場にはいかずに廊下の片隅で電話をしていた。
すると後ろから千冬がやってきた。
「珍しいな、君が誰かと通話しているとは」
「も～。私だって電話くらいしますよ～」

翌日、事態は一気に急変した。
アメリカとイスラエルが共同開発したＩＳが暴走し

こちらに向かっているとの一報が入り一夏達が撃退
する事が命令された。箒は朝方に束から専用機の紅椿
を貰い作戦会議に加わっていた。
「先程、話した通り暴走ＩＳがこちらに向かっている。
我々、教員が訓練機を使いあたりの海域をすべて封鎖する。
その間に君達に撃破してもらいたい」
「詳しいスペックデータの開示を求めます」
「分かった。ただし漏えいすれば委員会からの
監視が１年付く」
「分かりました」
代表候補生たちはそう言う事も言われているのか
スペックデータを片手に何やら呟いていた。
「こいつは一撃で仕留める必要がある。
この中でその可能性があるのは」
「俺が行きます」
一夏は千冬が話す前に手を上げた。
「出来るのか」
「ええ、ファイヤーは攻撃力に特化したものです。
そこに太陽の整備を加えれば一撃で仕留められます」
「分かった。後は運搬か」
「その件についてはわたくしに任せて下さい。
先日、祖国から高速移動用のパッケージが届いています」
「インストールはしたのか？」
「いえ、１０分もあれば出来ます」
千冬はセシリアの意見も参考にしながらも
考えているとそこに声が響いてきた。
「私に行かせてください」
「篠之ノ…駄目だ」
「な、何故ですか！？」
「お前はまだ経験が浅すぎる。それにお前は

力が手に入れば有頂天になりやすいからな」
「くっ！」
箒が悔しそうにうつむいていると
そこに束がやってきた。

「その作戦ちょっと待ったーーーーー！！！！」
「何の用だ束」
「そんな事しなくても紅椿は展開装甲っていう新技術を
フルに装備させた最強の機体だからエネルギーを
機動力に回せばポンコツの国が作ったのよりも速い速度が出せるよ
ーーー！！！！！」
結局、束に押されて千冬は一夏と箒に作戦を任せる事にした。

「準備はいいか二人とも」
「ああ」
「はい」
「よし、なら展開しろ！！」
「紅椿！！！！！」
箒が呼ぶと待機状態の紅椿から赤色のエネルギーが吹き出し
箒を包みこみ紅椿が現れた。
一夏も白式を展開させファイヤーにステイツチェンジした。
『ファイヤーオン』
「一夏」
太陽が心配そうに一夏に呼び掛けるが一夏は
笑顔で太陽にこういった。
「そんな顔すんなよ、必ず帰ってくる」
「うん！！待ってる！！！」
「では、作戦を開始する！！！！」
一夏が箒の背に乗って上空へと向かい

高速で上がっていった。

第２６話　臨・海・学・校（後書き）

こんばんわ～如何でしたか？
かなりとびとびな気もしますがこれ以上書くと
グダグダになりますのでこうしました。それでは～！！！

第27話　一・夏・消・失

「一夏！！もうすぐで着くぞ！！！」
「ああ、見えてるよ」
目の前には亜光速で飛行しているＩＳ、福音（シルバリオ・ゴスペル）の鐘がいた。
「目標到着まで5，4，3，2，1」
『ファイヤー・リミットブレイク』
一夏はリミットブレイクを発動するとヒーハックガンに
炎が溜められていき巨大な炎の弾丸が出来上がった。
「いくぜ！！！ライダー爆熱シュート！！！！！」
引き金を引き炎の弾丸が放たれるが福音はギリギリのところで
かわし白い翼を生やし戦闘態勢に入った。

「まじかよ！！」
「そんな事よりも行くぞ！！」
「ああ！！」
箒は2本の刀をコールすると福音に切りかかるが
福音はそれを全てかわしながら翼に備えられているシルバーベルと
いう
武装で攻撃しようとすると一夏が後ろから炎の弾丸を放ってきた。
二人は事前に失敗後の戦闘スタイルを話しあっていたのだった。
福音は避けきれずに直撃し、さらには箒の2本の刀も
受けていき徐々にその装甲に傷が入っていった。
「一旦離れろ！！！箒！！！」
「ああ！！」
一夏に言われ福音から離れると一夏が弾丸を
連発で放つが福音も翼の武装からエネルギーの弾丸を
連射し撃ち落としていくと二人の間で大爆発が起きた。
「何て奴だ。あれだけ一夏の攻撃を受けながら

まだ、動けるのか」
「そんなけ搭乗者が強かったって話だ。
さあ、止めといくか！！！！」
『エレキ・オン』
『エレキ・リミットブレイク』
一夏はファイヤーからエレキに変え、リミットブレイクを
発動すると白式から大量の電流が溢れ出してきた。
「うおぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！！ライダー電光キッーーーーーーーク！！！！！」
「ppppppppppppppppppppppppppppp！！！！！！！」
「ぬぬぬぬぬ！！！！おらぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！」
福音は奇声を上げながら最大出力で
極太の光線を両翼から放出するが白式の
攻撃が上回り光線を押し返しながら福音に蹴りを入れた。

「おっと」
福音はエネルギーが尽き解除され搭乗者が
海に落ちかけたが一夏が何とかキャッチし箒に渡した。
「お疲れ様、一夏」
「ああ、箒もありがとうな。しかし、なんで暴走なんかするのかね〜」
「大体は誰がやったかは分かるがな」
「俺もだ。じゃ、帰ろうぜ、皆が待っている」
「ああ」
二人が拠点に戻ろうとしたその時、突如
福音の待機形態がドス黒く輝き始めた。
「な、なんだこれは！？」
「これ、どっかで見たことが……まさか！！！！」

一夏が思い出すのと同時に待機形態が搭乗者から離れた。
『ラストワン』
そう音声が聞こえたと同時に真っ黒な姿に
変わった福音が姿を現した。
「ｋｋｋｋｋｋｋｋｋｋｋｋｋｋｋｋｋｋｋｋｋｋｋｋｋｋｋｋａ
ａａａａａａａａａａａａａａａａａ！！！！！」
その姿はまるで悪魔のように見え先程まで白色だった装甲は
真っ黒に染まり翼が一組から二組に増え、さらには両手に
杖のような物を持っておりその先端には黒い刃が付いていた。
その光景を映像で見ているものがいた。

『これは、』
「言うならばＩＳ版のラストワンだ。フォーゼの変身者である
織斑一夏の専用機、白式がフォーゼのステイツチェンジのように
姿を変えたのもコズミックエナジーが白式に流れ込み
進化を促したのと同様のことだ」
『だから、私に攻撃させたと』
杖を持ったゾディアーツが赤い眼をした男に聞くと
男性はにやけながらこういった。
「ああ、そうだ。ゾディアーツの攻撃には少なからず
コズミックエナジーが含まれている。それを福音とやらに
入れるのが目的だった」

「な、なんだこれは」
箒は恐怖していた。今までこんなにまで怖いと思うの初めてだった。
父に怒られた時にも恐怖を感じたがそれとは比べ物にはならない、
言うならば死の恐怖だった。腕は震えあがり空中にいるので
分かりにくいが膝も笑っていた。対して一夏は怒りを覚えていた。

さっきから福音の叫び声が苦しいと言っているように聞こえていた。
「なんで！！なんでＩＳにまでこんな苦しみを与えるんだ！！！ゾディアーツ！！！！」
福音は杖を持ち上げまっすぐに振り下ろすと一夏が
海にまで吹き飛ばされた。その威力はさっきまで穏やかだった
波が荒れ狂うほどの威力だった。
「一夏！！！！！」
「がは！！」
一夏は口から血を吐きだし、金色の装甲を
赤くしていた。
{絶対防御まで貫く攻撃か…やばいな}
福音は翼を大きく展開すると真っ黒な球体を作りだし
上空に撃ちあげるとその球体はいくつもの小さな
分裂しまるで雨のように降り注いだ。
「くそ！！」
『エレキ・リミットブレイク』
「ライダー１００億ボルトバースト！！！！！！！！」
一夏は残り少ないエネルギーを使いリミットブレイクを発動させ
電気の網を作り弾丸を防いでいたが徐々にその網は破れかけていた。
「箒！！！お前はその人を連れて逃げろ！！！！」
「だが、お前はどうする！！！！！！」
「俺はここでこいつを止める！！！！その間に逃げろ！！！！」
「だ、だが！！！！」
一夏は箒にいらついたのか声を荒げて叫びだした。
「俺がここで止めないとその人はどうなるんだ！！！！！！皆はどうなるんだ！！！！！」
電気の網が遂に破れ弾丸が一夏に降り注いでいった。
「一夏ーーーー！！！！！」
「げほ！！がぁ！！早く行け！！！！！」
「くっ！！！！」

箒がスラスターを全開にしてその場を高速で離れると同時に
一夏に通信が入ってきた。

『一夏！！！！どうした、何があったんだ！！！』
「千冬姉か……俺、そっちに帰れないかもしれない」
『何を言ってるのよ！？帰ってくるっていったでしょ！！！！！』
通信に太陽や皆の声が割り込んで入って来ていた。
その間も一夏は福音の激しい弾幕にさらされステイツも
元に戻り、あれだけ白かった装甲も一夏自身の血液で
真っ赤に染まっていた。

「俺さ、今まで楽しかった。太陽がいて千冬姉がいて
皆がいて。時には喧嘩もしたけど本当に楽しかった」
『何今わの際みたいな事を言ってるんだ！！！！
お前がいなければ楽しいことも楽しくなくなるんだ！！！！！』
千冬の声は涙を流しているのか時々、つまっていた。
それは皆同じで、すすり泣く声を通信が拾っていた。
「そう言われるとうれしいな、そろそろ通信切るわ。太陽」
『何よ』
「大好きだぞ。初めて会った日からずっとな！！！！！」
一夏はそう叫び通信を切ると福音の攻撃を受けながらも
白式のある機能を発動させた。
『ツインリミットブレイク』
電子音声がそう告げると白式が輝きだし
始めると一夏の体から大量に血液が噴出し始めた。
ツインリミットブレイクは文字通りリミットブレイクを
連続で発動するものだが、ただでさえ反動が大きい
ものを連続で発動すると体には計り知れない負担がかかる。
一夏は福音を抱きしめるようにさらに白式の輝きが

増した。福音は振り下ろそうとするが一向に振り下ろせなかった。
「お前はここで俺と一緒におねんねの時間だ！！！！！」
「ｋｋｋｋｋｋｋｋｋｋｋｋｋｋ！！！！！！！」
{じゃあな、皆、太陽。楽しかったぜ}

残っていた専用機持ちが一夏の増援に行こうと外に出た瞬間、空で大爆発が起きた。
一夏にチャンネルを繋げようとしていた全員の専用機の画面にこんな文字が現れた。
『Ｔｈｉｓ　ｌｉｎｅ　ｃａｎ｀ｔ　ｕｓｅ』
「お、織斑先生！！！！」
「どうした！！！！」
山田先生が慌ててこちらに走ってきた。
「お、織斑君の」
「いや」
「織斑君の反応が」
「いや！！」
「織斑君の反応が完全にロストしました」
「いやぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！！！！！！！！！」

この日、唯一の男性ＩＳ操縦者である…いや、操縦者であった少年はこの世から消えた。

第27話　一・夏・消・失（後書き）

こんばんわ！！！ケンです！！！！！
自分で書いてて泣きました！！！！！！！
感想もお待ちしております！！！！
では、さようなら～

第２８話　一・夏・復・活

一夏が完全にロストした後、福音はどこかに消え去った。
そして、一夏の捜査もそれと同時に開始された。
教員が訓練機を纏い徹底的に辺りの海域を探した。
一方、メンバーの方はラウラを筆頭に福音の後を追っていた。
しかし、太陽だけは違った。壁にもたれかかったまま誰に話し掛けられても
一切反応を示さず目も虚ろになっており顔には生気が見られなかった。
「如月」
「……」
「如月！！！！！！！」
「……何…ですか」
「一夏が発見された」
その言葉を聞いたとたんに太陽の顔に
生気がみなぎっていった。
「ほ、本当ですか！？どこに、どこにいるんですか！？」
「医務室だ」
場所を聞いた瞬間に太陽はダッシュで医務室に向かった。
〜やっぱりだ！！！一夏はあんな程度で死なない！！！！〜
医務室に辿り着いた太陽は思いっきりドアを開けた。
「一夏！！！！！！！！」
しかし、太陽が考えていた光景とは真逆の
光景が広がっていた。周りの教師達は顔を両手で覆い隠し
肩を震わせて泣いていた。それは他の教師たちも同じで
箒達も同じように涙を流していた。
「え？何みんな泣いてるの？ねえ、一夏はどこ？」
「織斑君ならあそこに」

山田先生に言われ行った場所には確かに一夏はいた。
顔に布を乗せた状態で血まみれの担架の上にいた。
「う、嘘だよね。ね、ねえ一夏、ジョークなんでしょ？
ほら、いつもみたいに太陽って言ってよ！！！！！
ねえ！！！一夏！！！！！！」
「如月！！！！！」
「離してください織斑先生！！！！一夏は！！！一夏は生きてるんですよ！！！」
「如月！！！！！現実を見ろ！！！一夏は死んだんだ！！！！！！！！！」
千冬の顔はいつもの凛とした顔ではなく悲しみに満ち
涙で顔がクシャクシャになっていた。それでも、必死に我慢しようとしているのか歯を食いしばっているが我慢できていなかった。
「うぅ！！うあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！！！！！！！！」
太陽は千冬の胸で泣き叫んだ。愛していた少年が死に、さらにその死に際に
告白のようなものまでされたのにも拘らずいなくなるというものはどれだけ生き地獄なのだろうか。

「お前ら準備は良いか？」
「勿論よ。場所は分かったのよね？隊長さん」
今、箒達は砂浜に立っていた。ラウラの手には福音の現在の

潜伏先が記されたデータがありここから東に２００?の所だった。
「行きましょう。皆さん！！！」
セシリアの掛け声とともに一斉に全員が専用機を
展開させ福音のいる場所へと向かっていった。

「一夏、一夏」
太陽は一夏の遺体のそばで泣きじゃくっていた。
既に一夏の体は綺麗に洗われており血まみれだったＩＳスーツは
元の色に戻っていた。すると、突然白式が輝き始めた。
「え？な、何こ…れ」
太陽はその輝きを見ると意識を失いそのまま
一夏の胸板に頭を乗せた。

「ん、ここは？」
太陽が次に気付いた時には辺り一面、
真っ白な空間にいた。そこは何の無い真っ白な世界。
そこに太陽とは違う二つの声が響いてきた。
「ここは私達が作った仮想世界」
「だ、誰よ！？」
「ごめんね？驚かせちゃったかな」
目の前には白いワンピースに麦わら帽子をかぶった少女と
真っ白な甲冑をした騎士のような女性が立っていた。
「私は白式の精神みたいなもの。さっき一夏と話してきたよ」
「え？い、一夏は死んだんじゃ」
「いいえ、彼は仮死状態にあるだけです。

しかし、後１０分も経てば本当に死んでしまいます」
「じゃあ、どうすれば！！！！」
「一夏はこのどこかにいるから貴方がそれを見つけれたら一夏はきっと目を覚ますさ」
すると突然、何もなかった空間がいきなり太陽達が住む街へと風景を変えた。それと同時にあの二人も消えていた。
「このどこかに一夏が……絶対に見つける！！！！」

太陽が一夏を探している頃、ラウラ達は福音が肉眼で見える場所にまで来ていた。福音は黒い球状のような物の中に膝を抱えて座っていた。
「では、行くぞ」
「ええ」
ラウラの巨大なレールカノンから砲弾が発射され福音に直撃し爆発を起こした。
「初弾命中！！！！」
「いや、いないぞ！！！」
箒の言うとおり福音は先程の場所にはいなかった。
「な！あの瞬間にどこ行ったって言うのよ！！！！」
「落ち着いて鈴。きっとどこかに」
{この感じ……後ろか！？}
「みんな伏せろ！！！！」
箒がそう叫んだと同時に全員が伏せると全員が元いた場所に極太のレーザーが通り海面に直撃すると水柱をたてた。
「ｋａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａ！！！！！」

!!!」

「い、いつのまに!!」

「そんな事よりも行くぞ!!!!!」

箏は二本の刀をコールし斬りかかるが福音は

その杖で2本の攻撃を防ぐと箏を杖で吹き飛ばした。

「ぐぅ!!!」

「hyaaaaaaaaaaaaaaaaaa!!!!!!!!」

「行かせないよ!!!!!」

福音が箏の後を追いかけようとした瞬間に

シャルのマシンガンが福音に向けて連射されたが福音は

杖をまわして全弾、はじき落とした。

「そ、そんな!!!」

「だったら見えないのはどうよ!!!」

鈴も龍砲を連続で放つが福音はそれを見えているかのように

全てかわしていき鈴に極太レーザーを放とうとするが

セシリアとラウラの一斉砲撃に阻まれ進行を停止した。

「行け!!!!箏!!!!」

「ああ!!!おぉぉぉぉぉぉぉ!!!!!!」

二人の攻撃によって動きを止められている隙に箏が

刀で切り刻もうと福音に近づこうとした瞬間に

福音にさらなる変化が訪れた。

「aaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaa
aaa!!!!!」

「な、なんなのよこれは!!」

「ま、まさか二次移行(セカンドシフト)か!!」

「kuxaxaxaaaaaaaaaaaaaaaaaa!!!!
!!」

福音が叫びをあげた瞬間、全員を黒い衝撃波が襲いかかった。

その頃、太陽は一夏を探していたが
一向に見つからなかった。自分の家に行っても
一夏の家に行っても、学校に行ってもいなかった。
もう二人の思い出の場所はすべて周っていた。
「はあ、はあ、はあ。どこにもいない、どこにいるの一夏」
太陽は内心焦り始めていた。先ほどの白い騎士に言われた
時間からもうすぐ１０分を切ろうとしていた。
「……あ、まだあった」
太陽は突然思い出したかのように呟くと
急いでその場所へと走っていった。そこは……
「一夏と初めて一緒に遊んだ公園」
そう公園だった。二人が幼い頃日が暮れるまで
遊んだ公園。太陽は入っていくと思い出のある
一本の木に近寄っていった。
「そう言えばこの木に登って登りきった瞬間に
私が貧血を起こして落ちかけたのを助けてくれたっけ」
太陽は木に登りながら思い出していた。受け止めてくれた
あの柔らかい感触は今でも鮮明に思い出せる。
木を登りきるとやはり貧血がおこり目眩がしだした。
「あ、やばい」
そう言った瞬間に木の枝を踏み外してしまい
太陽は落ちていった。
〜一夏……あの時俺が私を護る、どんな場所にいようが
私の声を聞いたら飛んで来てくれるって言ったよね〜
「一夏……助けて」
太陽が衝撃に備え目をつむったが地面の硬い感触ではなく
柔らかい感触がし、太陽にとってはごく普通の感覚だった。

「ようやく見つけた…一夏」

「あ、あれ？」
太陽が次に目覚めた時には医務室だった。
「……行くのね一夏」
「……ああ」
「一夏……行ってらっしゃい」
「ああ、行ってくる」

福音と闘っていたメンバーはすでに満身創痍だった。
全員、エネルギーは尽きかけており弾薬も武装も
そこを尽きた。それに対し福音は無傷だった。
「つ、強すぎる」
箒は苦言を漏らした。それは他のメンバーも同じだった。
福音は止めといわんばかりに奇声を上げると杖に
エネルギーを溜め始め、それが溜まると箒達に放とうとした瞬間
杖を炎によって吹き飛ばされた。全員、驚きそっちの
方を向くとそこには待ちわびた人物がいた。
「俺のダチは俺が護る！！！！！」
そこには一夏が立っていた。

第２８話　一・夏・復・活（後書き）

こんばんわ～如何でしたか？
それでは、さようなら！！！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6513z/

インフィニットストラトス　　３・２・１、フォーゼ来たーーー！！

2012年1月14日01時04分発行